江戸名所図會

十一

松濤軒長秋編輯

長谷川雪旦畫圖

江戸名所圖會

博文館藏版

丘氏之記

江戸名所圖會卷之四

天權之部目錄

市谷八幡宮 薬木 稚若

藥王寺 一水 業師

大窪映山紅

繼明神祠

中野成願寺

寶仙寺 天師堂 二尾塔

阿佐谷神明宮

惹宏寺

金井橋 金青花島

神樂坂

圓魔堂

藥王寺 稚若祠

大窪天滿宮

自證院

淀橋 水車

中野長者昌蓮墓 童地 二王門 小象地蔵 稚若

堀の内妙法寺 加持 祈

牛頭辯財天宮

津久戸明神社

若宮八幡宮

松源寺

同樹寺 安産 宝珠

七面大明神社

西運寺

角筈十二所權現社

圓照寺 熊野詣 右恵稚

安養寺 稚若祠 八幡宮

須賀明神社

中野七塔

桃園

桃園觀音堂

大宮八幡宮 鞍掛

牛込池 楊枝水 三ツ水

幡ヶ谷不動堂

藥王八幡宮 鞍掛 紀寺

沙元寺

逢坂

牛込城址

西藥院

赤城明神社

内閣文庫

武藏國多摩郡八成郷
丘氏之記

涉殿山
大友松
幸國寺
感通寺
金川
寶泉寺
百八塚
菟園山
水川明神社
落合土橋
東菟岡邪姫社
海松寺
宗柏寺
頼満祖師堂
三宝伝来子観世
言田八幡宮
言田稲荷社
言田富士山
高田天満宮
山吹の里
傍ち橋
右橋
奥州橋
菟杜稲荷社
豊後小佐從大友義延舊鉢之地
宗叅寺
早稲田神明宮
子手院
赤城明神舊地
言田馬場
三佐山
姿見の橋
水川明神社
宿坂関舊跡
森雲寺
和田戸山
言田七面堂
南菟院
七曲坂
金栄院
一枚岩
落合堂
金剛寺
大洗堰
洞留橋
岡江八幡宮
大慈寺
法明寺
大沼院
雑司谷鬼子母神堂
雑司谷鬼子母神出現所
蓮成寺
牛天神社
道祖神祠
移隠庵
小村雪岑翁墓所
大塚
氷川明神
氷神社
八幡宮
宝塔巣先生墓
本佛寺
護国寺
本浄寺
宝塔寺
護持院
清立院
本納寺
法華川
佛通院
光圓寺

本水薬師如来
玄量院 小笠小町墓
氷川明神社 聖徳太子作 阿弥陀如来
猫貓橋
京蓮寺 田生 松樹古墳墓
清水薬師如来
福蓋圓福寺
十羅刹女宮 観音堂 大師堂 遍路 石清水
石井井城址
藤折里
羅漢田蓮池田鍛地
宗慶寺 拾乗屋 百八体仏 古碑
白山神社 拾乗屋 水橋
十羅刹女堂 男松 女松
子薬家城址
大堂 古墳
子薬家古城址 子神地 薬堂
三寶寺 古宝
氷川明神祠
石井井明神祠
宗星寺
西蓮院 蓮蓮院 百八体仏 古碑
三寶寺池 春日天祠
練馬城址
関川 いろは橋
祥雲寺 茨木 英祖墓
御茶園 初雪の里
巣鴨共性寺 番号
板橋澤
木下稲荷祠
慈眼禅院宮
松月院 墓
水上稲荷
板橋原
清水坂
一夜塚
赤塚明神祠
練馬長命寺 世俗云
愛宕権現宮 城 関川
賜目塚
立野舊跡
十玉院
阿蘇明神祠
療病院
庚申塚

野火留 稲荷深師水牌
平林禅寺 佛殿 業平塚
安松長源寺
狭山
永源寺 大石氏墓 洪達
小手差原
勝楽寺 七社権現 薬師堂
山住差二郎田址
還東阿弥陀如来
戸田川渡口
狭山池
豊茶羅湖
天満宮の橋
山口墓
新堀蓮蓮居住地
来迎寺
薬王寺
新宮妙顕寺 釈迦堂 宝
子安清水 地蔵
大宮氷川明神社 乾渡 義社 本地堂
遠塚
池袋稲荷墓碑 将軍塚
久米川
八國山
小野天神社 赤社 理髪修験天祠
九十九塚 横車乃 多摩天宮 新溪堂
山口観音堂 二王門 宝蓮 達磨 国分寺
宮本飯川明神社 文殊堂
池袋稲荷 薬師堂 二王門
羽黒権現宮 見泉
所澤 田郎花
狭山義経塚田址
新光寺
焼米坂
溝田出羽守資忠城跡田墓
稲荷神社
飯田原
東光寺

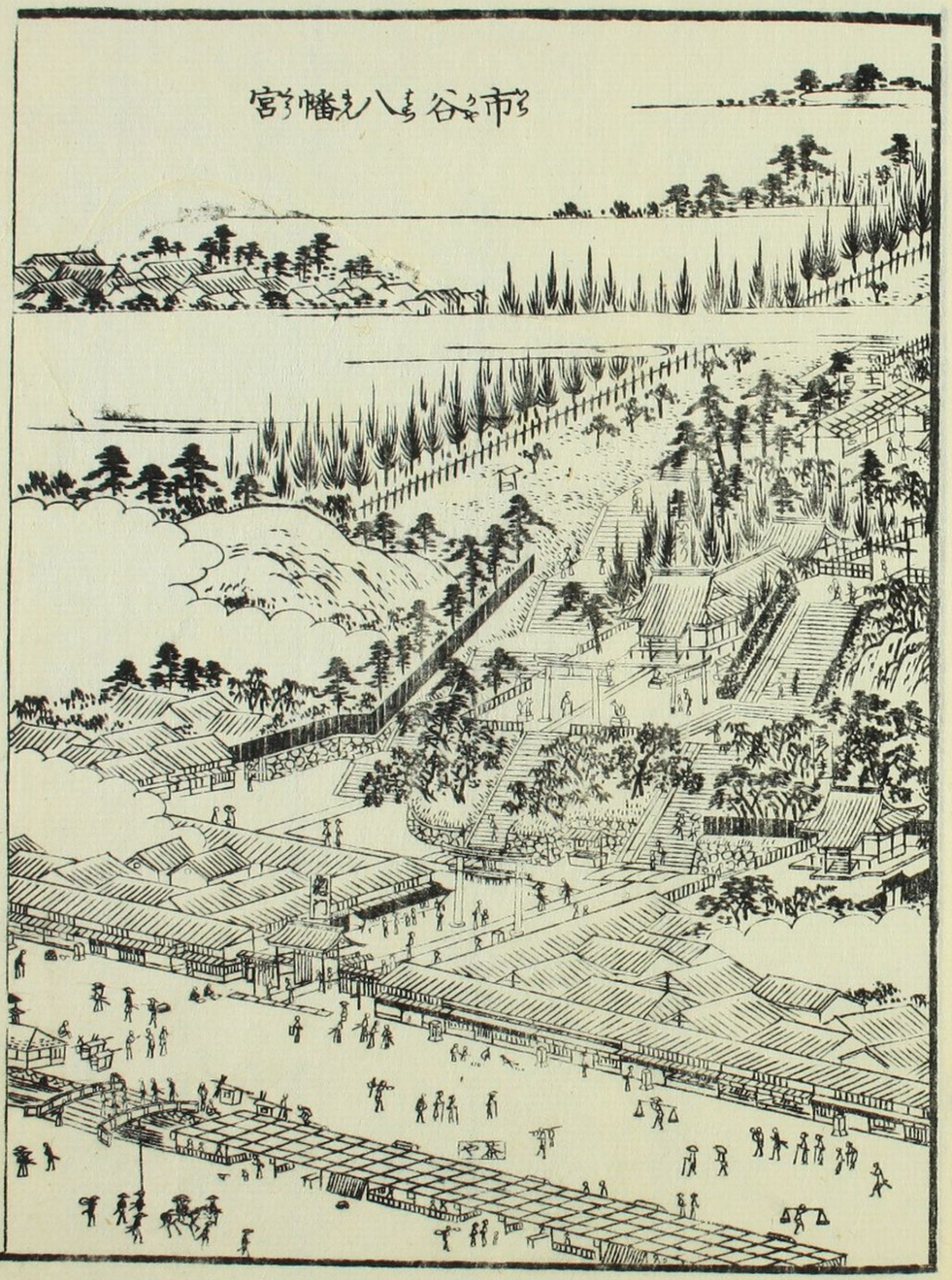
市谷八幡宮　市谷御門の外にあり　別當ハ東圓寺と号す　南紀高野山金剛峯寺に属して古義の真言宗なり

本社祭神　應神天皇　甲冑の神躰なり　相伴ふ多田満仲崇信あつき靈驗往古摂州多田の廟にあり　太田持資こゝに軀中に　應神天皇の御母君　三佛ハ愛染明王なり　本地　東ハ神功皇后　西ハ玉依姫大神　宝満菩薩　天皇の御母君

神鎮座　稲荷祠　當社地主の神なり　石階の中段左の方にあり　世俗茶木稲荷と称す其来由信ずべからず　故に略せり　此神の産子ハ毎歳四月元三の間粽を飲ず服疾を患ふる者ハ一七日又三七日と日数を定めて茶を御に祈願ハ霊験いちじるし　詳の願ひ成就せざるなしと云り

社記曰文明年間太田持資江戸城擁護のため相州鶴岡の八幡大神を勧請し山林及び神田若干を附して東圓寺を創建す　山号を稲嶺と称ハ此地稲荷の社あり　鶴岡も旧稲荷の社地なり　蓋洲俗に本くと云　又自親松推ずるに樹を栽て社木とし社壇城廓とゝのふ繁栄あらんことを祝す　土俗道灌松と号く

枝葉繁茂して今尚存せり　天正年間の兵燹より罹て破壊せしを慶長年間別當源空必僧都此頽基を憤激し己が餘鉢を傾け百歩許の遺址を點撥し艸を結ひ檐とし木を伐て扉とし一宇を再

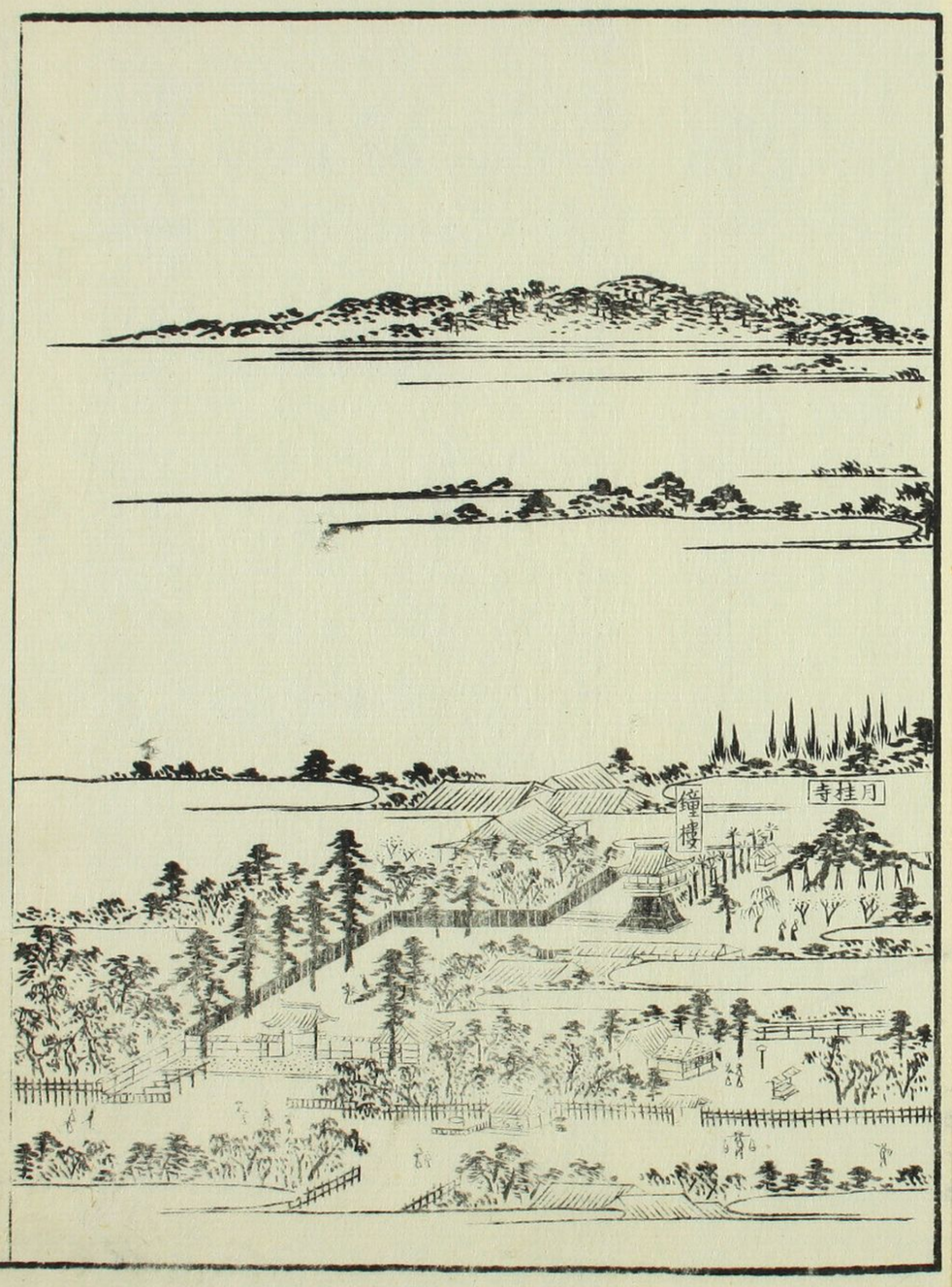

市谷八幡宮

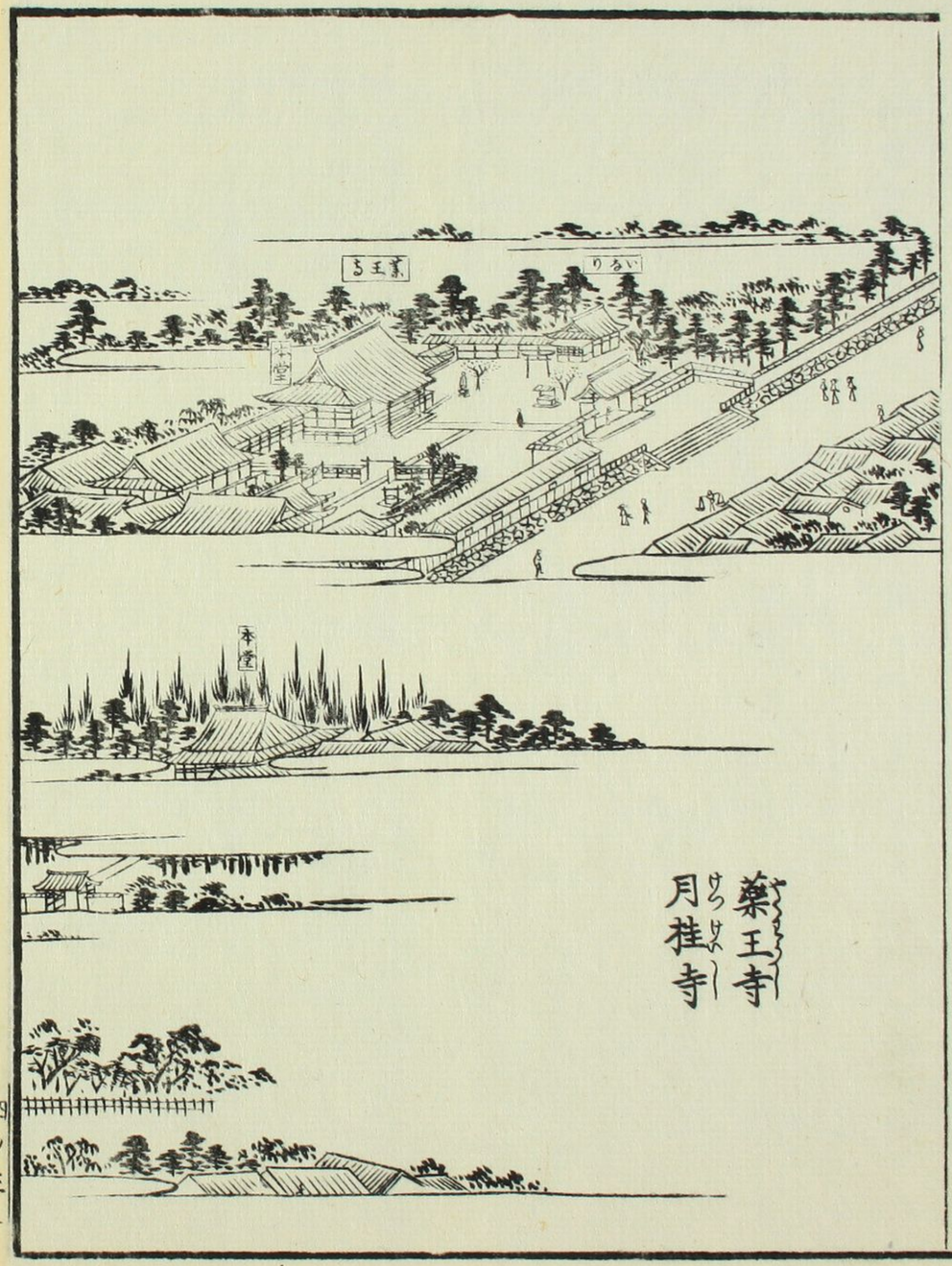
拜殿
社
大日
茶屋
或人の説に市谷昔八市の立地なりしなり
市買に作りしなりとの人然れども拝
按に鎌倉鶴岡八幡宮に蔵せる和の延文
三年十二月廿二日の基氏の古燈文に鶴岡
八幡の雜掌任阿申武蔵國金曽木
彦三郎市谷四郎等のり江戸淀路中
押領を止む正和元年八月十一日の
寄進状に任せ社家に付て
沙汰せしと
云く燈
社地に戚臺
楊弓の類ひ
ありしと考へよ
眼一又社
前の大路は
四谷への
往来なり
行人
給得

営し神殿を擬し絶えを継廃を興すを然もとも
諸を古の壮観に比すれハいまだ十之一を得ずあハを唯幣
帛を捧け楽具を盛宝祚の萬こを泰山の安に置武運の
綿こくるを芥石の長に護兼てを又萬姓の豊楽を祈るなる
耳なり

大神君　剛東御入城の時当社の来由を問ひ給ふ後
御三代　大将軍家社領を附せらる朱璽を賜ふ然に元禄十
五年壬午の夏　贊母従一位桂昌院殿当社の事蹟を聞しめされ
神輿の足らざるを憾を思ハせ給ふ黄金数枚を寄捨して新に
是を奉造なしまつる　神輿全く備はる　三基の
して著く社殿の経営も又いつゝ輪煥とゝく宿昔の壮観に倍
せり　南向亭茶話云く市谷八幡宮の旧地ハ市谷浄門の内今大番所のあ
り北の方の向ふ角山本氏の邸の隅に榎の大樹あるこれなり寛永年
間今の地に迁し祭る所なり此榎を神木と称せり

稲荷山薬王寺　東光院と号ひ同所より西北の方河田窪にあり
新義の真言宗にして大塚の護國寺に属せり閑山を澄賞
法印と号く本尊薬師如来の像ハ弘法大師天台四明の洞の
霊石を得て彫刻しまつる霊像なりとゝ貞享の初須田氏
某当寺に安置なしまつるとなり　当寺昔ハ愛染院
稲荷祠　境内にあり相伝ふ太田道灌の勧請なりとゝ八今の市谷浄門の
法神とせり　当寺の護　辺にあり元和の頃当寺より二丁ばかり北の方へ迁せり後又此地へ
正覚山月桂寺　同所三丁ばかりを隔て西南の方にあり清家の禅林か
しく鎌倉圓覚寺に属せり剛東十刹の一員なり　浜江氏通玄院
徹齋の創立喜連川家の香華院なり總門に掲る額に正覚山と
わるゝ南禅寺の普済禅師崇寛の書なり鐘楼の額に華應
閣と署せしハ香山侯書なり当寺ハ文禄年間の基立にして雪山
和尚閑山なる本る釋迦如来の像ハ天竺佛なり鑑真和尚携





薬王寺
月桂寺

来さるの靈佛あるとゝなる　腰中ハ佛舎利を收むと云　當寺古ハ市谷ハありく圓挂
山平安寺と号けるしを明暦元年し未のとし喜連川左衛門督
源頼純君の嫡女月桂院龍室宗珠大禪定尼を葬せしより寺
号を改むるとゝなる
安產寶珠　當寺ハ安を將軍足利尊氏公の臺所ことを所持ありしとあり
寺を平安寺と号さるしも出產　此靈珠を拜する婦女ハ難產の憂なしとゝく大ハ崇敬ありし始當
平安の意ハよるなるん歟
清光山安養寺　市谷谷町ハあるを林泉院と号ハ淨土宗ゆゝく京師
知恩院ハ属す天正二年甲戌の草創ゆゝく閑山を心蓮社深誉上人
貞公和尚と号く本尊阿弥陀如来の立像ハ三尺三寸あり惠心僧都の
彫造あるく京師真如堂の本尊と同水なりとのハ　相傳ハ天長年間慈覚
靈木を得く是を打割ハ木理自ら佛躰の形をなせり　一片の木をうて阿
弥陀佛二軀を彫刻し日吉念佛堂及い洛の真如堂ハ安を一片の後惠心僧都
靈威を蒙て餘材を相傳昔閑山上人一宇の精舎を創せんとし
得く此木を造とゝ
其地を求らるとしふ林の下ハ清泉涌出もるあるを　市谷冨士見坂其旧地ゆゝく今ハ尾張

公館の内ハ入とゝ　又傍ハ小き洞あるく中ハ一足の白狐頭を出く深誉
上人ハ見え茶禮もるゝ如し依く靈地なるを推知し主地ハ主
島田氏某ハ乞得く其地ハ梵宇を建るゝ　明暦二年丙申山年今の地へうつる
稲荷祠　境内ハあり万治元年正月朔日の夜白衣の老翁住侶秀誉上人の夢に
見えく告あり秀誉上人夢覚く後ハ往古閑山
上人ハ見えくし白狐あるんと直ハ稲荷明神ハ勸請をとゝり又頃此地ハ宇田
國宗　俗面火防稲荷と称也　鍛冶居住しくるゝ深く信し此神の加護ハよく火災を免れる
八幡宮　同しく境内ハあり雲州の尼子伊豫守経久城内の鎮守ハ崇めくしと故あり
造立せるとあり後月輪殿下兼実公の家ハ使ねしを経久城の鎮守とし
當寺ハ後覚僧都の持仏へし法性寺の後光佛ハ洛の壬生寺同木の地藏
を安置す
七寶山藥王寺　同所西南の方ハ行くく二間四丁斗を隔て黄檗派
の禪林ゆゝて山城宇治の萬福寺ハ属を昔ハ真言宗の古藍あり
しとも中古大ハ衰廃し絶ハ草庵の形のゝなりしを元禄の頃凌
雲禪師與復せるとゝ　凌雲和尚ハ信州の產あり武田典厩の女の腹ハ生しくし典厩の外孫ゝ同國小諸曹洞宗
海音院ゆく剃髮し後黄檗とある江戸ハ出ハ所ハ新ハ一宇
の寺院とせんるを謀ゝとゝ寺院を新建もるハ官禁ゆゝくなり

本社
拝殿
別当

大窪天満宮
社壇西向に有ふ
西向とらひ又も
東の天神と拝ま
まとも東の東由
あくくに境内
きこあり出窪あり
天満

くかりそれとも其德の至る所や竟よ免許あるべしこれハ江戸の中八箇の庵室と最も遠く一寺とある青山の海禪寺深川の萬祥寺等なりとも其中ありとの事なり

一木藥師如来　同境内よ安置せる田ハ赤坂一木の地よ立せるゆへ行基菩薩創建今ハ人徒と書り

大窪天満宮　大窪よあり一寺の本尊此地の鎮守とす祭禮ハ六月廿五日なり別

當ハ梅松山大聖院と号して聖護院宮の直末本山派の江戸役所

やゝて大先達こゝ當社を世よ來の天神或ハ西向の天神とも称せり

社壇西よ向ふ故ふ云ふべし　相傳ふ安貞年間梅尾明恵上人の勸請やそ

來と称する來由なくこれを

明慶覚運等是を奉祀せ後又太田道灌神田を寄附す然るふ

天正年間兵燹ふかゝるも烏有とゝりし頃ゑ神躰溪間の櫻の枝に

移る止りゆふ其木を瑞現櫻と号く此時青山氏某郷人と共よ謀りて

今ハ枯しといふ

祠を經營せ聖護院宮道晃法親王東國下向の時大僧都元信

をして當社の別當たらしむ

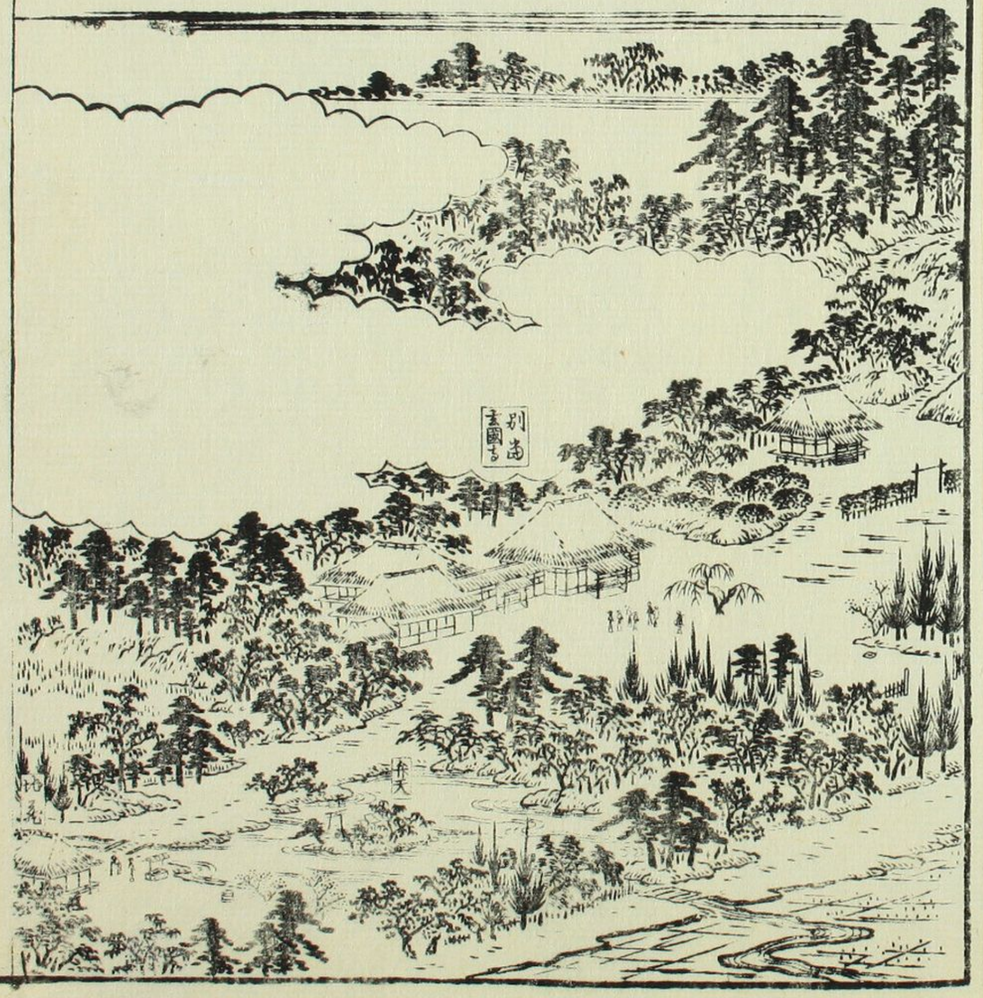
典綿こと〳〵く怠るゆへ

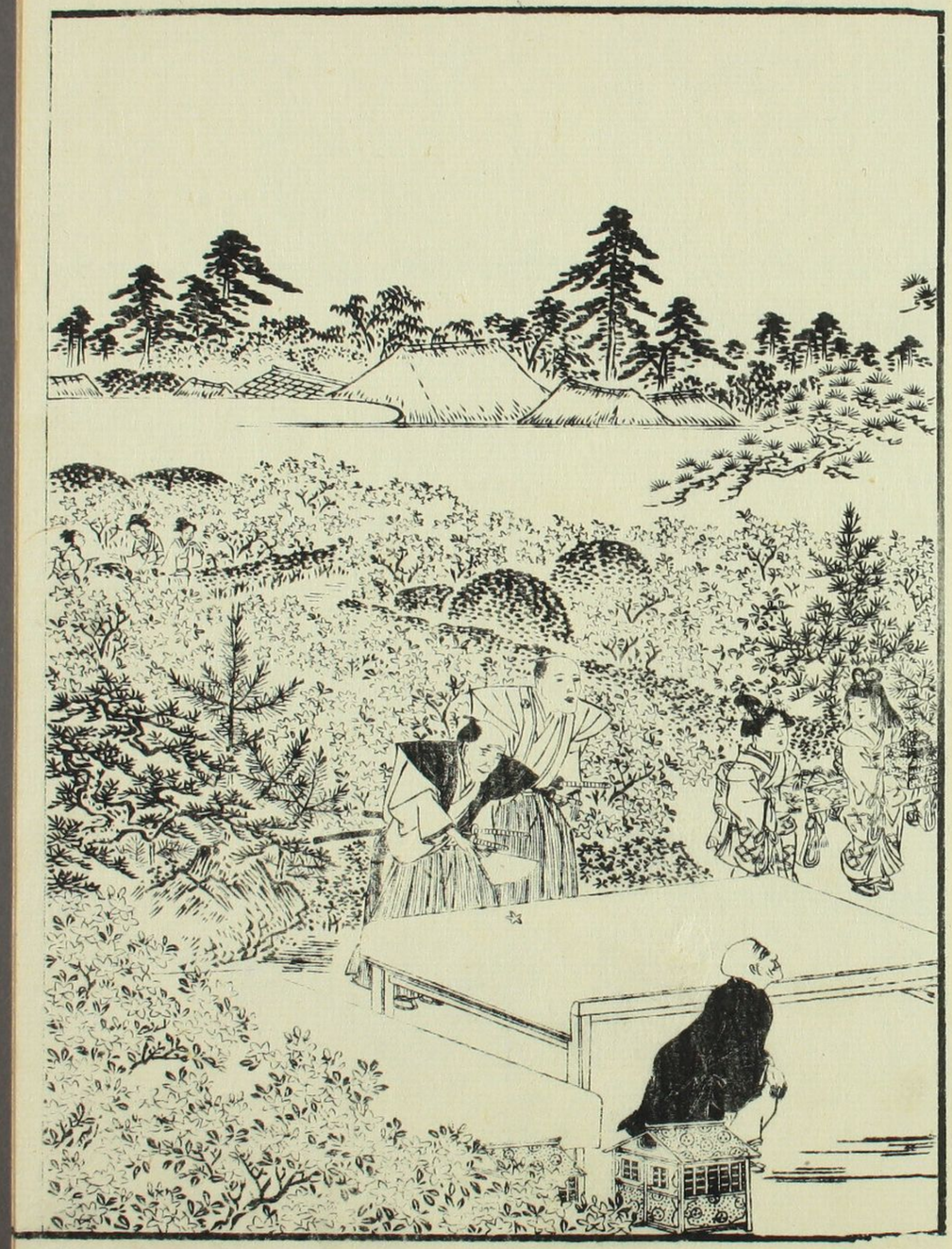
寢廟漸備りて四時の祭

七面大明神社　同東の隣日蓮宗春時山法善寺よ安置す祭礼

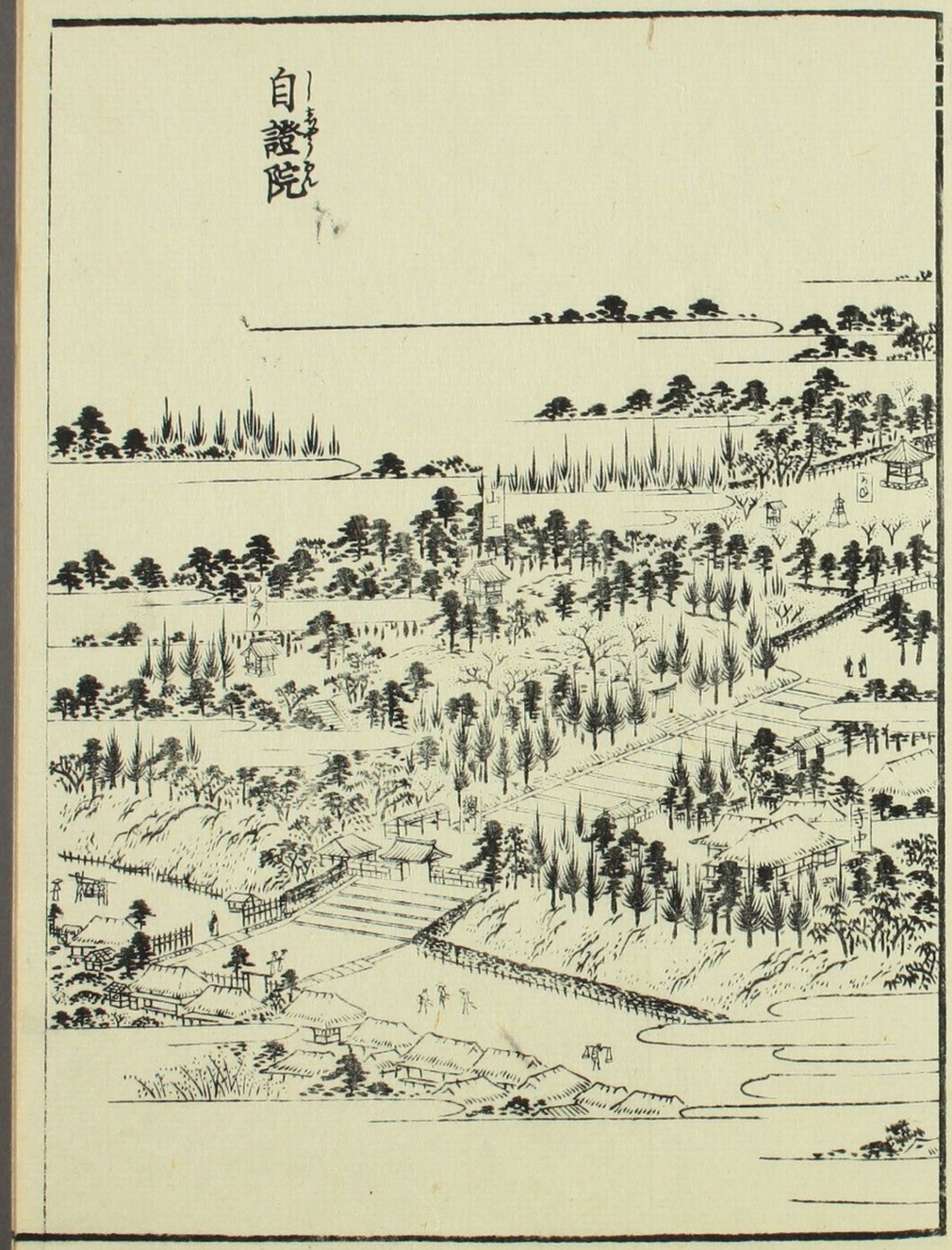
諏訪谷村（すはやつむら）

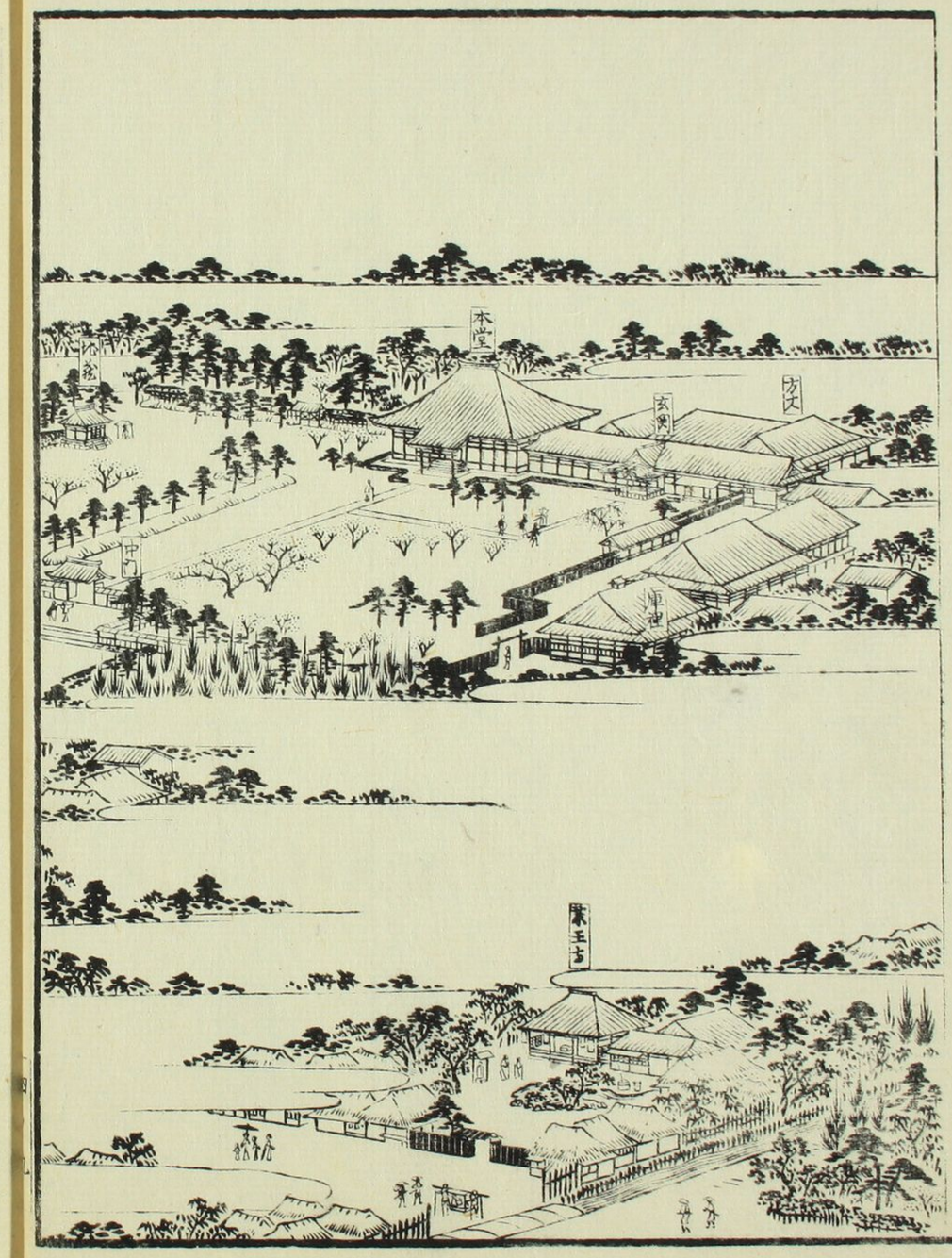
諏訪明神社





春くれば大久保の映山紅ハ
弥生の末ハ盛とひ
長丈餘のりの数株
あり〳〵其紅艶を愛
するの紫こゝふ群遊を
花形微かとゆへ
叢り開く枝莖を蔽ひ
さ〳〵て満庭紅と灌
う如く夕陽ふ映して
錦繡の林ハ
此辺の壮観
なるへし


自證院
山王
寺中


本堂
玄関
中門
蓮五寺

九月十三日より十九日まで誦経説法等あり尊影八日護上人の作なり相伴の此七面宮は江戸の地より七面宮を勧請するの嚆矢なり

往古駿州大久保より三澤氏某勧請せ萬治年間當寺へ移し

或人云三澤氏ハ小次郎政廣と云佐州の人なり後ハ駿河國富士郡大鹿村に移住す富士十七騎の一なり延慶二年己酉五月十八日ハ没せ法号三澤院法性日弘と号すと　或ハ云延寶年間甲州身延山よりこゝに移せと

境内櫻樹多くありて弥生の盛をゝて一時の奇観とせ

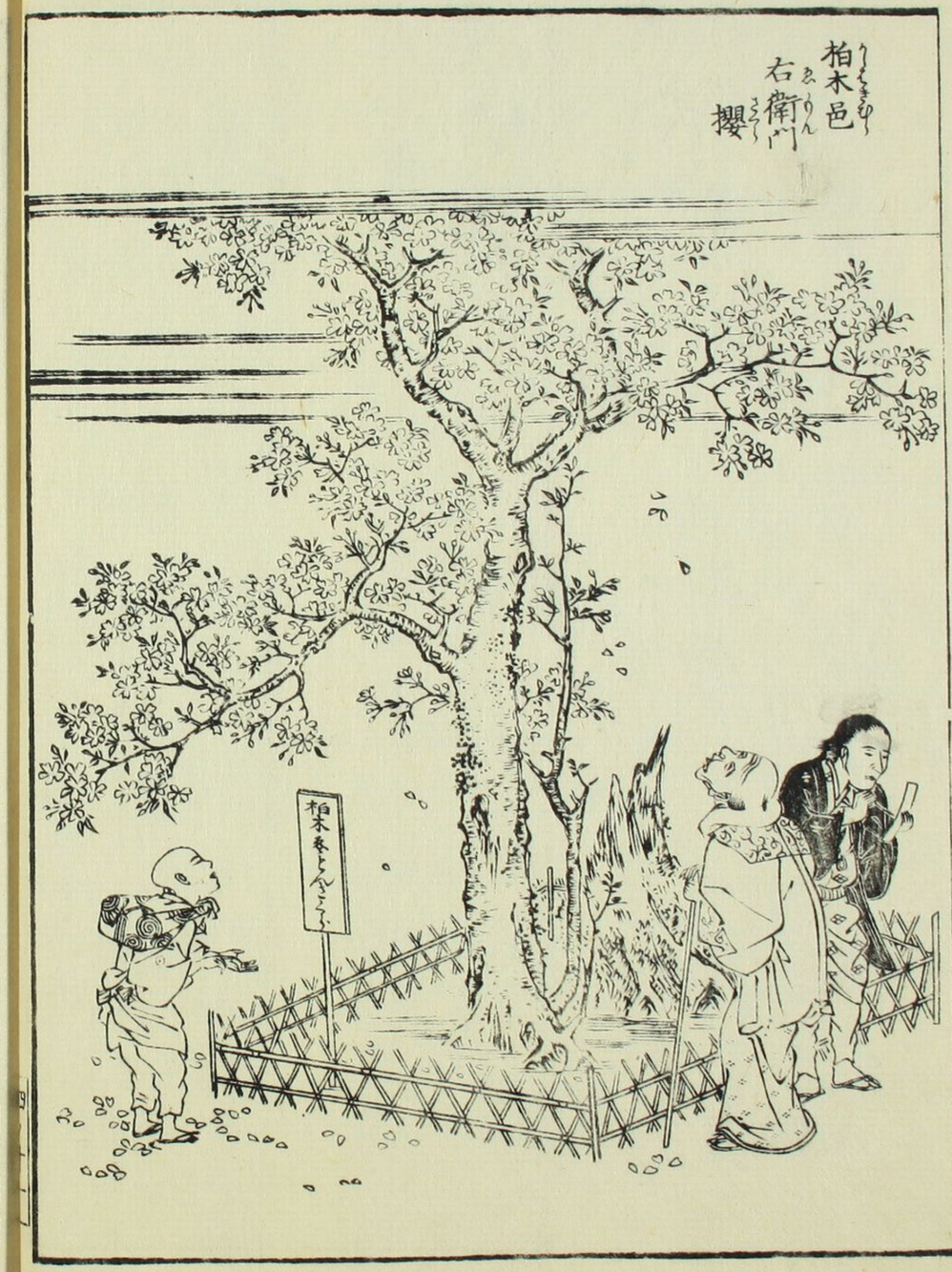
寛文三年より此神前ハ[illegible]常経[illegible]を[illegible]め永世ハ絶さじむ

鎮護山自證院　同所西の方道より右側にあり

土俗此所を饅頭谷と云

圓融寺と号ハ天台宗にして東叡山に属せり尾州亜相光友卿の御簾中千代姫君の御母堂自證院殿光山暁桂大姉御菩提のため開創せ精舍なり本尊ハ阿弥陀如来開山を日須上人と号ハ當寺始せ日蓮宗ゆゑ本理山自證寺と唱へし元文年間故ありて天台宗に改めらる當寺を世にふし寺と字ハ諸堂宇悉く種々ハ節あゝ木を集めて造立しゝるゆゑ衆人ゝ奇異なりとす因て

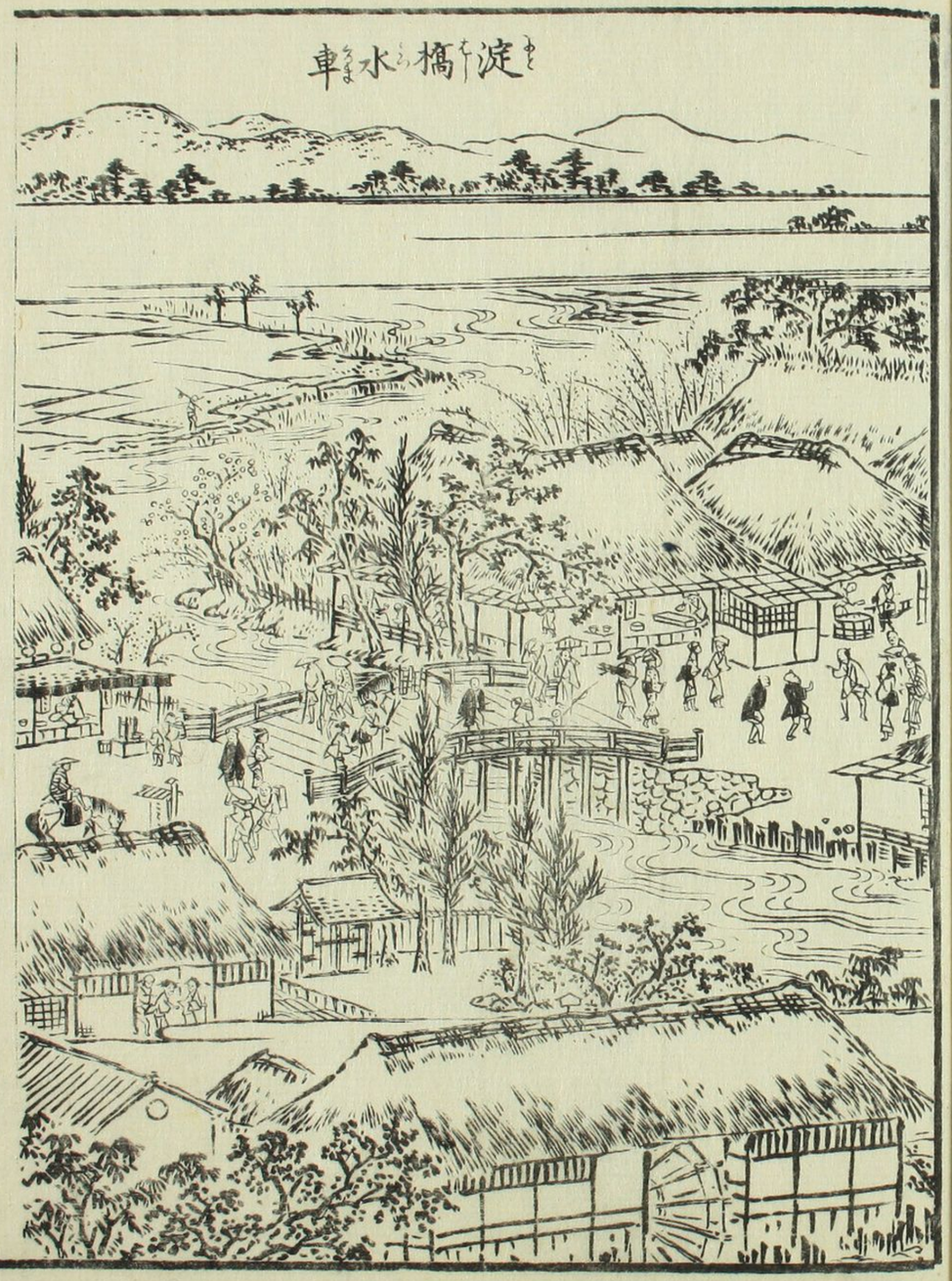
柏木邑
右衛門
櫻

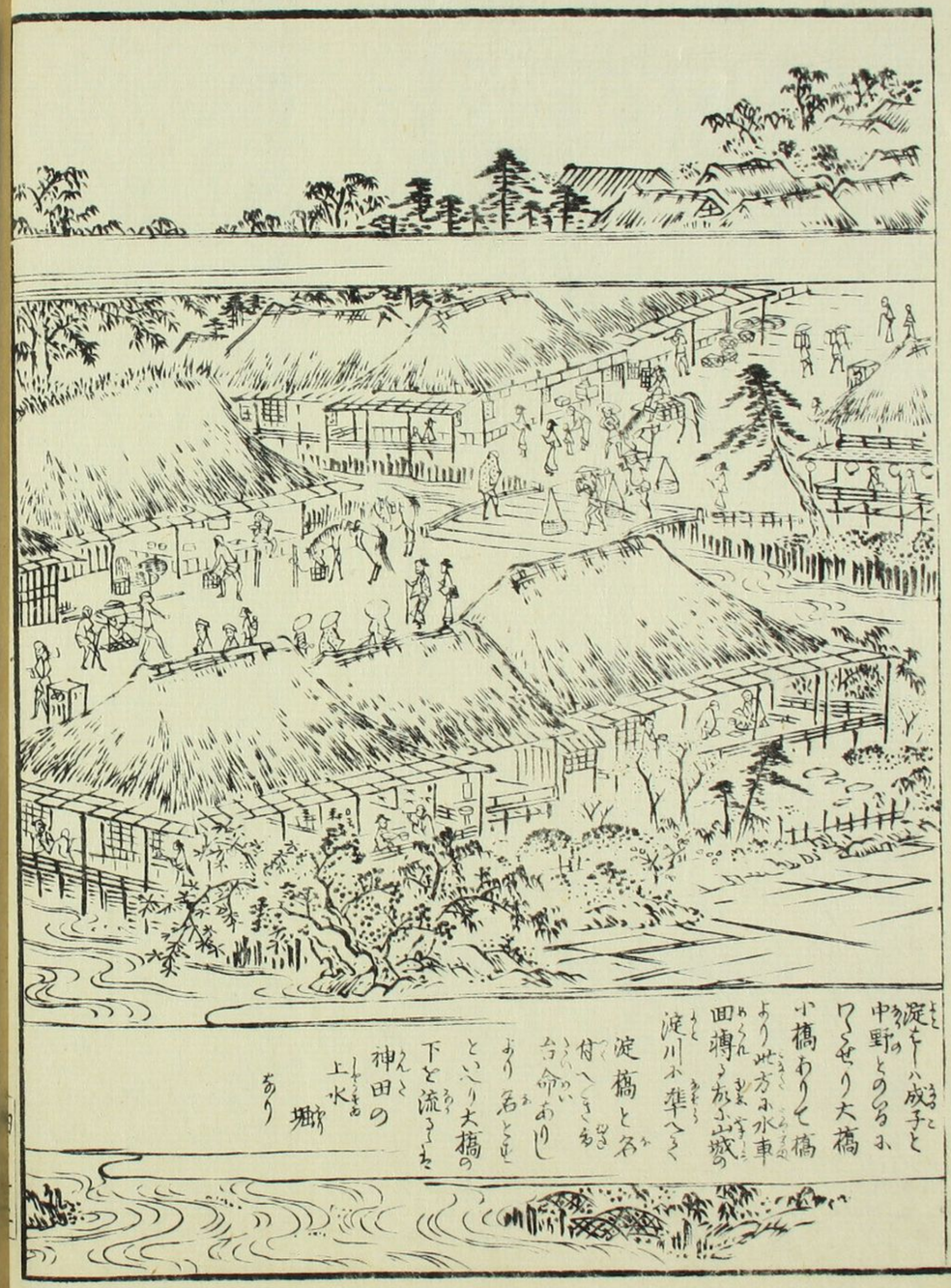


此称あり蜘蛛の井とつゝも當寺の境内よあり来由ハ誌ま堪へす
こゝふ略せ昔ハ山林ふ櫻多くもー由諸書よ見えそれも多くハ枯
失せく今絶ふ古木二三株存せるのゝ

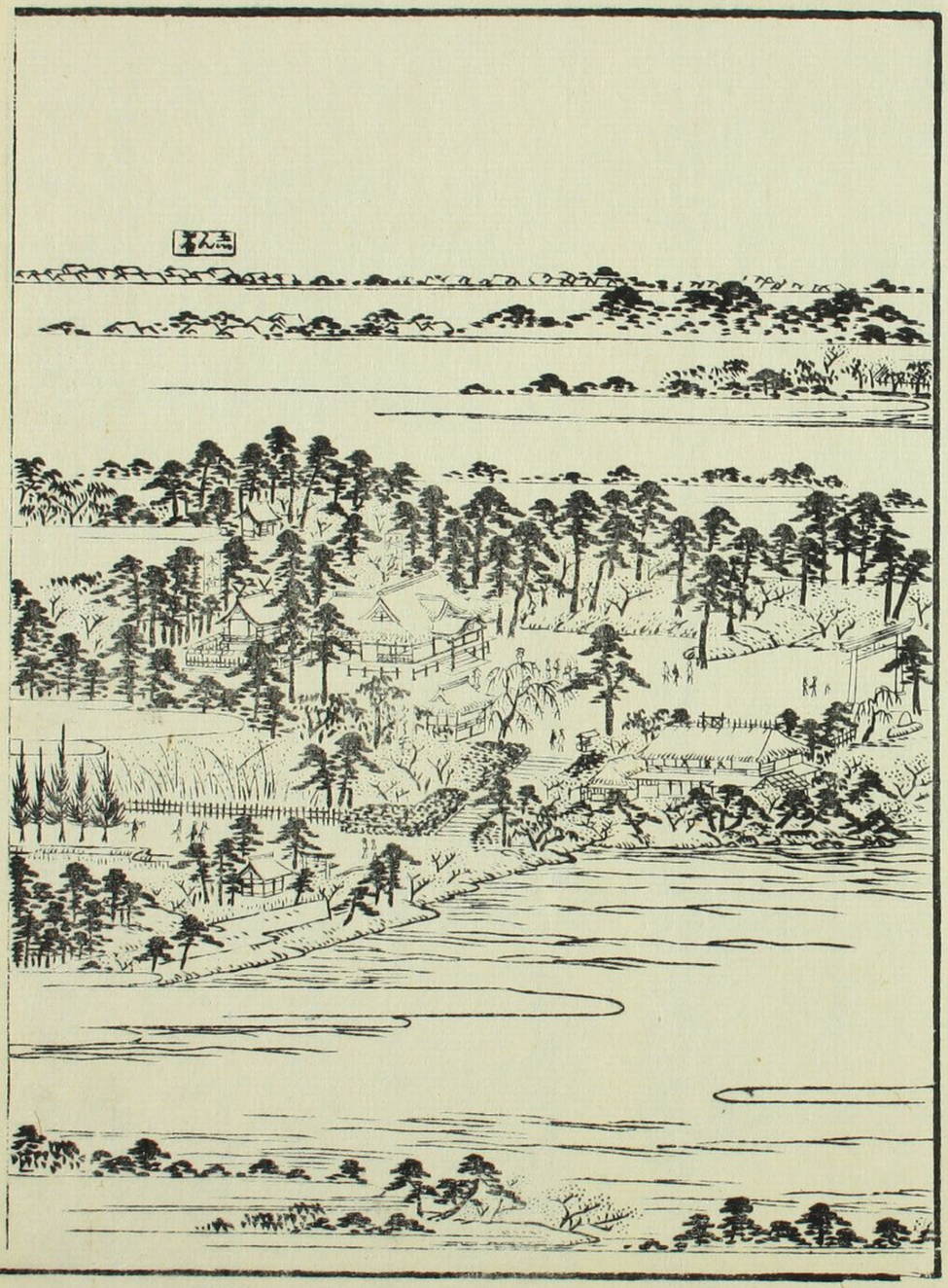
紅葉山西迎寺　同巽の方二町ゝ隔て四谷北寺町よあり　浄土
宗ゆ中て増上寺よ属せ往古太田持資の臣伏見甚七といつる人の
草創なりしつゝ旧ハ御城中紅葉山の地よありしを天正の後此
地よ移せとゝふ本尊阿弥陀如来開山ハ儀蓮社仁誉上人存公
和尚と号せ

醫光山圓照寺　瑠璃光院と号ハ柏木村よあり真言宗わ〜〜
田端の與樂寺よ属せ本尊薬師如来の像ハ行基大士の作脇士ハ
日光月光の二尊なり又左右の壇上よ十二神将の像を安ハ相伝ふ
醍醐帝の御守理源大師の法弟筑波の貞崇僧都此像を此地よ
安置しなるとゝふ兼平二年壬辰平将門成を東関よ振ふ天慶


淀橋水車

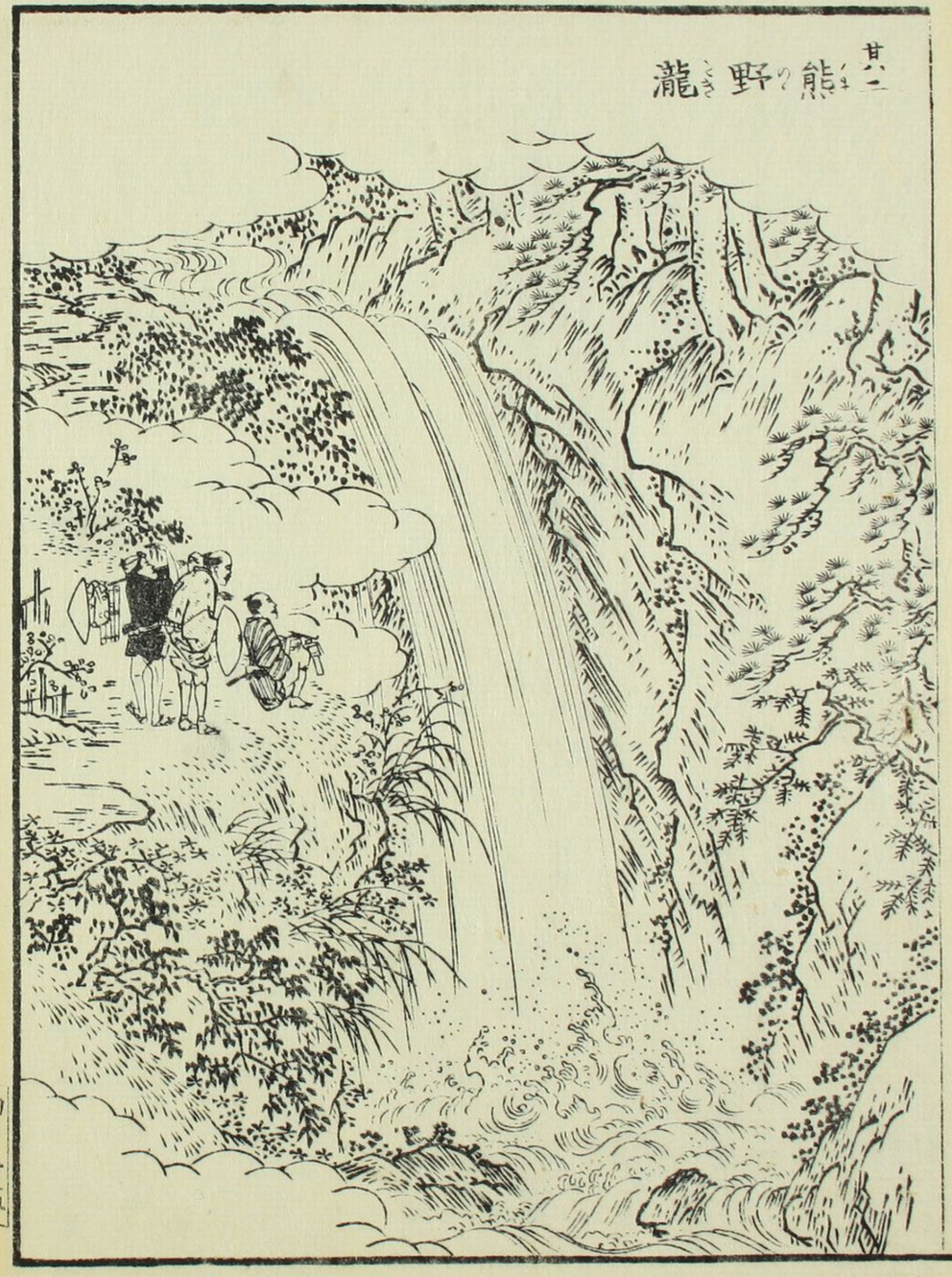

淀ハ成子と
中野とのあ
ワせり大橋
小橋ありて橋
より此方ハ水車
田搏ら成ふ山城の
淀川ハ牽へくく
淀橋と名
付へきなる
台命あり
より名とと
といひり大橋の
下を流るゝ
神田の
上水
堀
あり

三年藤原秀郷是を亡さんが為軍勢を帥く當國中野に至る
時に右の臂に疾あり軍中醫薬なく大に是を憂ひ夜靈示
あるを以て當寺の本尊に祈るに病苦忽に平愈せり時又
將門征罰の願書を献じ果して將門を誅戮し故に凱陣の後
堂宇を建立して圓照寺と号し後建仁二年壬戌に至り江戸
氏部大輔頼助修営ありしに弘安八年兵燹に罹て佛宇
田禄を失ひ後永仁元年癸巳頼瑜僧正茅宇を葺覆し旧記を修補
もとゝへども天正中越の景虎此地に戰ひ頃後兵火の為に廢
亡せしを寛永十八年辛巳に至て春日局官裁を乞て重く修
復せられ
右衛門櫻 當寺堂前にあり單瓣にして芳香殊に勝れ類なき名樹なり里
諺に云昔武田右衛門といふ人こゝに住んで此櫻を愛し指木村にあり
名さくらあるにより源氏物語の柏木の右衛門と云名に就きしかく呼しとあり
小田原北条家の所領後帳に後部惣四郎所領柏木角菩
鎧明神祠 圓照寺の艮の方にあり圓照寺の持なり 相伝に藤原秀郷
將門を誅戮して凱陣の後將門の鎧を此地に埋蔵して上に充倉を
建て鎧明神と称せしに社前に兜松と称する古松あり是も其
兜を埋しる印と云
淀橋 成子宿と中野村との間に架せる大小二橋あり橋より此方に
水車あり昔 大將軍家此地に狩放鷹の頃山城の淀に準擬此
橋を淀橋と唱へし旨 上意あり因て号とせり
和名抄に武蔵國豊島郡に餘戸と云村あり此地は豊島郡と多磨郡の中間にて上古の
あるべし餘戸橋と唱へしなるべし或人云淀橋は餘戸橋なるべ
旧名は面影の橋姿見すの橋なとも呼しとあり
十二所權現社 淀橋の南角苦村にあり祭神紀州熊野權現に同し
本郷村成願禅寺奉祀の宮なり 社記に云應永年間鈴木莊司
重邦の後裔鈴木九郎某なる人あり紀州藤代に住りしに流落
して此中野の地に移り住す熊野權現は産土神なるより宅の辺の
丘陵を開きて小祠を営む信深なるに然に九郎成時北總葛



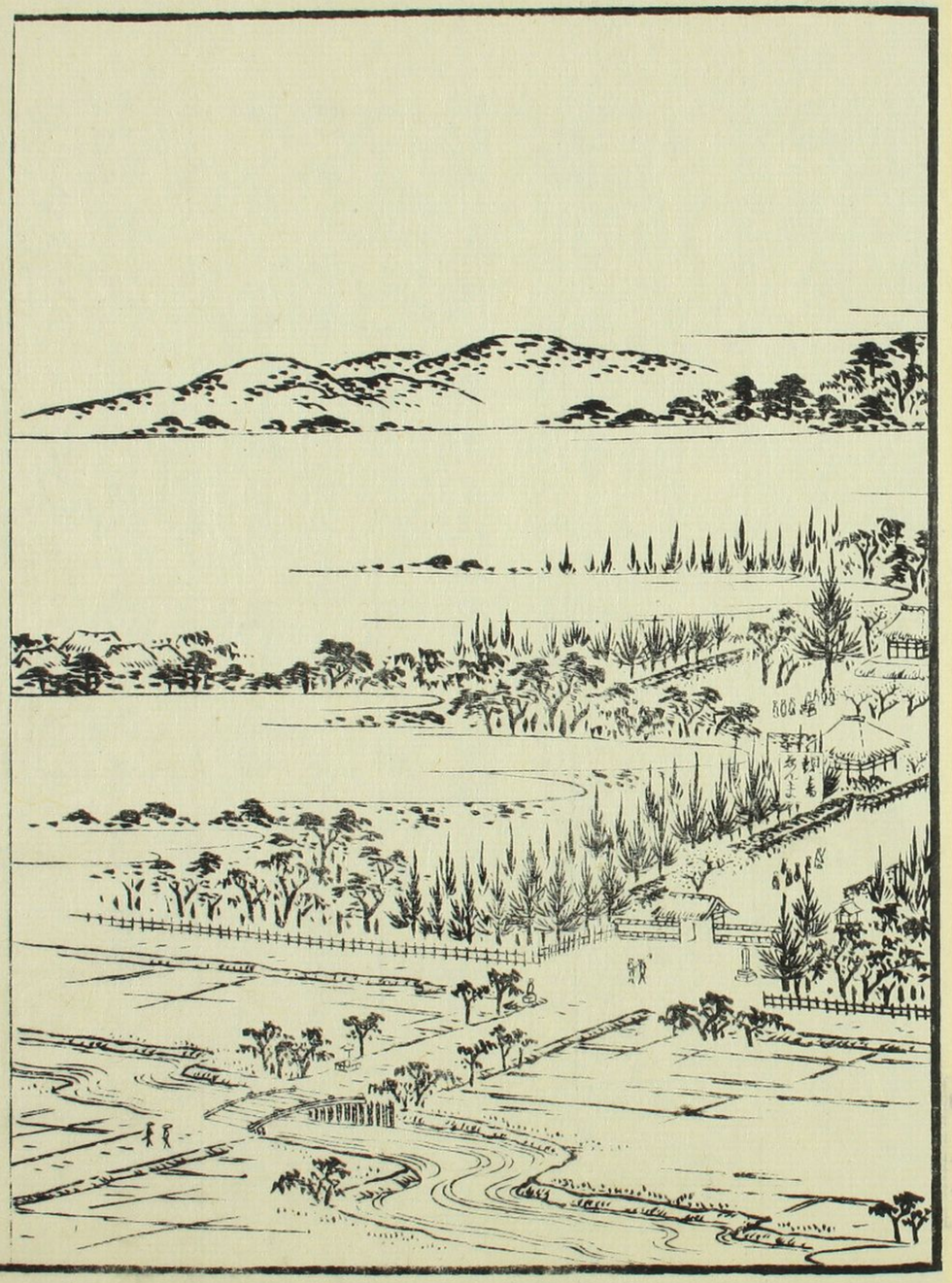
角菩村
熊野十二所
権現社

世人誤く
十二そうと
ゆふ景よ
して遊観
多し

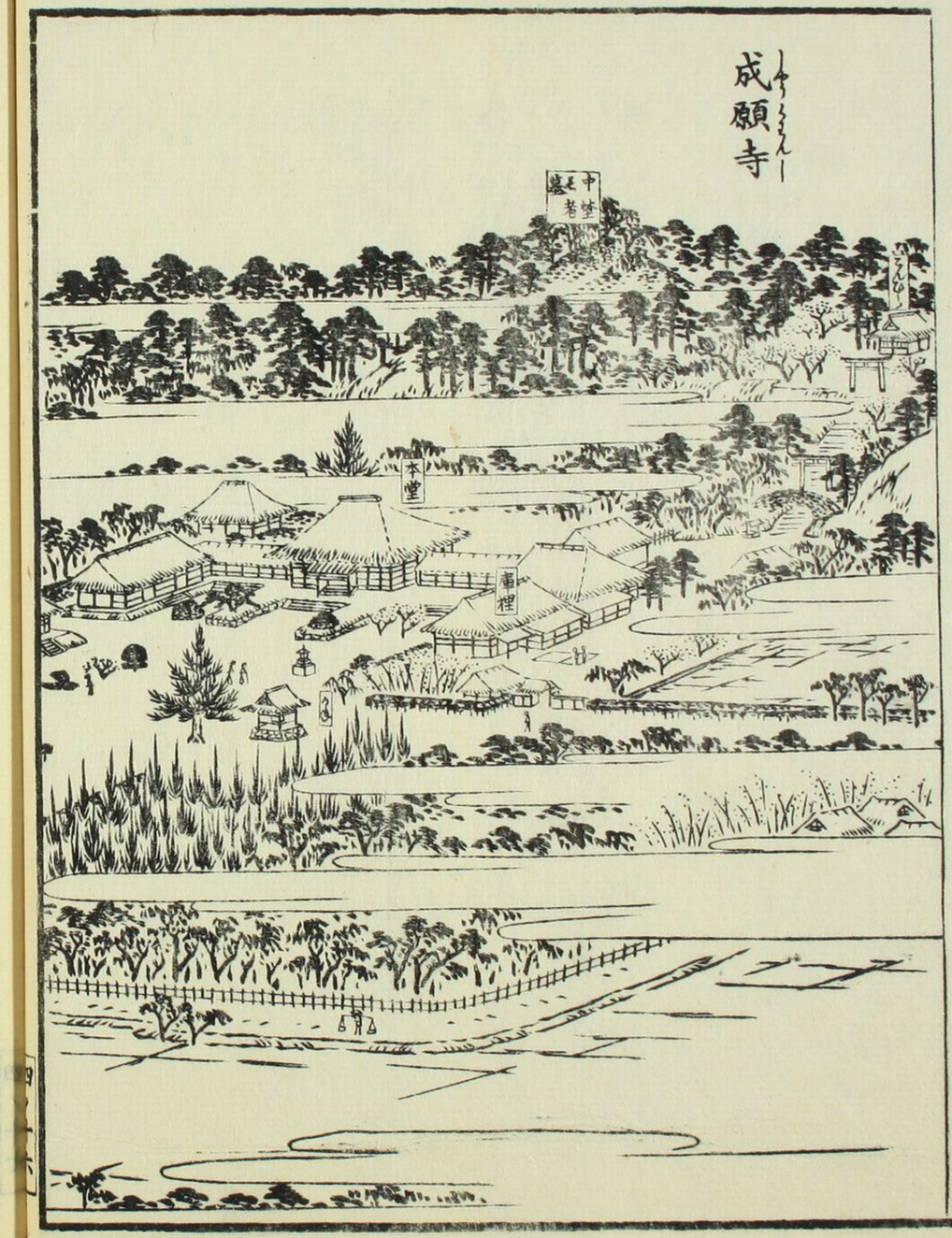


其二 熊野瀧

西の市に飼ふ所の疲馬を賣て價一貫文を得て帰路に臨て
浅草に至て其得る所の錢の緡を解て一ツに悉く大観錢とし
九郎心裏に思ふ所あり即観音堂に詣て宝前に
なりて多を空うして帰り夫より後ち幸福を招く
其家大に富をなせり故に應永十年癸亥社を再興し更めて
十二所の神を勧請し田園等若干を附て数世を歴て
後荒廃に帰す神燈光疎に祭奠常に闕とも猶感應の
速なるを以て村民恐怖し遂に享保の頃官府に訴て成願寺
奉祀の宮とす毎年己降神供厳重に祭祀懈なし
九月廿一日を祭祀の辰とす
多寶山成願禪寺 同所上水川を隔て西の方同し川端に臨て
本郷村にあり曹洞派の禪利にして相州田原村香雲寺に属す
當寺八角笘十二所権現宮の別當にして本尊釋迦如来の像は聖德



成願寺



太子の真作なりとぞ前の十二所権現の社記に載る所の鈴木九郎
某本國紀州を出て其妻と共に此中野の地に移り住たりしが後
幸福を得て其家富栄えされども宿因にやあり名一人の娘
俄に死して蛇形を顕はせしが春屋禅師相州関本の最勝寺に住せしの法化に依て
畜身を解脱し上天せしを得しが十二所権現宮の手洗池を蛇池と
号くとぞ時春屋禅師の着せし法服今に当寺に在り彼蛇の栖しし故に土俗ハ
受戒して自ら正蓮と改む又居宅を壊ちて精舎とし女の
法名正観の文字を以て其寺号とす永禄二年小田原北条家女の法名を真窓正観禅尼と
の所領役帳に島津又次郎とかゝる時ハ永禄の頃迄ハ正観寺と号を往
たゝハ当寺のなり寺とハ改し諸堂地に三層の塔を造立し生涯憂塞を勤行して
遂に永亨十二年庚申の歳終をとる三層塔ハ今中野の通り道の
境内に塔屋と称する地あり平日閉じて当寺の右にあり其の系下を尋ぬべし当寺
の釋迦如来の像も其塔中の本尊なり其後文明八年丙申に
春屋禅師より四世川庵宗鼎和尚当寺に董席して傳燈

挑く法嗣今に連綿たり總門に掲げたる多寶山の額本堂に掲る
成願禅寺の四字ハ雪峯和尚の筆なり

中野長者正蓮墳墓 同し境内叢林の中にあり庭基鈴木九郎の墓なり其石
武州多摩郡中野の中正観寺とかゝる冊子に塔今崩れて半土中に埋れてあり案一本とかゝる冊子に
ありと云云昌正同音なり同巻高田百八塚の条下と應照院に棟札に朝日長者昌蓮と記しく

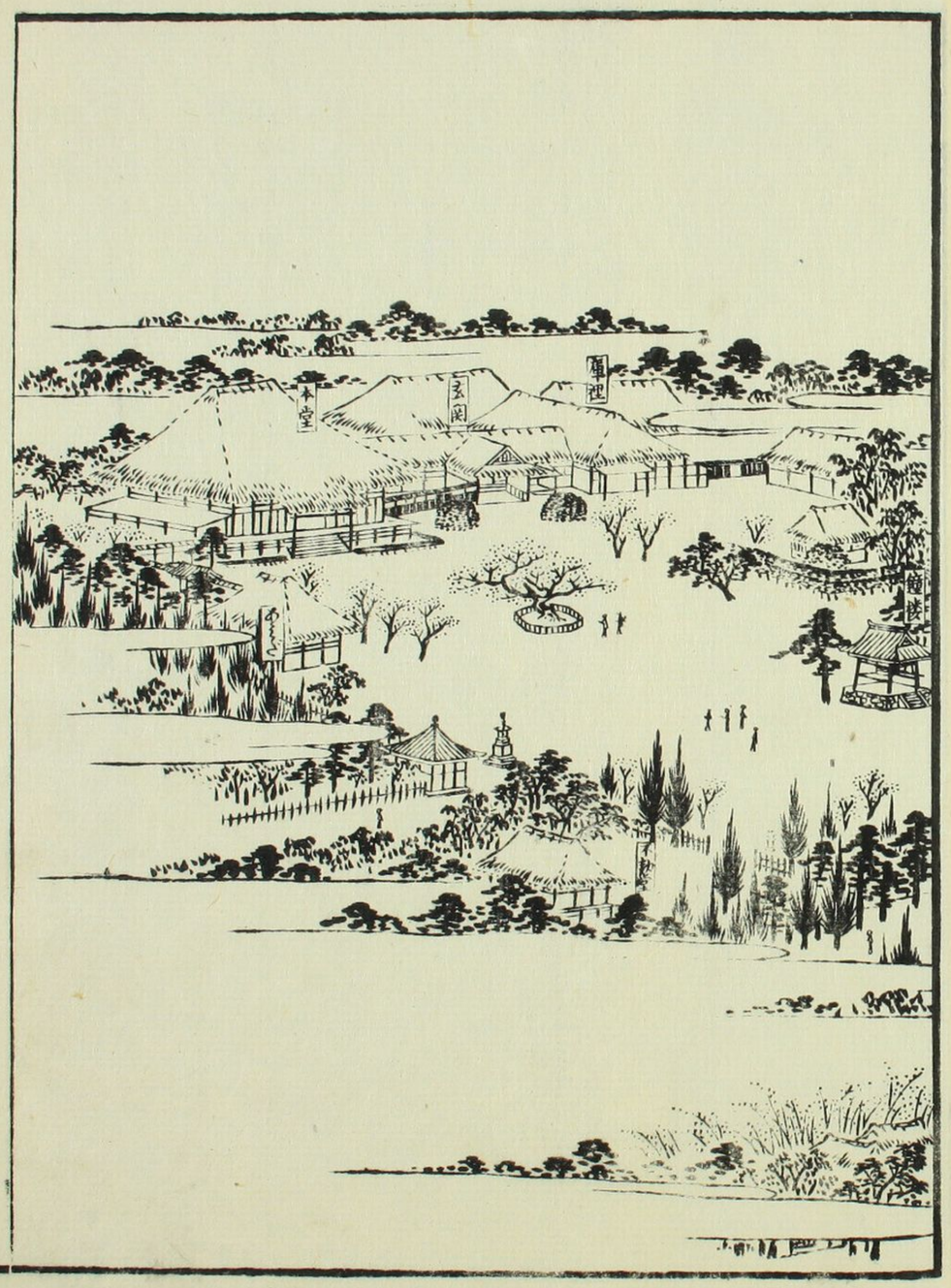
中野 泛橋の西をいふ 泛橋の下を流れ上ボ川と以て豊島郡と多摩郡の郡界とす此地ハ多摩郡に
属す武蔵野の中央なるを云ふ 永禄二年小田原北条家の所領役帳に太田新六郎知行の中に中野内阿佐ヶ谷又中野大塚源七郎とかゝる地を
注し加ふ

北國記行 むさし野の中にて中野と云ふ平重俊とかゝるうゐ
ぶかくの手ふもたる白雲の中にて
うやとりの野ふようり

爲さらふ尼ハ神ゝり村消のまゝ
中野七塔 今其所在を志るゝ人云三所もそなはれてあり 光惠
とて里語に中野長者昌蓮佛に供養の為高田より大窪迄北
間に百八員の塚を築くと云伝ふ 次の高田百八塚の条下と應照院七塔と

いくばくと其類のものあるべし扨又中野の通り右側叢林の中に三層の塔あり七塔の一なりと傳へ云中野長者鈴木九郎正蓮ら建立和尚して昔ハ成願寺の境内なりしを後世今の地に移せり今大日如来を本尊とす（昔の成願寺ハ粉河寺の格式なり後世成願寺の格式なり）中に長者鈴木氏夫婦の肖像と称するものを安せり

明正山宝仙寺　無動院と号し寺領あり古義の真言宗にして同西の方右側にあり良辨僧都開基なりと云伝へ本尊ハ弘法大師等身の像なり願行の作なり中興開山を聖永和尚と号し往古ハ大刹なりて此地より二十町北の方阿佐ヶ谷の地にありしを足利の代に至り今の地に迁すとなり其頃大永の頃兵燹に罹りて佛殿僧坊悉く焦土と成る因て其頃の旧記も廃亡したりと開創の時世系詳なり境内普門院に不動尊の霊像を安置し良辨僧都の作とも或ハ願行の作とも



中野
寶仙寺

當寺ハ享保十四年
交趾國より貢献
もくあの馴象の
枯骨あり

馴象之枯骨　享保十三年戊申交趾國より鄭大威なる者廣
南より產るなの大象牝牡二頭を率ゐ来て本邦へ貢献せ
ん大泥國より来るとあり牝象ハ　林信言の事物権輿
同申年九月上日長崎ふ於て斃せり　同年六月十三日長崎ふ着せ　同十九日上陸す
潭綿譚官二合李錫明廣南　翌十四年己酉三月十三日　象双二人日潭数
陳阿卵等各後ひ来る　崎陽を〳〵四月
十六日大坂ふ至り同二十六日伏見より京花ふ入同三十八日　禁腑に朝
〳〵　天覽を蒙る　爵位なくして禁闕ふ参入の例なれハ　勅類このゝ
後四位ふ叙せらるゝ廣南後四位白象と称へられ　上覽あり
同五月二十五日江戸ふ迎へあひ同二十七日　當中ふ於て
平後中野ふ象廐を建く是を飼せられ〳〵ふ二十　餘年を歴く
寛延の頃斃せり　常寺ふ存せるものハ
牡象七歳　牡象の枯骨
惣身灰色ゆゑ頭の長さ二尺七寸　頭ハ俯さす又額鼻の廻り
長さハ四尺程　或ハ三尺　同圍一尺五寸　末の方を六寸許　鼻ふ
肉爪ありくよく針を拾ひ芥子をつまむ水を飲酒を吸ふも又鼻を以て食ふる
時も鼻を以く捲入る一身の力ハ皆悉く鼻ふあり　鼻ふ
以く地を柱へく起く　牙の長一尺二寸　程　或ハ一尺四寸　圍ハ元の方も
地を去る事常ふハ頃ゝ　牙の長一尺二寸　程　或ハ一尺四寸　圍ハ元の方も
一尺六寸許ありといふ

眼の長さ三寸　或ハ一寸五分形　篠の葉の如と云　耳の幅八寸餘　或ハ一尺三寸とも形ハ蝙蝠の翅
長さ七尺四寸　同圍一丈　背の高さ五尺　或ハ五尺七寸　足の長さ二尺二寸　同
又銀杏葉の形ふ似くりとも　胴の
圍一尺五寸　或三尺五寸　圍二尺五寸とも　栗の形ふ似くりとも　足の形ハ圓柱のやうく指なく爪ハ五枚
羊腸を下るふ電のやく深き水を渉る　惣身ハ　捷く性能人ふ馴く意を尾の長さ
解を故ふ象奴ゝる者其頭ふ跨を鉄釣を以て釣進退曲折左右もといふ
三尺三寸　或ハ二尺七八寸とも形　牛尾ふ似くりあり
牝象　五歳　惣身灰色ゆゑ頭の長さ二尺五寸　鼻の長さ二尺八寸
胴の長五尺斗　同圍八尺六寸　背の高さ四尺七寸　或ハ四尺　牙の長さ五寸
程あり〳〵其餘ハ牡象ふ等しく〳〵　此牝象ハ長崎ふあり　頃斃しゝ江戸へ
飼料　一日の間ふ新菜二百斤　篠の葉百五十斤　青草百斤　芭蕉二株根を省く
饅頭五十　橙五十　九年母三十　又折節大豆を煮冷し置く是を飼　湯水一度ふ　あんか
大唐米八升　其内四升程ハ粥ふ焚く　青草の中
殊ふ俗間角力取草と称せるものを好て食ふ　青草ゆゑ粉を莖穂とのふ
飼或ハ藁大根のゝうひも食ふゆゑ又好んで酒を飲といふ

時しあれハひとの国ゆゑ〳〵ものゝ九重ふふるゝうれしき　御製
甘露集
〳〵〳〵ふきさし唐やまとも世ハ幾ゑ里ゆる　霊元法皇

情しき所のこゝろよかるへしぬやうとのまもれなそ　同

これもまこと此所ありとかきつめてこそもむかしきしのやまとことのは　同

不味直院集

此園ふるさとのもあるかくやこのまもこゝろ　光栄

仏のまをとうの敷のまつやこゝ実をもむるも国ん代をそ　同

芳雲集

たゝへしそ民のもうもそへくハ豊の世のきさしゝそこゝる　実蔭

いとやそこゝぬをしられやまとあるきさやそ国つの名ハきそも　同

民をこふたをけくきしのたゝさとあらんよそやうあへき　同

家集

此あをもるくこゝのやんあるをこゝ国ふふをこゝん　通躬

ものをもむをあ里をれさりもるくきしのこゝろをあ　公福

ゝあきくしをれさうひのこゝろをつしなかそこゝるもつし　為久

桃園　同所西北の方十町ばかりを隔つ享保の頃此辺の田畝ふ悉く桃

樹を栽しめあひをる頃　台命ありて此地を桃園と呼ばせあひ

しかるに今も弥生の頃紅白色をまじへて一時の奇観なり此地ふ

大将軍家浄遊猟の時の浄腰掛の地あるを又岡の前を流る

小川ふ架せる橋を石神橋と唱ふ　此あるれハ石神の三宝寺の池より発する所の余流なり

桃園観音堂　土人ハ桃堂と称せり同所高圓寺村の高圓寺と

いふる禅林ふ安置せ水ぎるハ聖観音ゆゝ恵心僧都の彫像なりと

いふを　当寺ハ中野の成願寺ふ属せ弘治年間の草創ゆゝ開山を建室和尚と号く

山号を浄殿山とも云ふ　大将軍家度く当寺へ立寄らせひ假の浄殿ありしハ当寺の

称せへき旨　台命あり享保ふ中野の地ふ桃園をつくりあひ田圃の

間ふ桃樹を多く栽しめ桃園と命せられしとなり故ふ土人ハ当寺を

桃園の旧地なりといふ

阿佐谷神明宮　同西の方阿佐谷ふあり中野の通りふそハ右へ入る十

八町計なり　阿佐谷ハ小田原北条家の所領役帳ふ中野内阿佐谷とあり　祭神

伊勢ふ相同し神躰ハ一顆の霊石なり　毎歳九月十六日を祭祀の

太田新六郎の所領中ゝ昔ハ中野ふ属せ小名なりしと

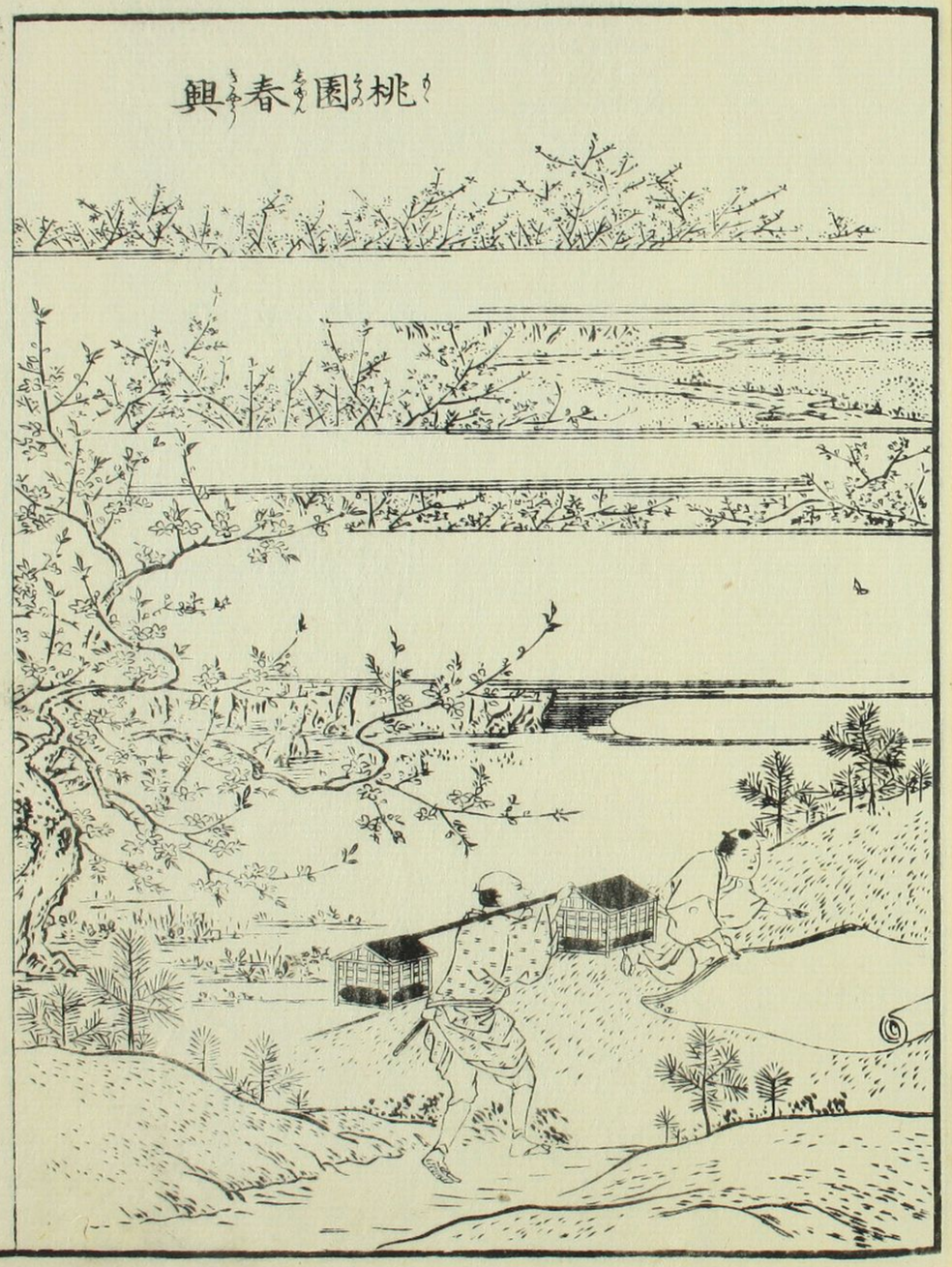
辰とを別当ハ真言宗ゆゝ阿谷山世尊院と号を　中野の宝仙寺ふ

旧地相伝ふ　景行天皇の四十四年　日本武尊東夷を征伐しのひく

属す則宝仙寺の

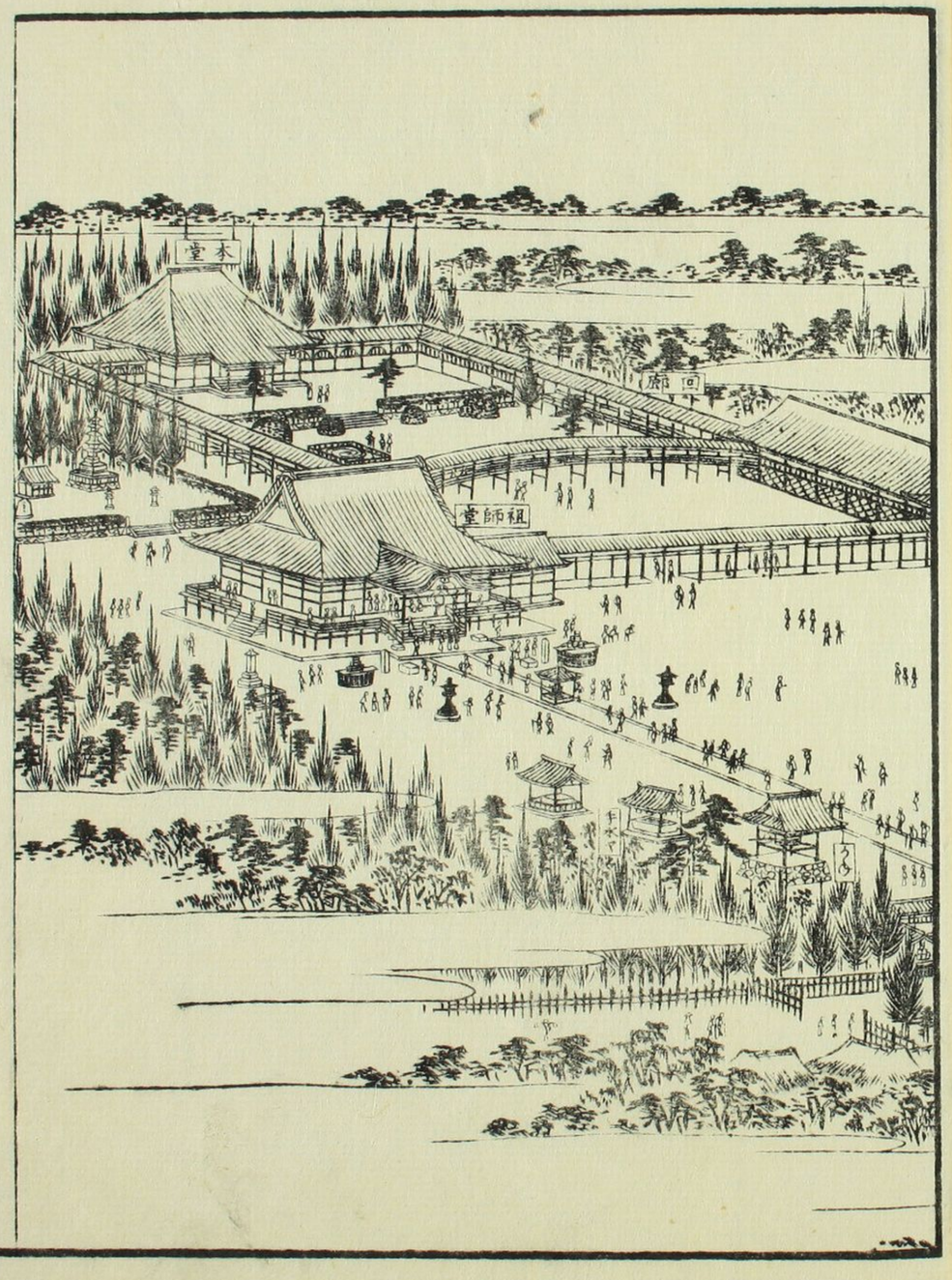
浄凱陣の時ふ地ふ休らひのひしハ平後土人尊の武功を

桃園春興



墓ひきり地を封して一社を経営し神明宮を勧請す然るに
建久の頃此地の農民横井兵部と云る人（此人の遠裔今も此地に住し子孫連綿）
頼義朝臣奥州征伐の時此地に此横井氏の祖兵部と云者随兵に加
曲事家に急に病に臨て戦場に赴くに及り終に農民と多
伊勢と云 祈願あるに伊勢太神宮へ叙詣せんと勢州飯保野の
驛舎に宿す其夜太神宮の霊示あるに翌日宮川の水中に
一顆の霊石を得るに依て神意に任せ旧里に携へ帰る件の神明
宮の社に安置しに神躰となるとの事なり其後祇海と云る沙門
神告あるに社を今の地に迁せり（其旧地は七八町東の方にあり土人これを元伊勢と称す）
日圓山妙法寺 堀の内村にあり日蓮宗一致派にして頗る盛大の寺院
なり宗祖日蓮大士の霊像は世に除厄の浄影と称す日朗上人の
作にして先は碑文谷の妙法華寺にありしを元禄の頃故ありて
法華寺を天台宗に改られし頃此霊像をは当寺に移しまゐらせ
たるなり（当寺住侶日性師の代なり）相傳に弘長元年辛酉日蓮上人四十歳伊豆の伊東へ

配流せらるる日朗師随身しに其地に至らんとせれと此事協はず
依其時上人の命あり日朗師は鎌倉由井の濱に止る日夜師の
赦免を祈請す或夕同し海上に一箇の霊木を感得し日蓮
上人の真像を手刻し常に仕へて怠らず（此浄影は宗祖大師の像を造るの權輿なり）諸天
感應の時至て弘長三年癸亥五月赦免ありて日蓮上人
鎌倉に還るの頃此尊像をして感悦ましく我心神今より
此木像に入るとて永く来際に至る迫救護衆生の利益無窮なん
我既に四十二歳にして救を得しに此木像に除厄の号を称へし
て自ら點眼なりしとなり
加持符 有信の輩三七日の間此符に対し正念に唱題誦経されは寄願成就
或は家の柱に貼す（諸人これを受る病を患ふ床のあるに壁上）故に世俗張浄符と称す
（相傳に日蓮上人伊豆の伊東の配所に在せしに八月左眼に病を患ふ依て此妙符を授らし
るに霊應あり後日浪師是を伝りしより已降世に相兼もるとなり）
當寺は遥に都下を離れしに人も霊験著故に諸人遠を厭そ



堀の内妙法寺

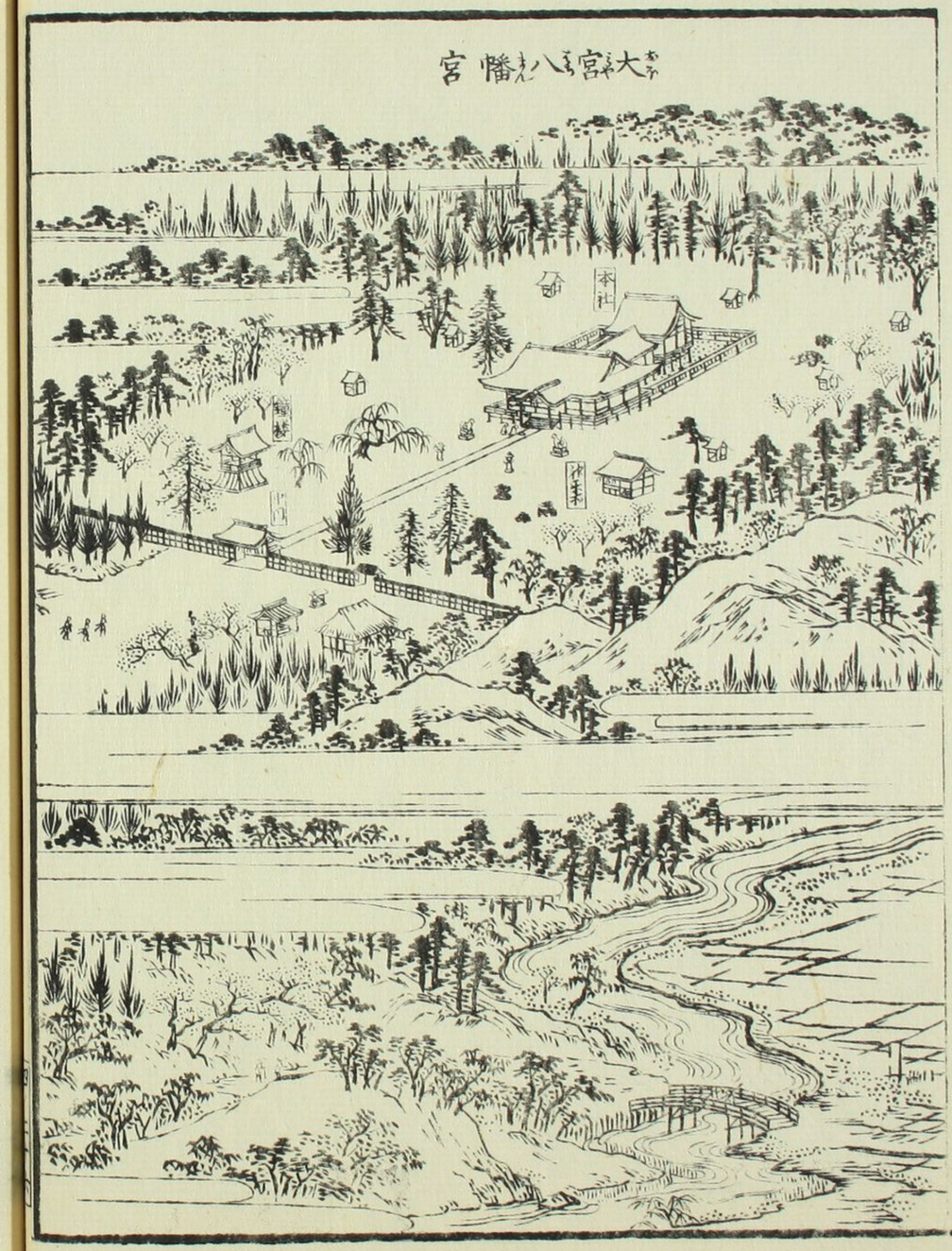
當寺小安置の日蓮大士の感應ハ考ふ唐埴多くく氣よ風雨寒暑をいとゝくく都鄙の貴賤日毎ふこふ詣して百度参詣片時絶るすゝ

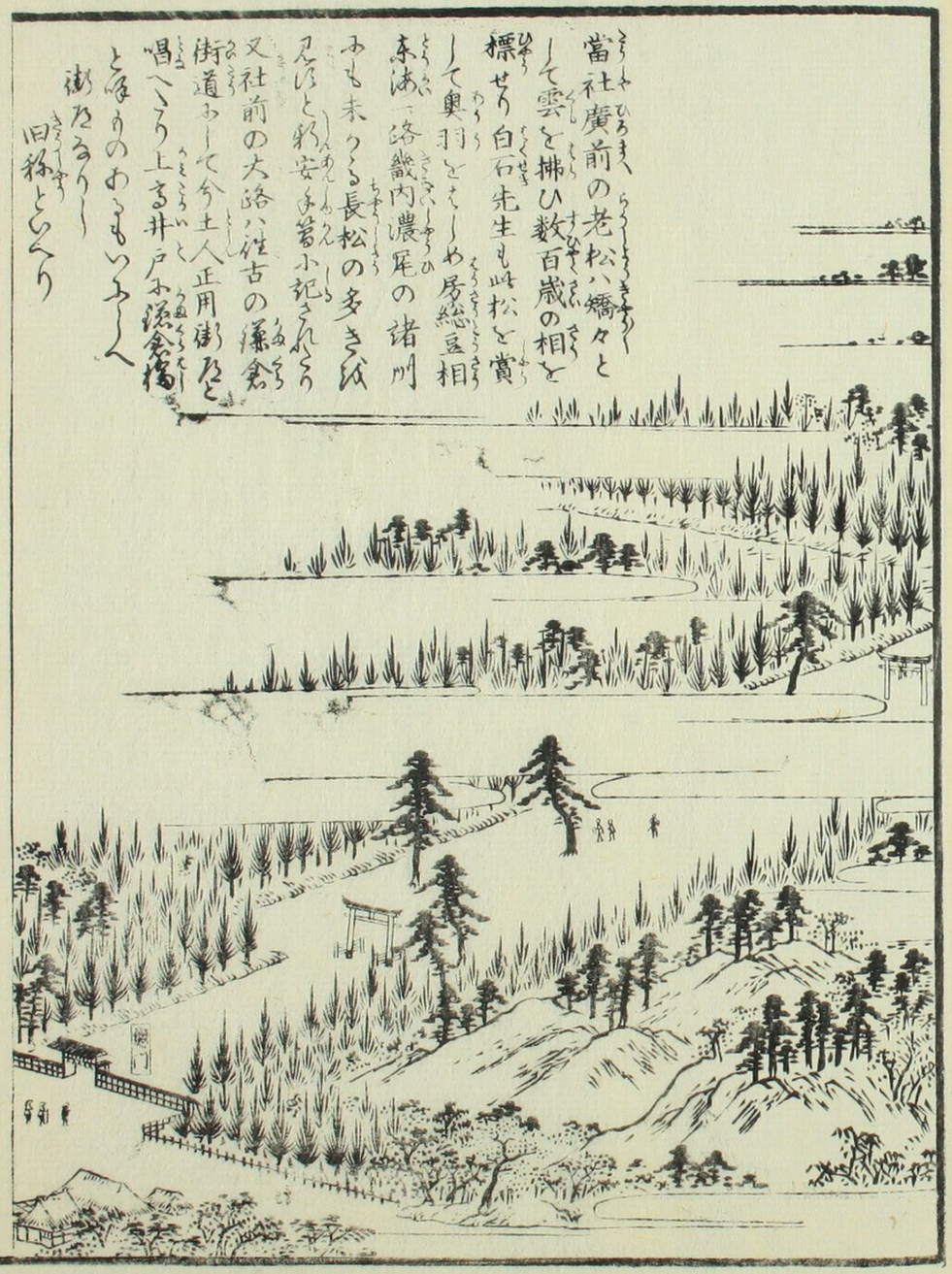
毎年七月の法華千部會十月の會式ハ八幡参詣の如く駢闐云ふの及ふよのくく

しく歩行を運ひ渇仰す毎年七月法華千部十月十三日浄影供を
修行を至て間群参稲麻の如し

大宮八幡宮　和田村ふあるを和田八幡宮共称せり別當八真言宗に
して幡降山大宮寺と号く（昔八中野の宝仙寺奉祠）例祭八九月十九日とす
（二十一日迄三日の間市立く賑ふ）神躰　應神天皇又左右ふ二神あれとも往古の兵燹よ
羅くく舊記亡ひしかとも神名詳あらす疑ふらくは　仁德天皇と
高良臣あるへきか何とも霊妙奇異ゆゑ文彩を加へ也大古質
朴の風あるへく彫刻最巧あるへし（元禄の末より神厨子を釘
年間別當祐照法印一七日行法あり（後慎）てこれを開き神像を拝し（天明
画ー（近年建部氏昌盈なる人信心の人ふ施ー）自ー神影を模図
相傳當社八其先多田満仲の勧請なりと（後源
頼義朝臣奥州征代出陣の時種々の霊瑞ありて神像を感得ー康平
六年凱陣の時よりて宮居を営建ー源家守護の神とす故に
右大将頼朝卿又相州鶴ヶ岡ふ等しく神殿僧坊を重修ありて信心
最厚ー（昔八大社ふて壮麗なる宮居ありー然ふ足利将軍の世越後北
ふハ地名をも大宮と称来るとなり）
上杉相模の北条と戦ふ頃上杉の勢兵此地ふ屯ー放火を
（大樹の下ふ道れあるを別當真順法印袈裟ふ後ー焼ふ恙なしとの）（此時神像八火焔と共ふ山中ふ）
社僧も四方へ分散ーそれハ神躰のみ焼ふ叢祠ふ安ー（社領八賊のあふ掠られ）神巫
頃大石信濃守當社の古きを尋く神宮を建る同十九年忝も
大神君此地ふ台駕をめくらされ源家累代守護の霊神なるを
あらしめられ新ふ神領を附ーあるといふ

幡ヶ谷不動明王　幡ヶ谷村よりあり真言宗光明山荘厳寺ふ安置也
本尊不動明王の像八智證大師の作なり毎年四月八日より同
十八日迄内拝せしむ相傳ふ往古智證大師江州三井寺を創建の
時彫刻の霊像なりとかや天慶年間平将門東國ふ在て逆威を
震ひ帝を悩しまるるふ平貞盛及ひ藤原秀郷等追討の宣旨を
蒙て東國ふ発向也時三井寺より此本尊を奉持しく陣中ふ





當社廣前の老松ハ嬌々として雲を拂ひ數百歳の相を標せり白石先生も此松を賞して奥羽をさしめ房総豆相未滿一路畿内濃尾の諸州ゐも未うゑる長松の多き成ハ此と彩安多著小記されこり

又社前の大路ハ往古の漢倉街道ゐして今土人正用御ハと唱へこり上る井戸ゐ漢倉橋とをりのゐもいふ〳〵

御ハるこり

旧称とひこり

移し軍の勝利を祈誓せしに同三年庚子果して待門を討亡したりしより後此霊像を下野國小山郷へ迎しまつりしに然るに永禄の頃武田信玄甲州より安座しまつりしを又北条氏政奪ひ取り相州築井といへる所の寺院へ入まつりしを竟に天正十八年四海安靖なるに及んで當國多磨郡宅部の三光院へ傳へあるを霊夢の應あるを以て延享四年丁卯永く當寺へ安置しまつる

井口山慈宏寺　大宮前新田川越海道の右側にあり日蓮宗にして

寛文年中の草創開山ハ日賢上人と号し本尊ハ三宝を安置

當寺へ安置の日蓮大士の像ハ日朗上人の作なり相傳ふ弘長元年

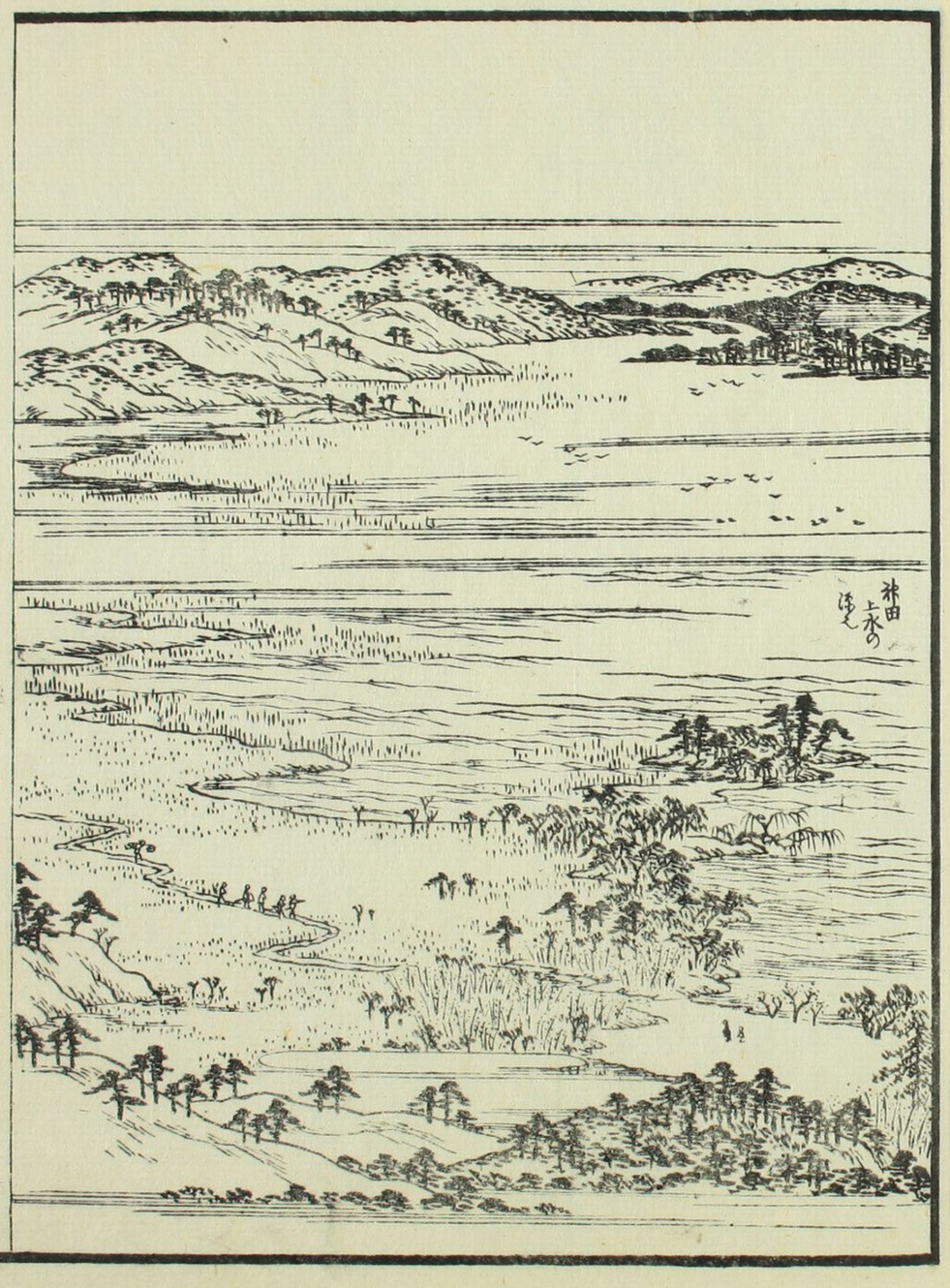
辛酉五月十二日大士伊豆の伊東へ流せらるる朗師大士の別れを惜み

まつりて霊木を得て大士の影像二軀を彫刻あり一躰ハ座像にして始碑文谷の

法華寺へ安置す其二ハ立像にして當寺へ安置せり即此霊像ハ後世の内妙法寺へ

旅行の節相わかる世に光明水旅立の影像とも称しまつり

大士鎌倉へ立帰りの後點眼あり

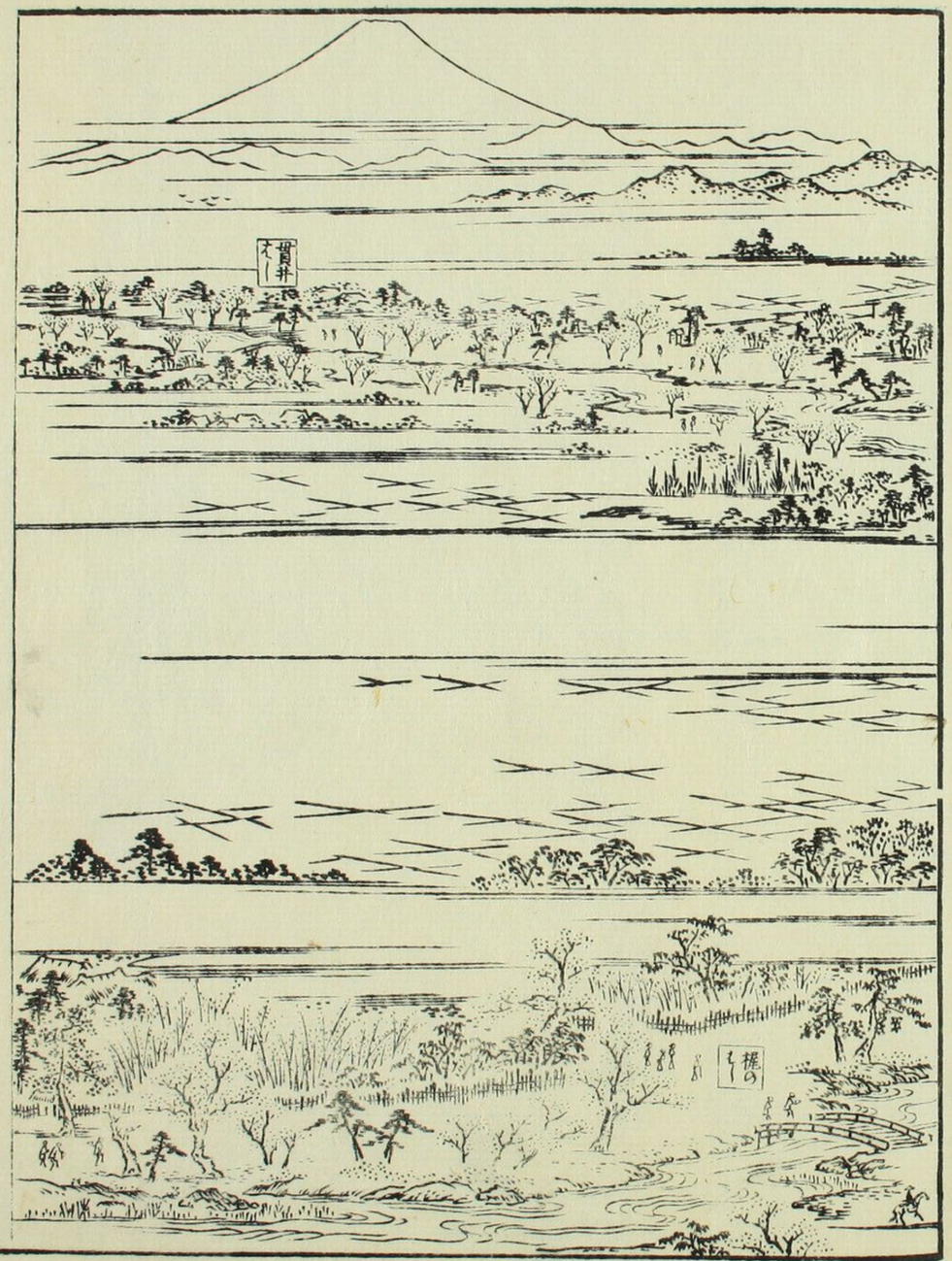

井田
上水の
堤

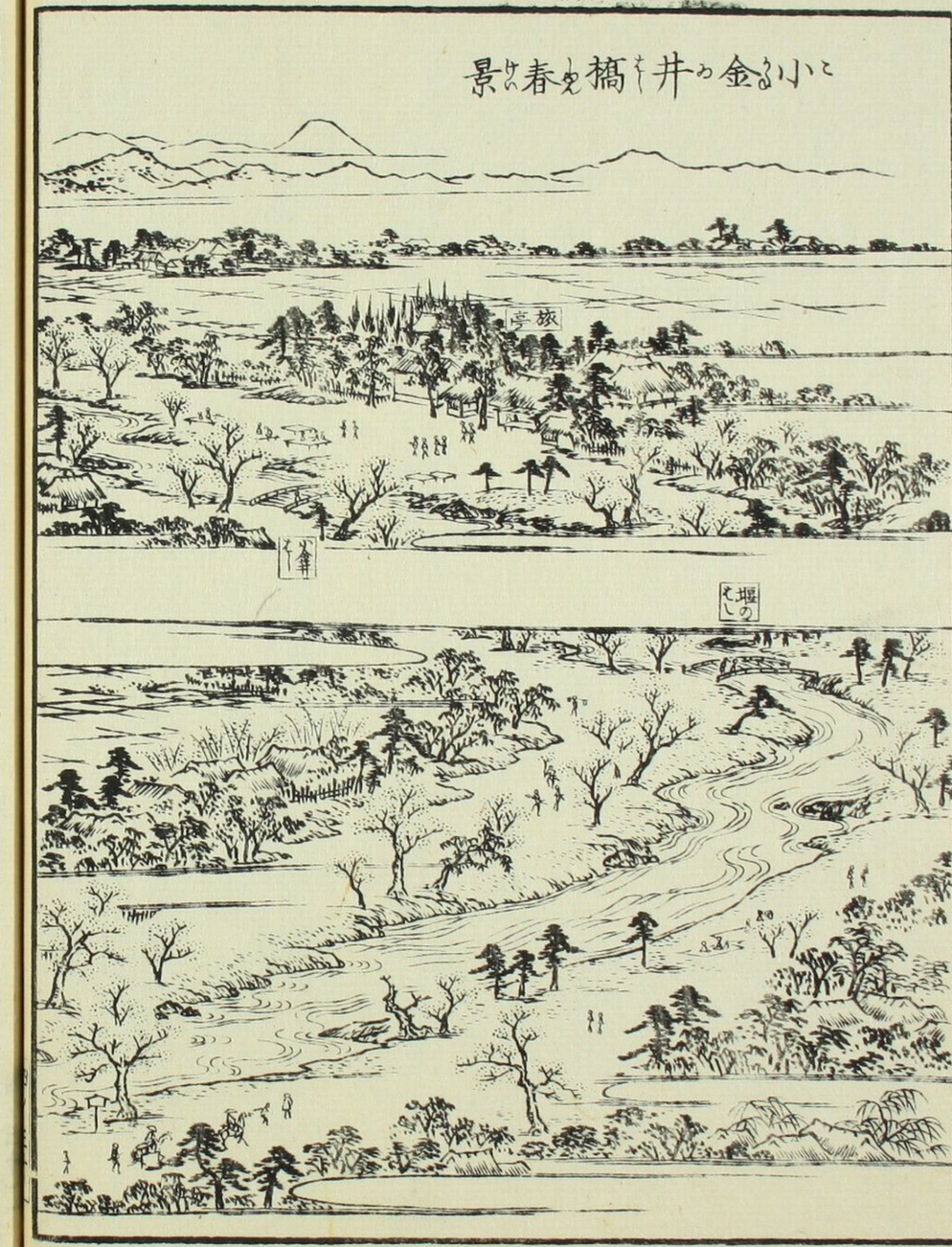
井頭池
弁財天社
本社
拝殿
山谷川

井頭辯財天宮　年禮村よりあり井頭の池霊ゆゑに中島に宮居を
別當ハ天台宗ゆゑ大盛寺と号ス相傳ふ建久八年鎌倉右府將
軍頼朝卿創建しゆゑ正慶年間新田義貞鎌倉と對陣の時當社より軍
本尊天女の霊像ハ傳教大師作なり　勝利を祈念し北条家と七さんくりとなり
寛永十三年丙子
社傳建立あり

井頭池　神田上水の源なり長さハ西北より東南へ曲りて三百歩ばかり
中ハ百歩あまりなり池中より清泉涌出る而七所あり旱魃も
涸るゝなし故に世よ七井の池と称ふ相傳ふ慶長十一年
大神君適ゝふ至らせ給ひ池水清冷ゆゑに味ひの甘美なる称
賞揚しゆゑ御茶の水より汲せらる又寛永六年
大將軍家ゝふ渡御なりゆゑ深く此池水を愛ゝせられ大城の内許
りせらるゝ旨　鈞命あり依て御手自池の傍なる辛夷の樹を伐
ゝ井頭と彫付ゝふ是より後此池の名とす　其辛夷の木ハ兼應大盛寺に収蔵
年間官府より井頭の水道を開ゝ初て神田より引ふ故に神田と

上水の称あり寛永八年辛未の夏池水渇すあり一を天海大僧正加持しゆゑ
霊感のすあり後ハ田の潤ふ今も毎年三月十五日より四月十五日迄水加持あり　御揚枝の柳ハ聖天堂の後よあり　腰掛の卧竜松と称す
藤　今在所さゝ　三ツ柳ハ神木と称す西北の方ハ立陵を今御殿山と
いふハ昔省耕の御殿館あり跡なり房ふかく唱ふるといへり　今ハ竹藪
繁生す　樹木
此池ハ清泉ゆゑ炎天ゆゑ水の減ずる常ゆゑ泌沸として
湧出す其地最閑寂ゆゑ池辺柳樹多く初夏の頃よりハ
新葉黛ゝとして陰を成し浅翠嬌青碧空を蔽ふに似たり
金井橋　多磨川の上水堀両岸の芝塘より金井村より架す故に名
とす　水源小川村より新橋の東北千川上水の掛口の所より凡一里あまり両岸ゝ
櫻ゆゑ左右の両岸九村ハ跨る架の橋大小七ヶ所あり
何も地名ゆゑ名ゆゑ唱ふる金井橋の類　水流西の方羽村より北ハ
横ゝ江戸ハ至る直流凡十里あまり是を王川上水と号す　羨應の項始て
此水流を大江戸ハ此地の櫻花ハ享保年間或云元文二年丁巳郡官川崎某
台命を奉し和州吉野山より常州櫻川等の地より櫻の苗を


貫井


小金井の橋春景
旅亭
小金井
堰の

小金井橋ハ小金井邑の地ゝ傍て
流るゝ所の玉川上水の素堀り
架ぶる故ゝ此名あり岸を夾む
櫻花ハ数千株の梢ゝ連へ
落英繽紛たり開花の時
此橋上より眺望すれハ
雪とちり雲とまがひて
一目千里ゝ限盡る際ゝ
ゝ仍て都下此叢人
遠と雖もして遊賞
ゝ
拵ゝ酒と煖め
弟と惹の
あゝ居あり
遊人或ハ
戯ひ或ハ

春ハ
夜ハ
さくらよ
あけく
ゝまひ
ゝり
芭蕉

殖らゝかゝ其數凡一萬余株あり〳〵そ今存の古木一圍よ
項まてハ年こふ官府よりこれを殖つゝせしと延享の
あり今ハ年數大ふ減し凡三百株あり立春より五十四五日目の頃
開初ゝ六十日目を滿開の期とす七十日目の頃ふ至りてハ落花せ
最年の寒暖ふよりゝ少しの遲速ハありといへとも大方ハ違ハせ
就中金井橋の辺ゝ佳境ゆゝ爛熳〳〵ふゝ両岸の櫻玉
川の流れを夾んで一目千里実よ前後尽る際なゝ
遊へハさゝ〳〵白雲の中ふあるゝめく蓬壺の仙臺よ至るゝ
しゝる最奇觀ゝ尤ふ近年都下の騷人韻士遠と厭ハせしゝふ
来て遊賞す

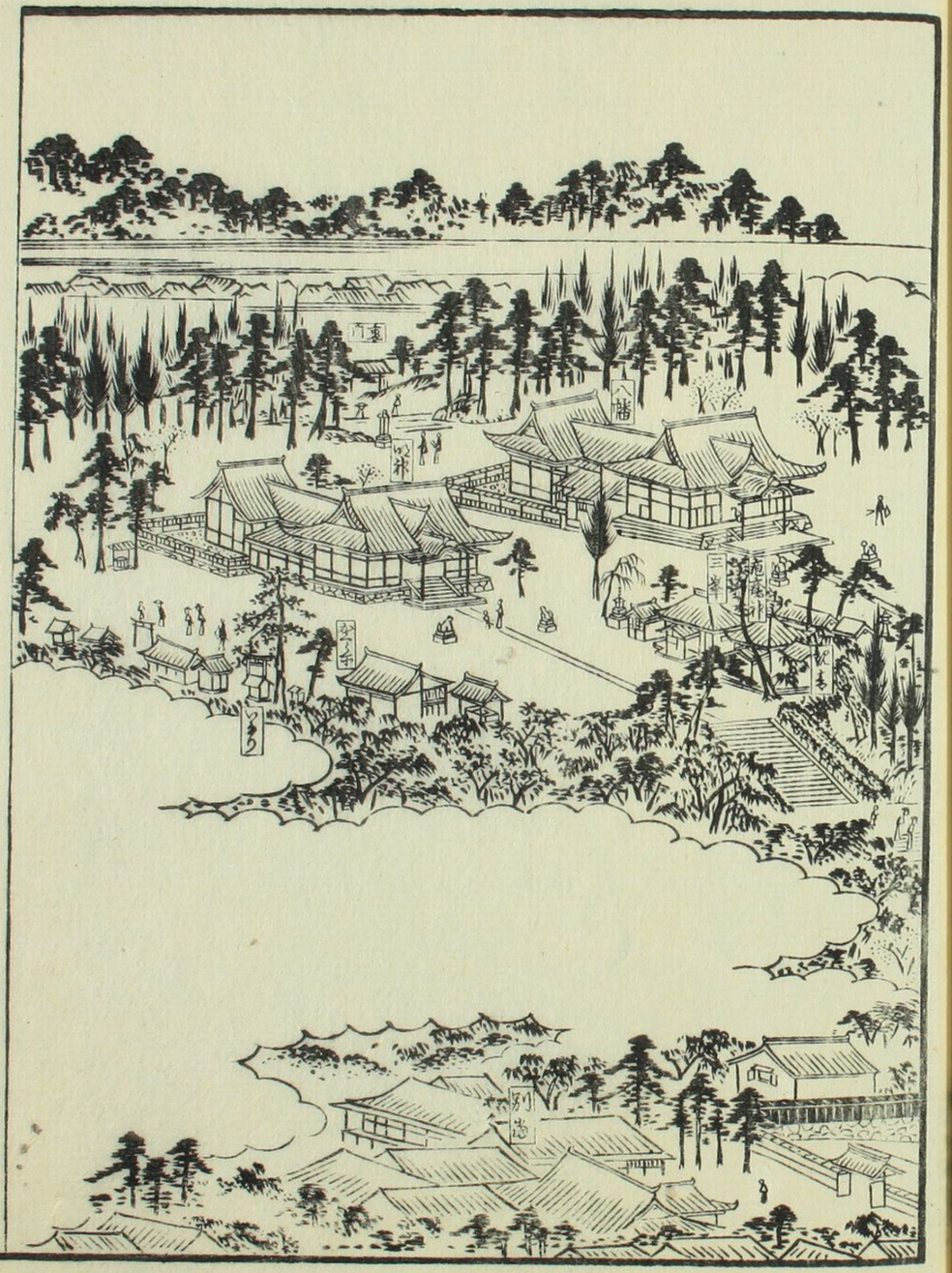
津久戸明神社　築土銀町よあり　此地ハ牛込と小日向の界中て　当社の方ハ牛込よ屬す　別當ハ天台
宗ゆゝく善龍山成就院と号し本地佛ハ聖觀音傳教大師ゝ
作なり相伝ふ天慶三年庚子相馬將門誅せ〳〵れ〳〵後平首級を
當國江戸平川の觀音堂へ移し〳〵是を齋く津久戸明神と称せ

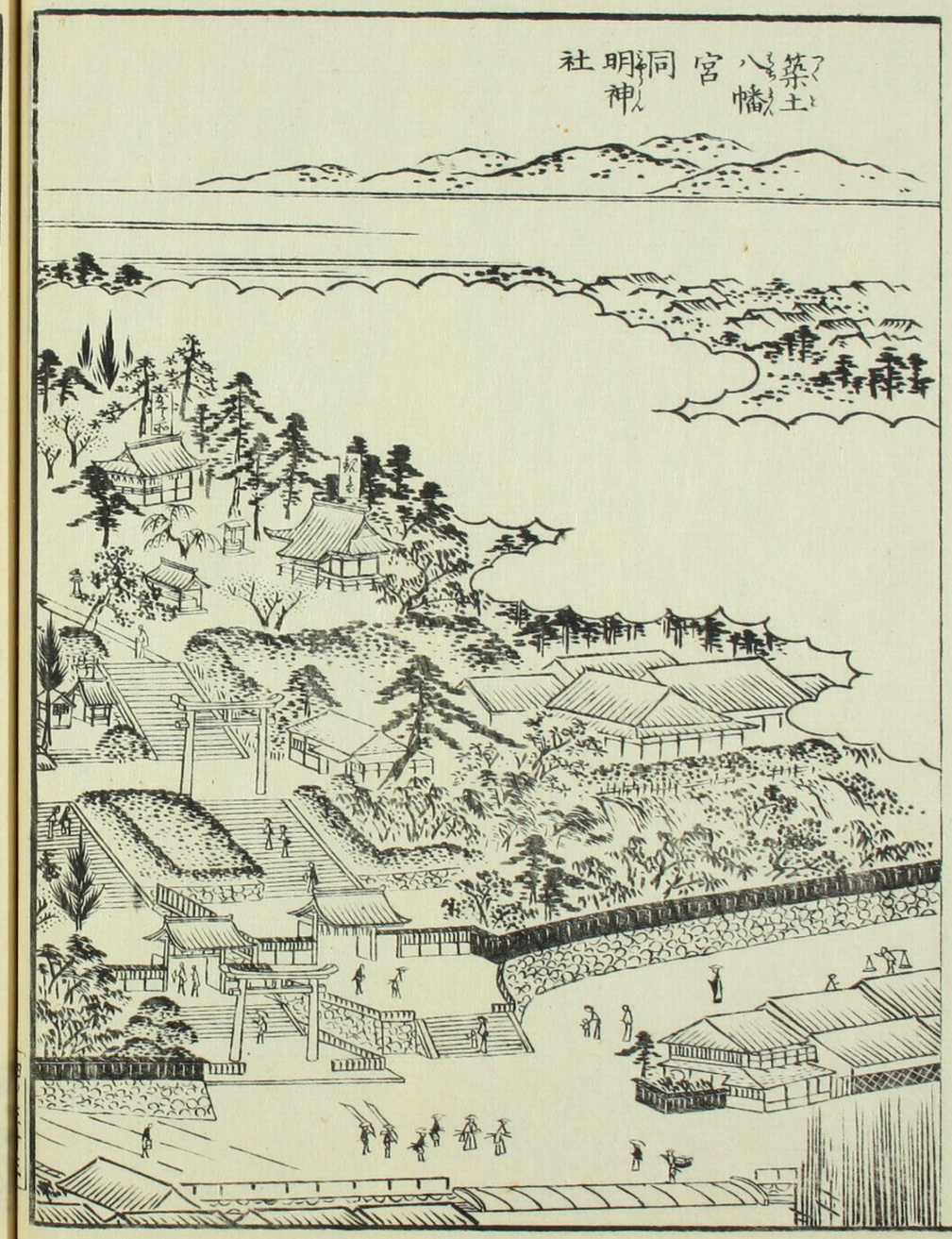
文明十年戊戌太田道灌江戸城の鎮守とし〳〵く宮社を造立
あり〳〵しふて永享記よ武州入間郡川越の城の乾よ氷川明
神の社あるふ準へ文明十年戊戌六月五日江戸城の乾よ津久戸
明神を勧請せと云ゝ　江戸砂子よ永享記を引くかゝひ又中古治乱記
江戸城を築し〳〵条下よ津久戸明神ハ氷川と同躰の由なれハ素盞
嗚尊なりとあり

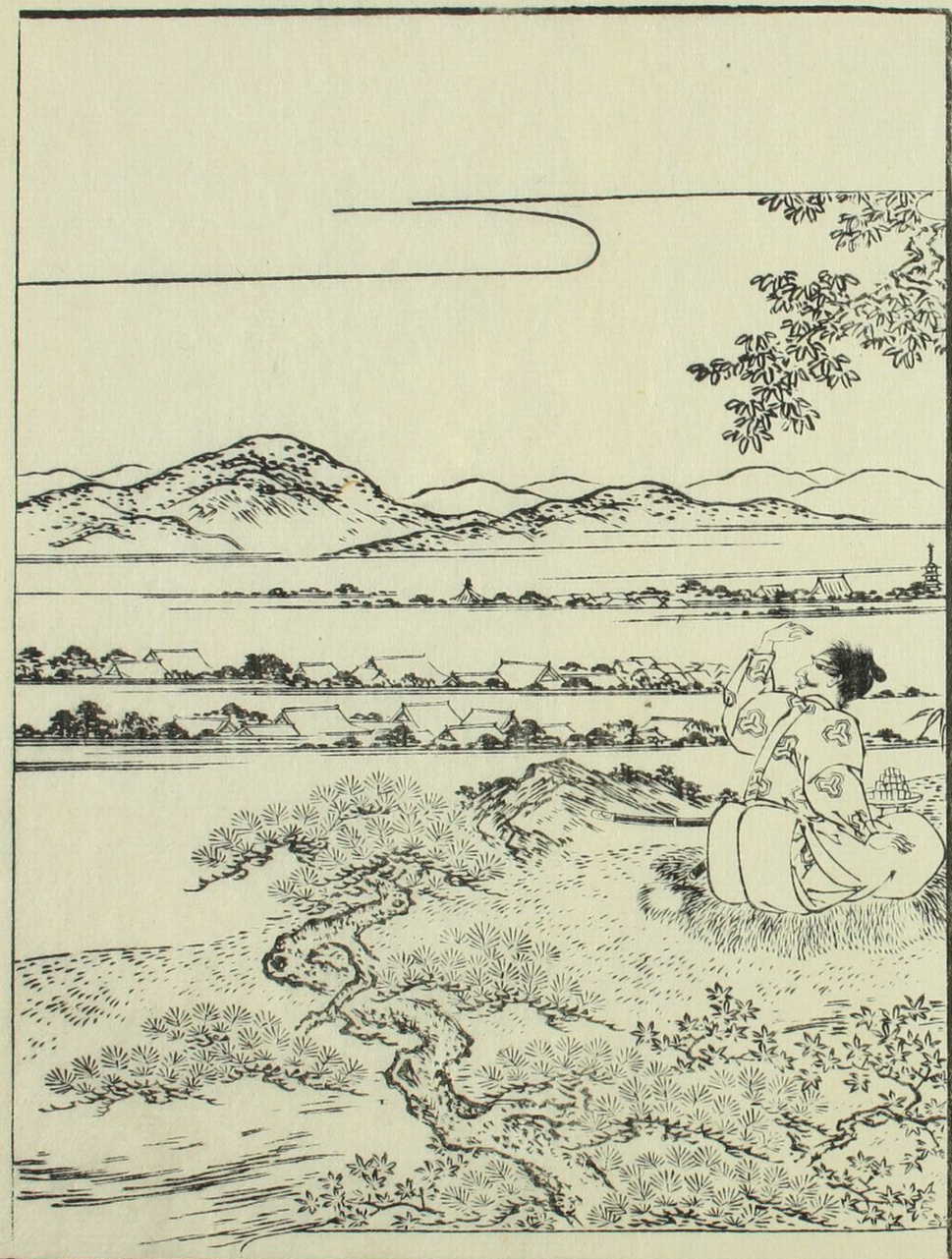
按よ特門の霊ハ後ふ合祭し〳〵ふゝ欽南向亭茶話よ云く筑戸日ハ次戸と
書も往古ハ江戸明神と江戸城の鎮守江と次と字形相似るふよりの
もの項ゝ謬て来し〳〵ふゝ是ふ依く考へるに当社ハ武蔵國風
土記ふ載せ〳〵ふの江戸神社もまく素盞嗚尊ゆゝく風
土記ふ合せり別巻五巻神田明神の条下江戸の神社の考へを附せりてしあハ

当社ハ往古上平川の地よありしを天正七年己卯田安の地よ遷座又
元和二年丙辰今の地へ移し〳〵まる昔ハ筑戸と作る後改めく築土とす中古田安の地よ鎮
座の項ハ田安明神と唱へしとあり祭禮ハ九月十五日なり

築土八幡宮　津久戸明神の宮居よ並ん地主の神ゆゝく別當ハ天台


東門
八幡
神社
三峯


築土八幡宮
神明社



賸喜洛陽千歳
光瑞烟祥氣入
望昌三條橋影
遊魚聚十字街
頭征馬惜宕岳
風来吹袂過叡
山雲度引紳長
金湯城上立鴟
尾九陌不消遥
墨方
山崎垂加

宗松霊山無量寺と号す
祭神應神天皇神功皇后仲哀天皇以上三座なり相住ス　嵯峨
天皇の御宇此地ヨ一人の老翁住ス常ヨ八幡宮を信す或時當
社の御神此翁ヲ夢中ヨ託しく永く此地ヨ跡を垂たまふとなり
老翁奇異の思をなす　其翌日一松樹の上ヨ瑞雲霞霧して旌旗の
ごとくなるを見る　松雲山の号こゝヨ発ス云　時ヨ一羽の白鳩来りて同し樹間に
やすらふ郷人翁ヲ霊夢を聞く直ヨ此樹下ヨ瑞籬を繞らしく
八幡宮と崇む遙の後慈覚大師東國遊化の頃傳教大師彫造
しまうしの阿弥陀如来を本地佛とし小祠を経始す至後文明
年間江戸の城主上杉朝臣社壇を修飾し此地の産土神や
すらのゝ　或書ヨいゝ當社の地ハ往古管領上杉時氏の堅の旧跡
しく時氏の弓箭を以て八幡宮ヨ勧請ス云
逢坂　或大坂　牛込船河原町の西今軽子坂と呼へるハ是なり　此坂下洗溝
揚場町と称ス作る　此所を船の通路あり　揚場町の唱あり此地ヨ繁く軽子の住居あるゝ此所より荷を揚る名ふ故の名と云　里諺ヨ云昔

奈良帝の御宇小野美佐吾といふる人武蔵守ヨ任して此國へ下る
至頃此ところヨ玄及藤とひてこゝあかもいつくしき女ありけ
美佐吾ひそめてこゝをもつへらり月日経て美佐吾ハ帝ヨめし
ふり奈良の都ヨ上る若草山の麓ヨ住ケるいつく程もなくこゝより
ぬる時美佐吾いひけるハ我死ん後ハ必ず立骸を武蔵の國ヨ
おくりさねらるゝ住る辺ヘ葬るべしと境ちるふ隔ヲ
ぬるるなきハて大和の國なりける若草山の麓ヨ葬つ生ふと
武蔵野とるつけそめこゝを塚ともいひ塚とゝいひ塚ハ
しるなり　地の古老伝へ云くむさし塚ハ大納言兼武蔵守良岑安世卿の古墳なりと
うくて後さねらるゝハ美佐吾
ウ身まうりぬるるもちうさうしうとり戀慕ひて神ふ移さ
佛ふちうひあけうを歎き悲ミヨある夜夢のさとしあるこ
ケ是ハ此所ふきうりしまうして美佐吾ヨあひぬあうしうり
かうぬ姿なりしうハうれとおもひ

うるふ三姿乃消うせよられハ美佐吾ら身まうりぬるとまりて
此あくりの淵ゟ身を投く空しくなりうとなをあまうり後
此所と逢坂とハいくりとるん（神乗坂の西の小坂を土俗幽昊坂とよへり恐らくハ逢坂と混しる歟又地名とめ坂といひ女の名とする）
（好事の人の付会せるもの知らんしるよ出も）
（伊勢物語久しくまハやむるとなをてあるべし）

神楽坂　同所牛込の御門より外の坂をのへて坂の半腹右側ゟ高田穴八幡の旅所あり祭礼の時ハ神輿此所ゟ渡らせらるゝ

其時神乗を奏する故ゟ此号ありといふ（或云津久土明神田安の地より今の処へ迁座の時此坂ゟ神乗を奏せしかハ号くとも又若宮八幡の社近くして常ゟ神乗の音此坂迄きこゆるゆゑ名とす）

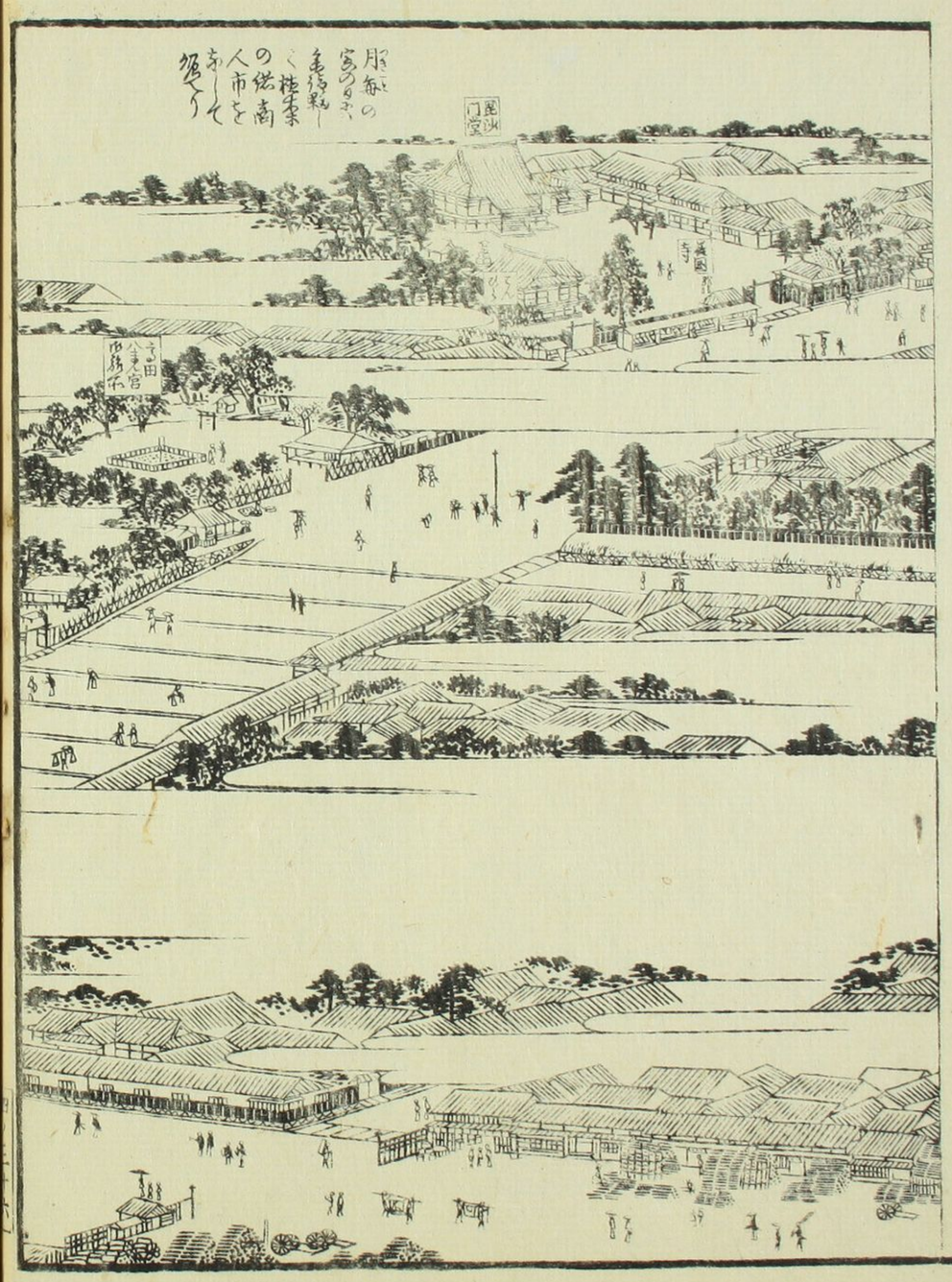
若宮八幡宮　同所若宮坂の上若宮町ゟあり（或若宮小路別当ハ天台宗普門院と号ス相伝ふ文治五年の秋右大将頼朝卿奥州の泰衡を征伐せんとゝ為ふ發向を時宿願あらく奥州平治の後當社を営み鎌倉鶴ヶ岡の若宮八幡宮を移し祭らるゝ也（若宮ハ仁徳天皇なり後應神天皇ゟ改め祭ると云）文明年間太田道灌江戸城鎮護の為當社を再興し社壇を江戸城ゟ相對せしむるとあり

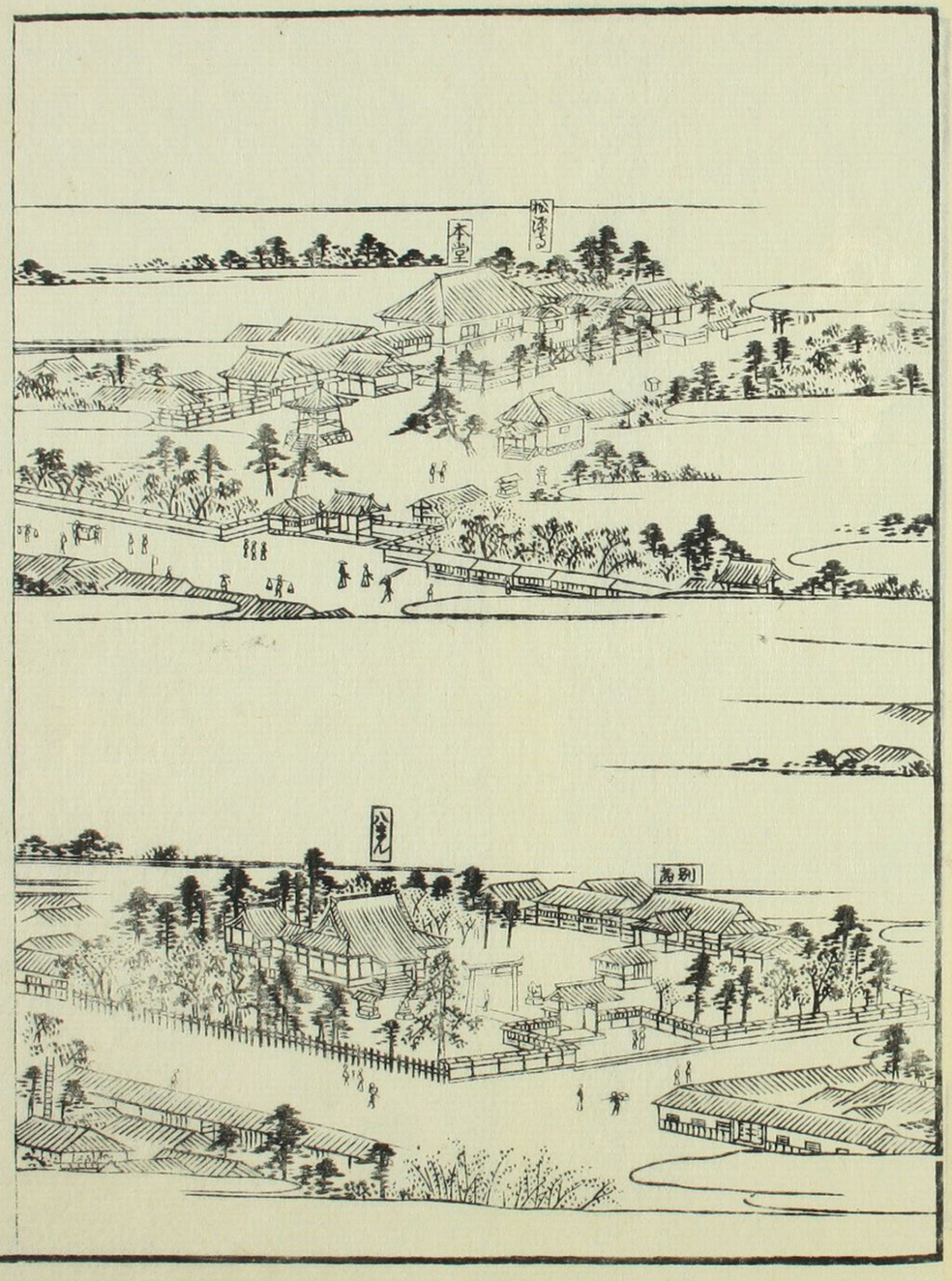
牛頭山行元寺　千手院と号ス同所神乗坂の上寺町道より右ゟあり天台宗東叡山ゟ属也本尊千手観音大士の像ハ恵心僧都の作なり　禁懸の木　慈覚大師を尼山と云（土俗伝云當寺昔今の牛込門の辺ゟあり）破壊也頃のものと古き大般若経を秘蔵せりと云昔門内左右ゟ南天樹多ゟ（ハ大利中して徳門ハ大永の兵乱ゟ堂塔潮天寺と字世俗今も）

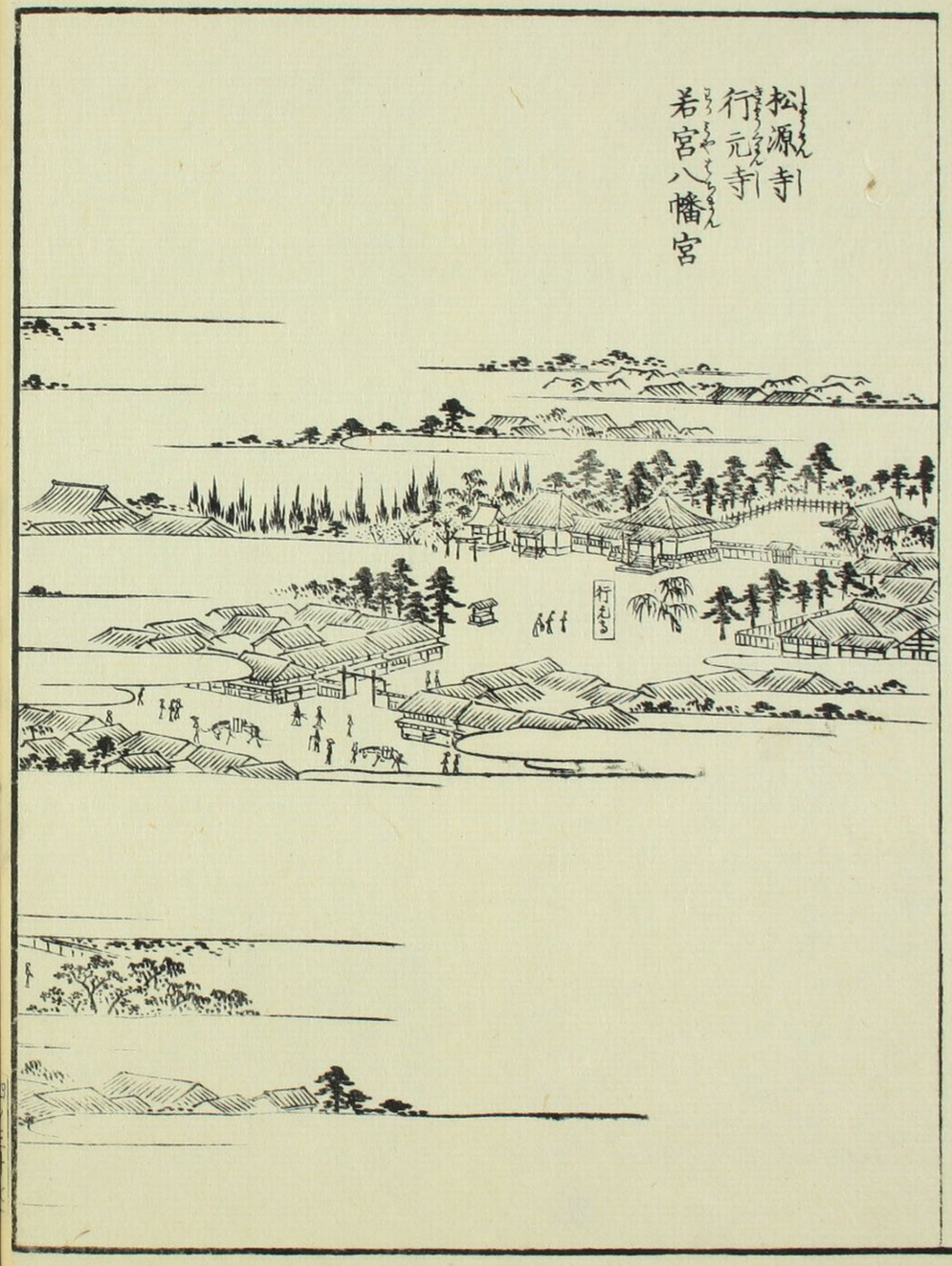
本尊縁起云右大将頼朝卿石橋山合戦の後安房上總を歴く下總國より此國ゟ打越の人頃る前ゟ通夜也夜の夢ゟ頼朝卿自ら此霊像を禁ゟかけ給まつり源家の武運を祈くとゝ後果しく天下を一統せられしより頼朝禁懸の彫像と称へまるると云〻

牛込城址　同所藁店の上の方也田地ありと云伝ふ天文の頃牛込宮内少輔勝行此地ゟ住しゝ城壘の跡ありとゝ

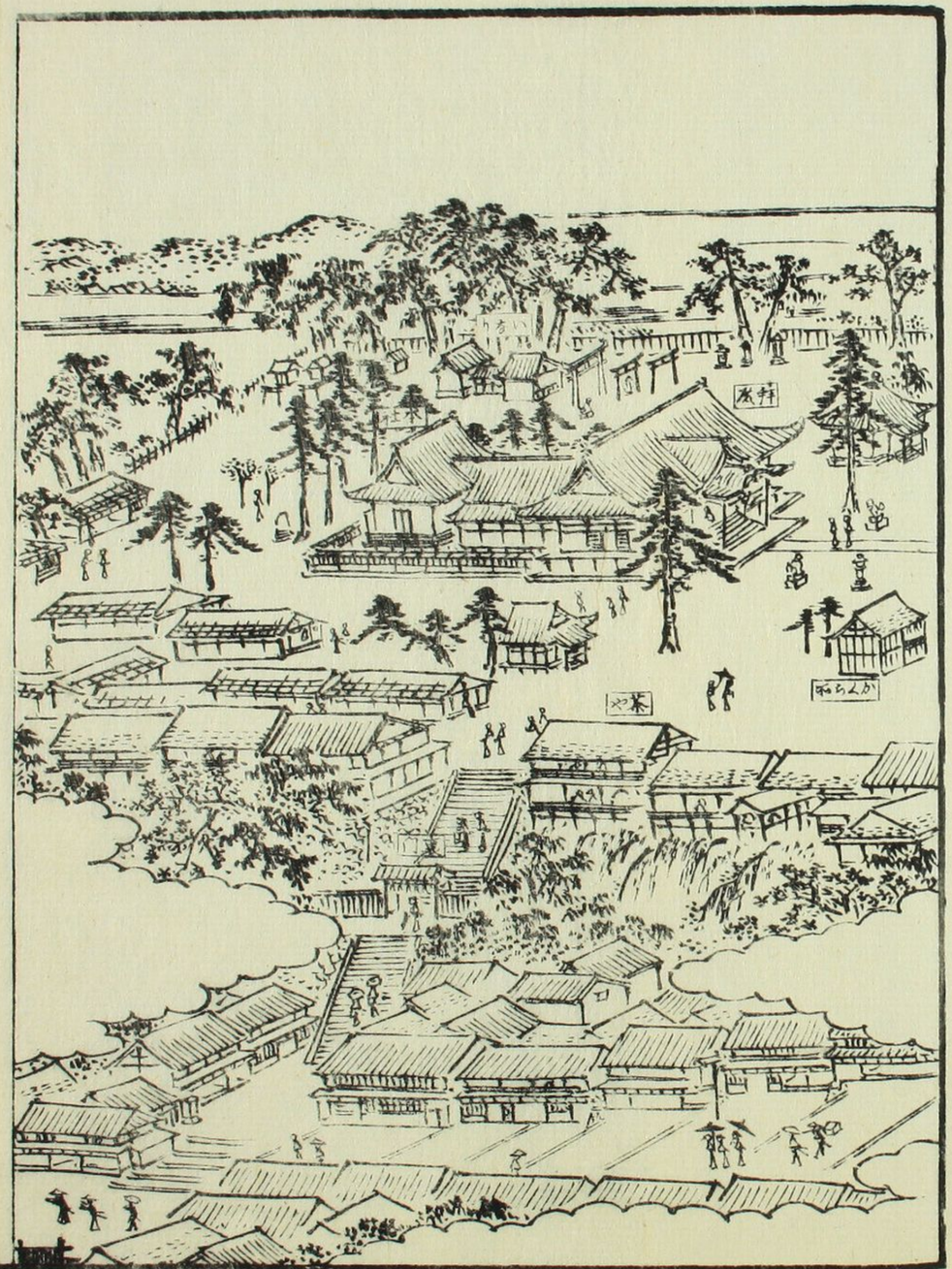
牛込
神樂坂

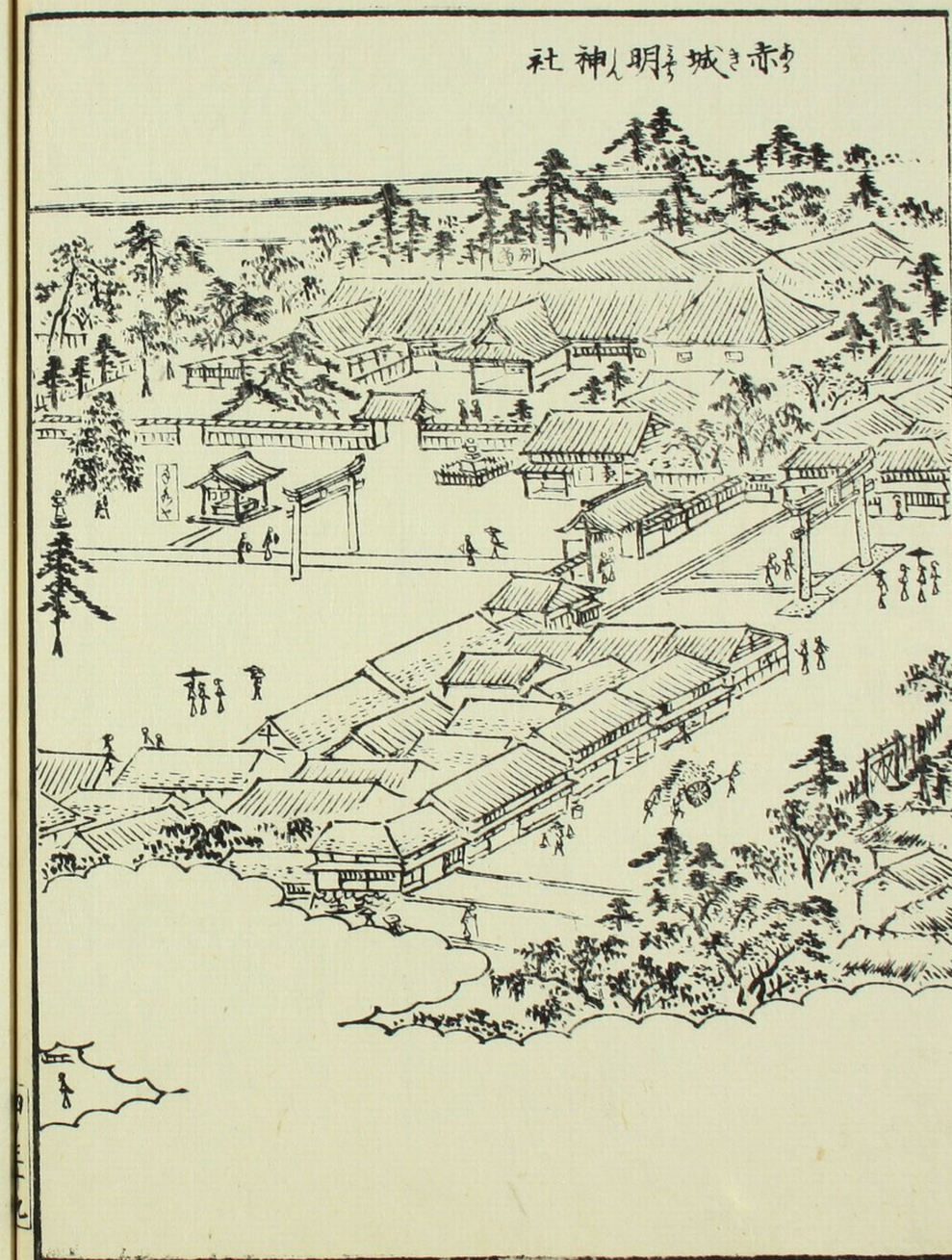

月毎の
寺
金田
公事人宮
市場市


松源寺
本堂
八幡宮
鳥居


松源寺
行元寺
若宮八幡宮
行元寺

閻魔堂　同所寺町の通左側天台宗養善院に安置せ閻王孔
像ハ佛工運慶の作なりとのふ正月と七月の十六日に参詣の輩
群集す昔ハ御城内平川の地にあるとのひ伝へ証とす
今も平川寺と号く中奥と智導法印とい
蒼龍山松源寺　同所向側にあり花洛妙心寺派の禪林にして江戸
の觸頭四ヶ寺の一員なり本尊に釋迦如来の像を安す開山を
霊鑑普照禪師と号ク禪師諱ハ宗丘字を蓬山といふ俗に長刀
蓬山とのふ昔境内に猿をつなぎて置て今し世に猿寺と号く旧地ハ
番町なりとのへり観音堂本尊ハ聖観音なり弘法大師の作なり
薬
龍山正蔵院　同所南の方横寺町にあり天台宗東叡山に属せ
開山ハ圓観律師本尊薬師仏の霊像ハ傳教大師一刀三礼の
作なり世に草刈薬師と称せり相伝ふ當寺往昔梅林坂御城内の地にあり
し頃一人の草刈来りて開山圓観師に此薬師の霊像を授与し
去りぬ長禄年間太田左金吾入道道灌當寺を創建してこれを
本尊とす至後上杉朝興尊信殊に厚く牛王宝印等を寄附
せしをたりとく今も是を伝へり當寺昔ハ平川[illegible]の辺に
あり後年田安の地ようつされ元和年間今の所に地をかへそせらる
といふ
赤城明神社　同所北の裏通にあり牛込の鎮守にして別當ハ天台宗
東覚寺と号ク祭神上野國赤城山と同神にして本地佛ハ将軍
地蔵尊と云往古大胡氏深く此御神を崇敬し始ハ領地に勸
請し近戸明神と称す至子孫重泰當國に移て牛込に住せり
又大胡を改めて牛込を氏とし其居住の地ハ牛込店の辺なり先ハ祖先の志を継
此御神をこゝに勸請なりしとの説を祭礼ハ九月十九日なり當社始く
勸請の地ハ目白の下閼口須の田の中にあり
今も[illegible]木立あり是を赤城の森と云
御殿山　同く東の方中山家の藩邸の地に旧址なりとも或云萬昌院乃
辺なりとも相伝ふ太田道灌の別館あり舊跡なりとも寛永の頃




赤城明神社

大將軍家淨故鷹の時の淨儲とゝく假ふ建置ゐ〻し淨殿の地なりとのへり

蔭涼山濟松寺　同所榎町ゆあり京師妙心寺派の禪嵩わゝて昔ハ妙心寺より勅番本る釋迦如來を安も閑山ハ心印正傳禪師開基ハ素せしといふ心尼なり此尼ハ牧野兵部少輔政玄の女わゝく春日局と共ふ大將軍家昵近の侍女なるも當寺ゑ淨佛殿わるも芳心院淨別當を務む此寺ハ芳心尼の開創なり淨佛殿の前の池を鳳凰池と號く靈亀水を芳心院の地ゑあり〻〻寛永の頃ハ淨茶の水ふ掬さ〻めゆゑ〻〻閑山塔ハ養春院是を預る也〻〻僧坊六宇經堂鐘樓庫裡浴室等巍々然と〻〻軒を連ね輪煥〻〻

親王の真筆なり

三佛堂の額ふ天下蔭涼とあり隨自意院宮一品准后公啟法

豐後小侍從大友義延舊館之地　同寺院を指く也旧跡とも相傳ふ文祿二年大友義延朝鮮征伐の役ふ補せらるゝも武備怠るを以て豐臣大閤罪〻て當國へ迂〻し此地ふ蟄居せ〻む此地即也旧跡なりとのへり

南向茶話云大友左兵衛督義統文祿年間朝鮮征伐の役ふ怠りあるを以て領國を没收せらるゝ後常陸國ふ於て卒ゐ嫡子宗五郎義延此地ふ住む義延ハ徒四位ふ叙し侍從ふ任せらるゝ豐後小侍從と称ゝるとあり慶長五年関ヶ原淨一戰の後常州筑波郡ふかく三千五百石の地を賜ゆるとあり早世也又江戸鹿子といふ草紙ふ義乘と記せ〻ハ義延のゝを謬る也

望海無淡とゝくるとのふ寛永十七年の事實を記せ〻次ふ淨祐筆大橋竜慶高田大友のゝきを賜ゆる地ふ天滿宮の祠あり〻〻

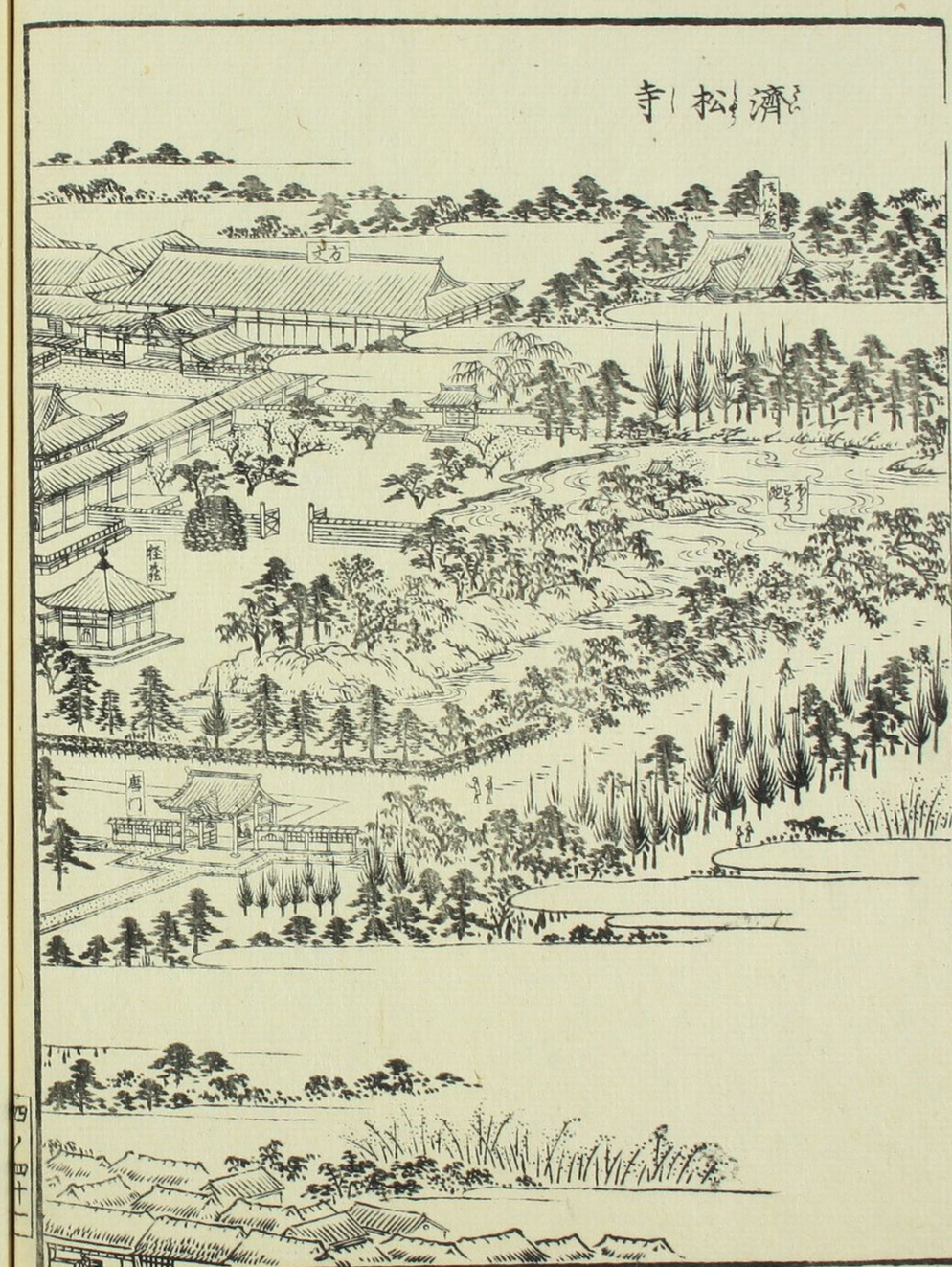
高田天滿宮の下ゑ詳なり

大友松　同所天神町の東ふ續きゝる淨持筒組高野氏の地ふありと云昔大友義延ゑ別莊の庭前の松あり〻〻後田祿ふ亡ひ〻〻其地の主旧跡を失ふむゆを歎き若木を栽られ〻〻家の傳説ふ大友宗五郎義延武州へ迂る頃從ひ來る家臣吉良傳右衛門某或人云大友營作せ〻教寄屋の前の松ゆ〻く蔭涼山濟松寺の名も此松より出く号けゝとあり

大友稻荷祠　同所ふあるも是も義延の勸請といひ伝ふ

一樹山宗柏寺　濟松寺向の横小路ゑあり日蓮宗京師頂妙寺ふ屬せり閑山ハ日意上人と号ひ本る釋迦如來の像を傳教大師の

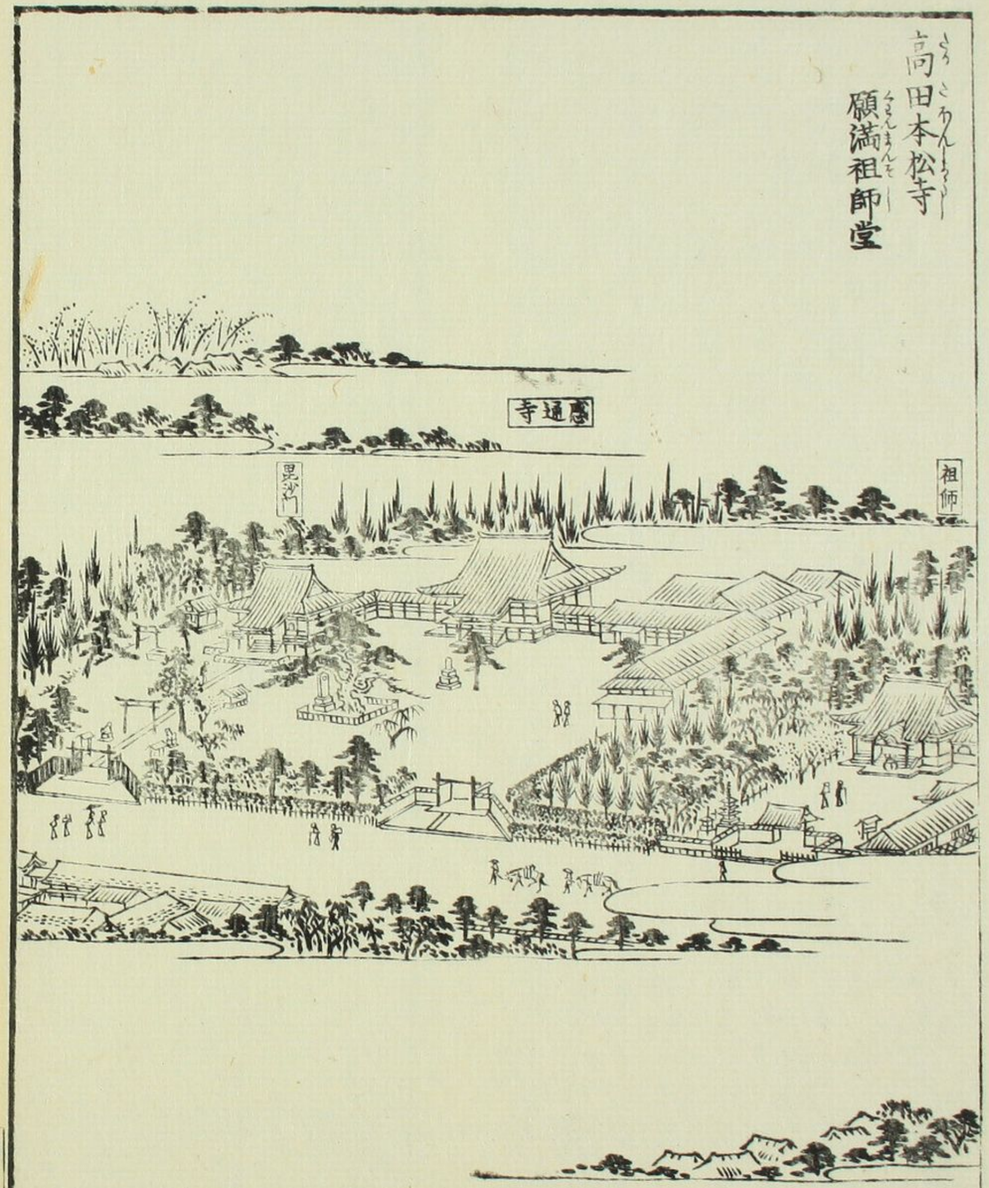
庫裡
仏殿


濟松寺
方丈
仏殿
經藏
池
塔

作なり相伝ふ延暦年間傳教大師　桓武天皇の詔をまり鎮護國家除災延命の為ふ叡山ふ於く此靈像を彫造あり〜と
なり然ふ元亀二年辛未織田信長公叡山を放火せ〜時仏閣
僧坊悉く灰燼す　時護持の人あり〜此本尊を取出て
恙なくもーを　後水尾帝深く佛乗ふ帰ーまを以く是を拜
ーめひ又宸翰を賜ひく釋迦牟尼佛の号を添まり日意
師此本尊を感得ー當寺を開く安置ーまるとの〜
雲居山宗恭寺　同所辨財天町ゆあり　此地を土俗曹洞汎の禪林ふ
ーて駒込の吉祥寺ふ属を本尊釋迦如来脇士ハ文殊普賢なり
開山を看栄禀閑和尚と号く總門の額第一義ハ心越禪師の筆
中門の額雲居山ハ岡良弼の書佛殿の額宗恭寺の三字ハ崎
陽道栄の書禪堂の額ハ黄檗悦山と〜ま相伝ふ當寺開基を
牛込宮内少輔藤原勝行と称す　弘治元年後五位下ふ任を法名を
参秀隠殿心外清雲庵主と号を

當寺ふ墳墓あり　鎮守府将軍武蔵守秀郷の後胤大胡重俊　上野國大胡ふ城を築きかこふ住す　則大胡太郎と称せり重行ふ継ひく此牛込ふ移り住す　土人牛込殿と
よ〜り或人云を家系ふ大胡太郎成行十代の孫同彦次郎重治上州大胡より武
州牛込ふ移り住　十代の孫重行の嫡男なり　重行ハ宮内少輔と〜ま法名ハ
雲居院殿実翁宗参大庵主
と号ひ天文十二年卒　北条氏康の麾下ふ属ー武州牛込及今井　赤坂の今井歟
又當寺ふ墓あり
櫻田比々谷　武人云其家系　其余下總の堀切千葉等の地を領ー牛
日尾谷ふ作ると
込ふ住す　永禄北条家の分限帳ふ江戸牛込比々谷本郷葛西の堀切等の地大胡氏
須賀ふ〜あれとも今廿千葉の両の名を〜ま〜ま或人云牛込氏系譜ふハ牛
込其余高田落合関口小日向冨塚小石川の金杉市谷田安櫻田　天文十三年甲辰
朝草同金杉等の地名を所領の中ふ注ーかとと〜ま拠ふ朝草ハ浅草を云ふ
父重行の菩提を吊ふんと〜る當寺を創建ー寺田を寄附ー父重行
の法号を採く寺の号ふ呼へと同二十四年乙卯従五位下ふ任す
其時氏康ふ告く大胡を改め其采邑の名の牛込をもて氏とも　天正十八
年北条氏滅亡の後勝行の子勝重天正十九年辛卯始て　大神君ふ謁ーまるとい〜ま
清幕下ふ或人云勝行の子ハ後重と〜ま慶長十五年始く三代大將軍を拜ーまる
両説ふ〜ま当家ふ属ーまるとも是
大胡重行同勝行父子之墓　境内卵塔の中ふあり　基の石碑ふ父子の法号
を刻も或人云大高季明の書ありと

高田本松寺
願満祖師堂

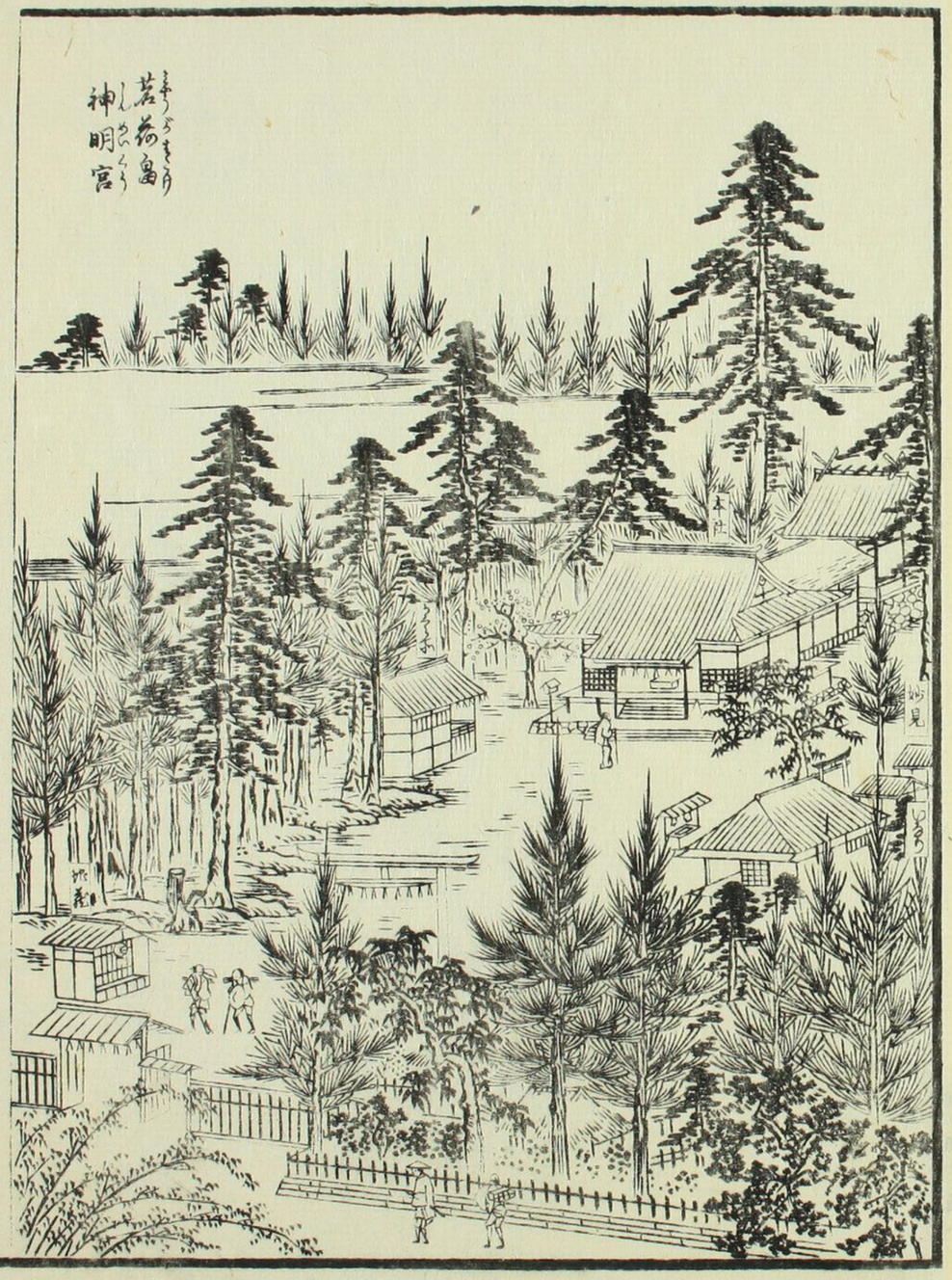


榮の梅　開山看栄和尚殖られしと云ふ

否やとも云ふ

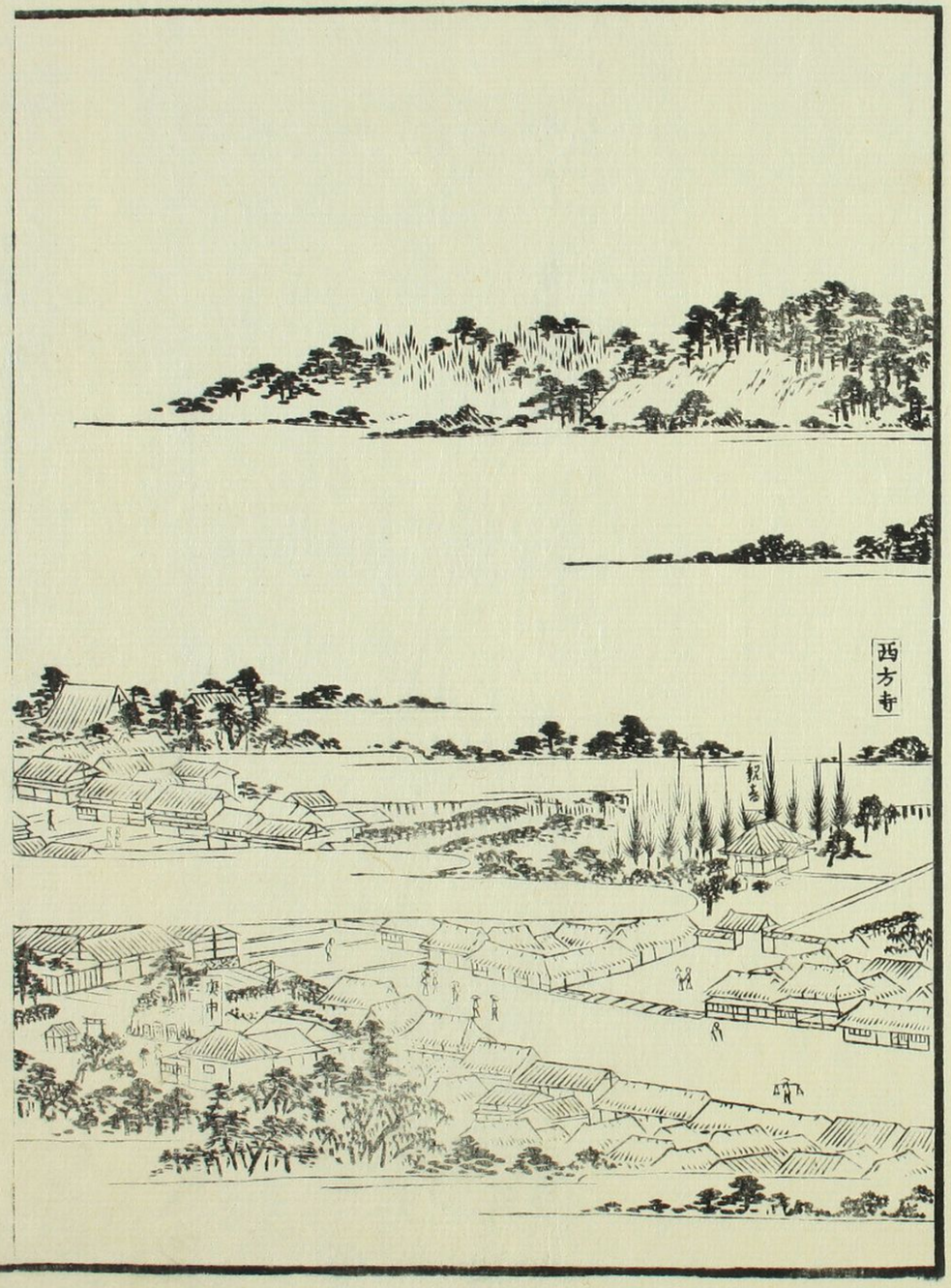
三明山千手院　同所七軒寺町にあり　真言宗開山八舜倚法印と号せ本尊千手観音の像ハ丈長八寸九分脇士多門持國の二天共ふ赤栴檀にして毘首羯磨天の作なりと云ふ相傳ふ往古越後國安巨山にあるもの也　天正年間豊大閤秀吉公柴田勝家と戰ふ及んで蒲生氏郷の臣殿池玄蕃と云ふ人是を感得せ既にして元和年間蒲生家敗壞の後殿池ハ下總國佐倉の城主堀田家に仕ふ故あり〻て富永氏某佶来り後當寺に安置せりと云へり

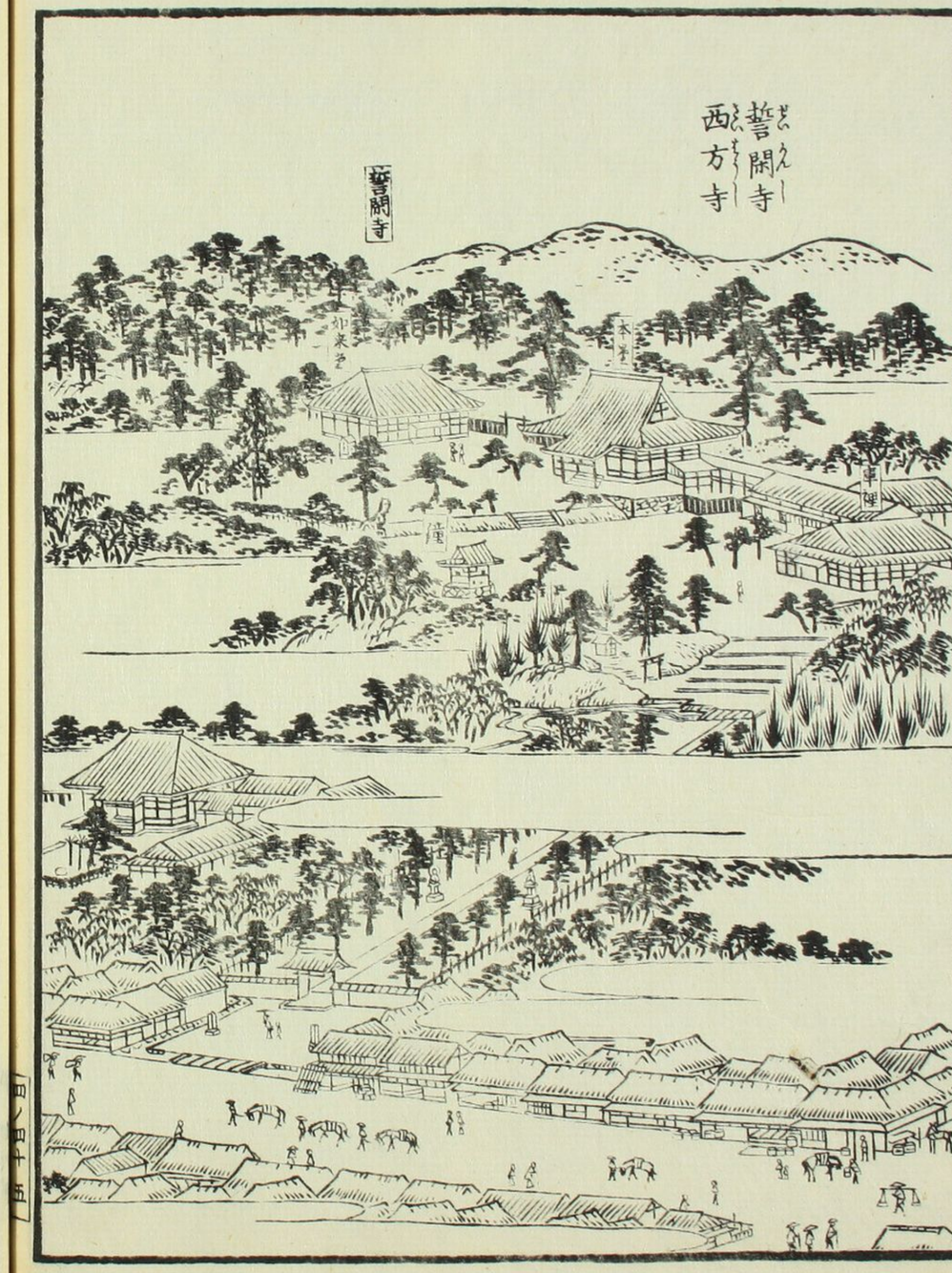
正定山幸國寺　同所原町にあり日蓮宗小湊の誕生寺に屬せ開山せ日觀上人と号ス當寺に安置の日蓮大士の像ハ世に布引の御影と称せり傳云文永七年庚午宗祖大士鎌倉に在り〻項房總の國郡数月疫癘流行せりこゝに於て人民大士に救を求む乃大士



佛工をして自の像を造らしめ白布に経題を書して手ふ
掛の人囑して曰く則是日蓮なりと云く依て此霊像を其地に
移せふ疫疾の患へ頻ふ退きぬ故ふ此霊像を小湊の誕生
寺ふ安置したりしう又宗門流布の為寛永七年庚午二月
十六日當寺に移しまゐらせとゝり當寺ハ加藤肥後守清正
の開基ゆして宗祖の霊像ハ寒暖に應し衣服を改むるの
池上ふ同しきことゝ（故ありて其衣服ハ年〻阿部氏某調進すゆあり）

神明宮　早稲田大田圃にあり祭神天照春日八幡三座あり同所
赤城明神の別當等覚寺より兼帯ゆて祭礼ハ九月十六日あり鎮
座の年歴詳ふあらとゝいへとも（天和二年同所榎町組林氏某の宅地ハ其旧地あり今大西番）
赤城明神舊地　同所田畔小川に傍てあり大胡氏初て赤城明神を
勧請せし地なり故ふ祭礼の日ハ神輿を此地ふ渡しまゐらせ
本妙山感通寺　高田穴八幡の馬場下南の坂上にあり日蓮宗に


西方寺


誓願寺
誓願寺
西方寺

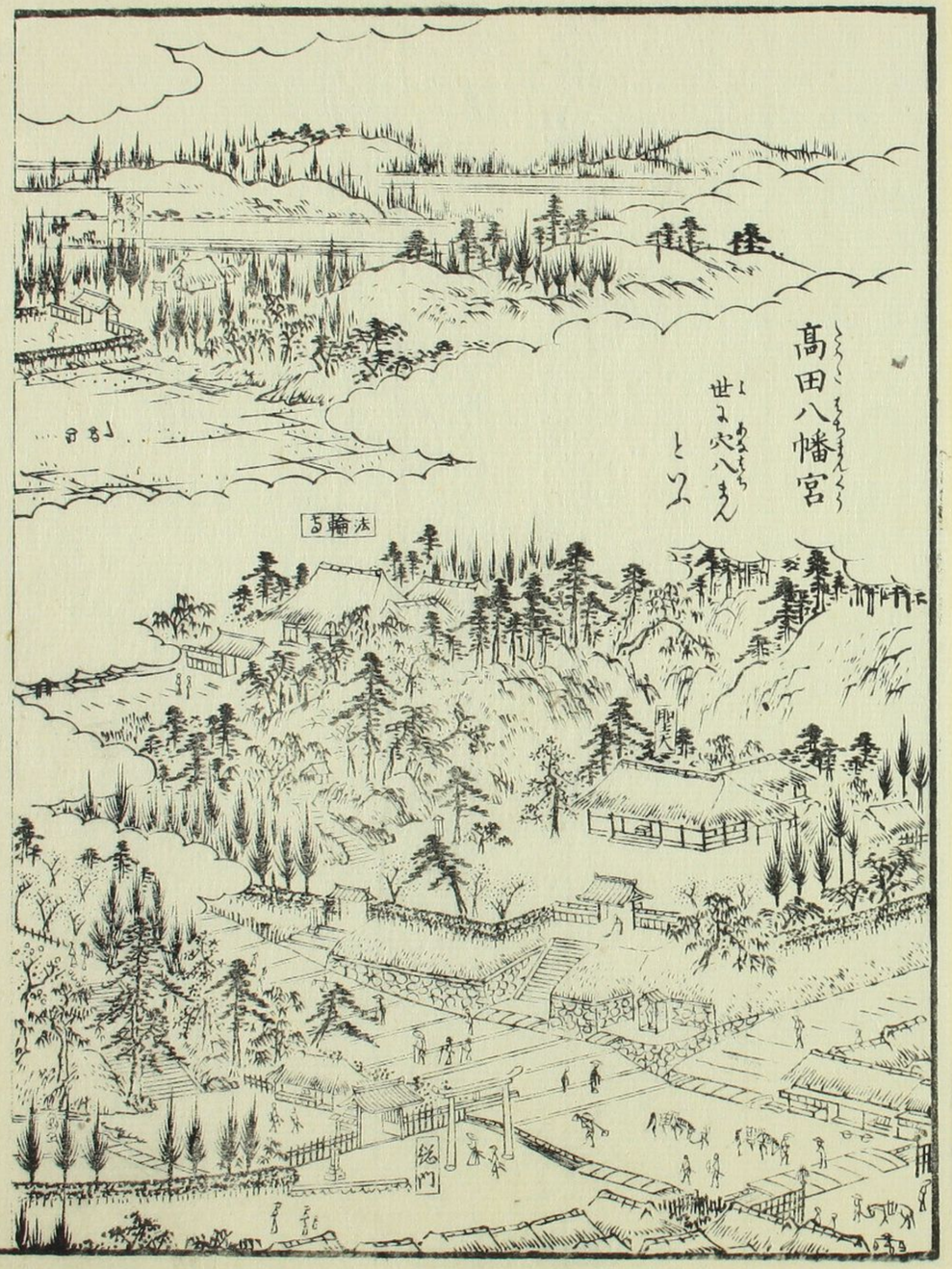
して小湊の誕生寺に属す閑山を寂陽院日建上人と号す當寺に安置の毘沙門天王の霊像は行基菩薩の作にして越後國高田の日朝寺に安置せしを越後に将軍忠輝の母君こゝに迂しのことあり

日蓮上人傳に宗祖上人弘安の法華経の功德あり文永十一年鎌倉より赦免あり佐渡國より越後高田に迂し給ふ頃地に真言宗の一寺あり此寺の毘沙門天老人と化現しのひ宗祖大士と尊く寺僧吉祥是を寄せ宿せり直に大士の法化に帰し日朝改むる越後國高田の日朝寺これなり上杉謙信深く此の霊像を敬し家に相傳せしと謙信天正六年に卒せ依て後奥州米澤の城に迂し奉りこゝに當寺に安置しまするといふ摩利支天の像は松樹の下にあり頼朝卿の勧請にして頼義朝臣の念持佛といひ伝へ此地は往古の鎌倉海道の旧跡ありといへり客殿の前に一松あり普閑松と称せ法花弘通の精舎なるこゝ妙紘に因て名称普閑の意を採て名づくとあり

三國傳来千手観音　同所坂より北西方寺といへる浄刹に安置せり當寺は増上寺に属せ寛永十六年己巳建立せり亨誉貞義和尚閑山に相傳に往古弘法大師唐土青龍寺の恵果阿闍梨より授与せられし中印土の霊佛ありと大師帰朝の後高野山の大塔に安置ありしを彼山麓に住る流水といへる沙門感得しく武州浅草に移しまするとなり故に三國傳来の称ありとのへり

自樂居士墓　境内卵塔の地に備前國の産にして齢を保つ既に百十四歳なり常に壮年の人のごとく見ゆ文字を書すを得さうしに衆人のをしへに百歳の頃より壽の一字を学ひ始めて是を紙に書て人に与へしとなり宝暦三年癸酉十二月三日に沒せり

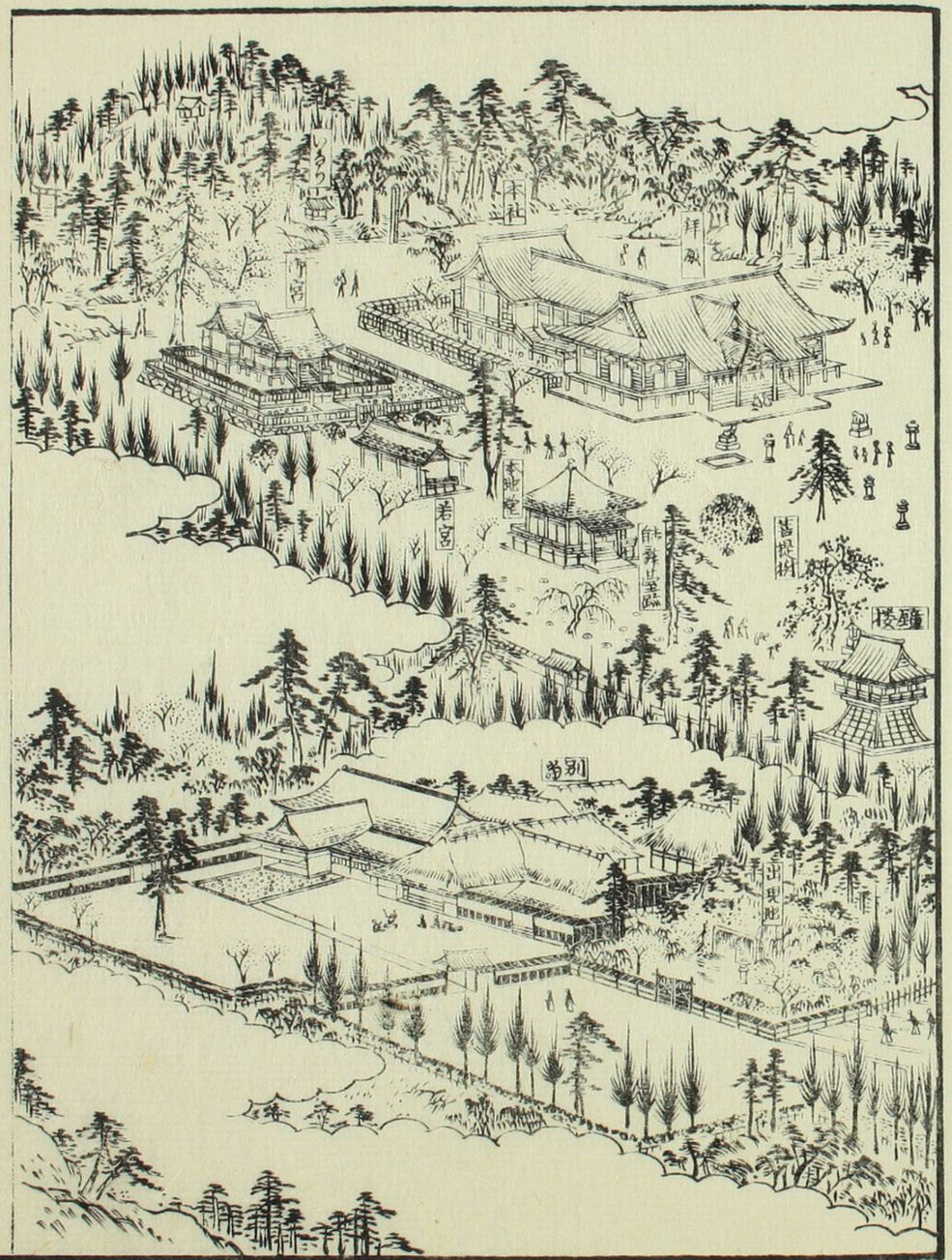
亀鶴山誓閑寺　同北に隣る易行院と号し浄土宗にして霊巌寺に属せ本尊五智如来の像は各長八尺　閑山木食本誉上人秋風誓閑和尚の作なり常念佛の道場にして清浄無塵の佛域なり當寺昔は少しの庵室にして前に松樹四株を植て方位を定めて方松庵といひしとそ今四五十歩南の方道を隔て向ふの側に庚申堂あり是則昔の方松庵の地なり

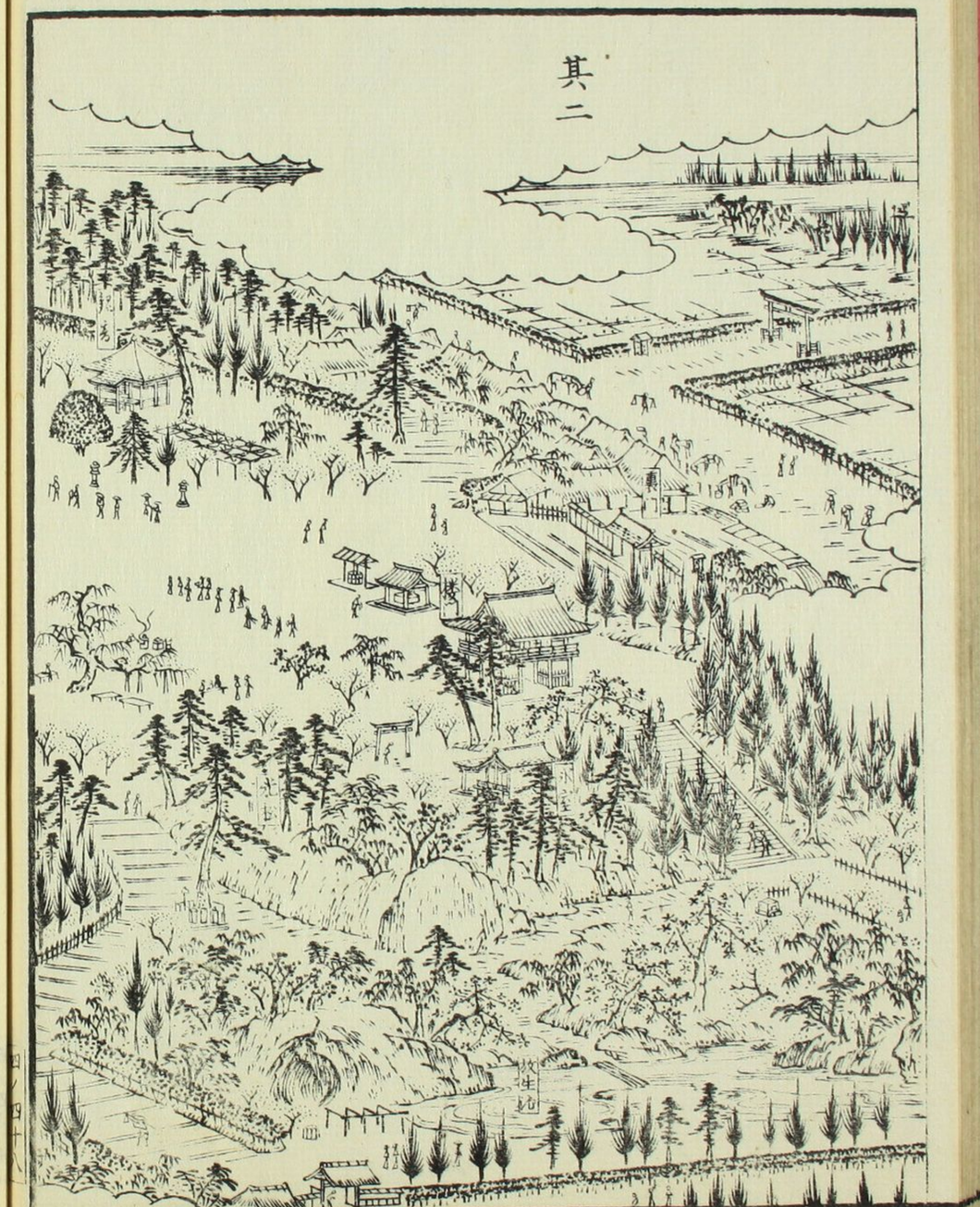


稲荷祠　境内ゝあり開山誓阿和尚ハ佛像を作りて浮く常ゝ吹革を吹革祭をなせしとなり今も此あゝ境内ゝ稲荷を勧請し十一月八日ゆゑ
その余風ゆゑ年々にもあり　垂枝櫻　本堂の前ゝあり菊岡沾涼云ゆゑ櫻
たゝえる小溝の流れをもつて豊島郡と荏原郡と名付しもの是なり附て云當寺境内ゝ横
の堺とせ當寺鐘の銘ゝあるを見るべし

金川　同所穴八幡の前を早稲田の方へ流る小川を云とあり　今ハ古川と唱へ
水源ハ戸山御庭中より發せるゝあり文明年間太田道灌遊獵の
時急雨ゝ逢しハ此地ゆゑ昔ハ川の幅も廣くしとあり　頃ハ加
奈川又加能川とも称るとあり　或ハ蟹川ゝ作る

高田八幡宮　牛込の總鎮守ゆゑ高田ゝあり　世ゝ穴八幡　此地を戸塚
と云　別當ハ真言宗ゆゑ光松山放生會寺と号ス　旧名ハ威盛院中
なり　祭礼ハ八月十五日ゆゑ放生會あり　之坊と唱へしと
旅所ハ牛込神楽坂の中腹ゝあり
社記云寛永十三年丙子清弓隊の長松平新五左衛尉源直次ゝ
與力の輩射術練習のゆゑ此地ゝ的山を築立る八幡宮ハ源家の
宗廟ゆゑ弓箭の守護神なれとて此地ゝ勧請せんを


拜殿
若宮
鐘楼
別當


其二

謀る此山ハ素より古松二株あり至頃山鳩来つゝ日こゝ此松の
枝上ハ遊ふを以て靈瑞とし假ハ八幡大神の小祠を營こゝに
件の松樹を神木とす　南向亭云ク此地ハ日早稲田邑の地中島とかゝ此地ハ
青柳津六兵衛とかつる富民あり往古北条家ハ住へし
七ツ寺人の持佛へ此地昔ハ阿弥陀山と呼来りしとあり云れと其
山林ハ所以を知者なかりしハ同十八年辛巳の夏中野宝仙寺秀雄法
印の會下ハ威盛院良昌とかつる沙門あり周防國の産ハ山口八
幡の氏人なり　幼くして毛利家の侍榎本氏ハ仕へし榎本氏ハ後十
九歳の年遁世し高野山ハ登り宝性院の法印春山の弟
子となり一紀の行法をとけ二十一歳の時より諸國依く此沙門を迎つゝ
修行の志を発し間さゝの奇特をあらハせりとかゝ
社僧なり故ハ同年の秋八月三日草庵を結ふとゝく山の腰を
切開時ハ八幡の靈嵐を得うとの嵐中石上ハ金銅の阿弥陀の
靈像一軀たせめへり　丈長三寸八幡宮の本地ハ云ク也山の号に捐
應を以て奇ありとも　又八幡の号こゝハ起り其地今猶坂の傍ハ有　又此日　将軍家
御令嗣　厳有公　御誕生あり　ハ衆益靈威を志る　江戸名所記ハ云
同年八月九日

社頭の境ハ一町四方ハ縄張し地を開き本社を八神ハの松の本ハ迄八重垣を結
まゝ八る時加州大守数百の人歩を贈り地を築固めむ依く日あり成就
同十四日社宮の式を執りすれ平新五左衛尉ちかの人を引供し的山の辺より是を
幕を張式正の小的を建る神的ハ射法あれハとて小的の阿某ら子十二歳ハ
動むと云ふ後元禄年間今のゝく宮居を御造営ありく結構備ふり
云云　南向亭茶話ハ　厳有公殊ハ當社を御崇敬あり御宿願の御満あるの後當社を
南向亭ハ云ク　裏門ハ内藤豊前守曽賢堂ハ松平左近将監手水垣ハ増山兵部少輔
営せしる　裏門ハ内藤豊前守曽賢堂ハ松平左近将監手水垣ハ増山兵部少輔
寄進すとあり又江府神社略記及ひ和漢三才図會等の書ハ元禄年中
棟昌院殿ハ再興あり云ク

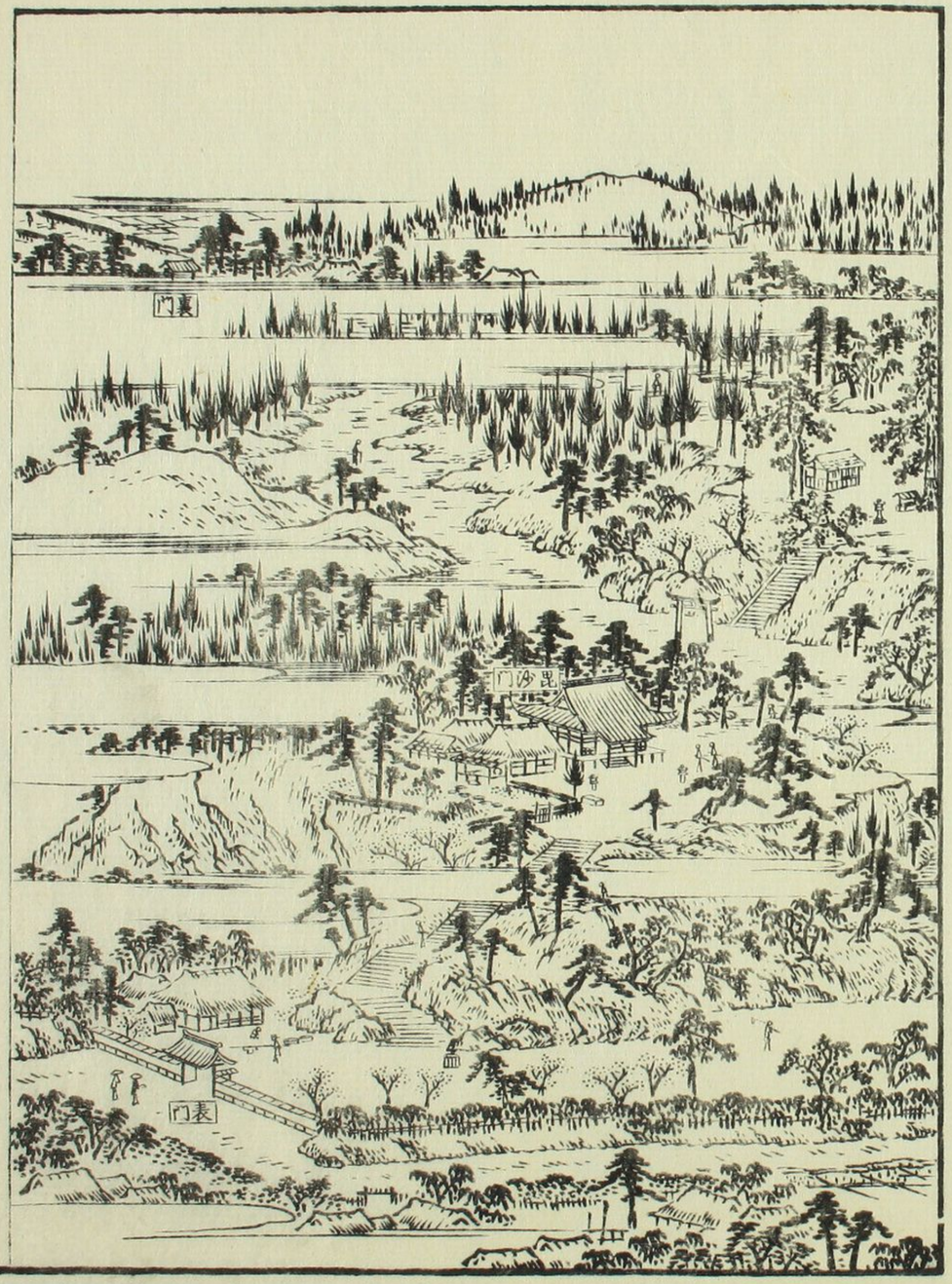
若宮八幡宮　本社の前左ハあり

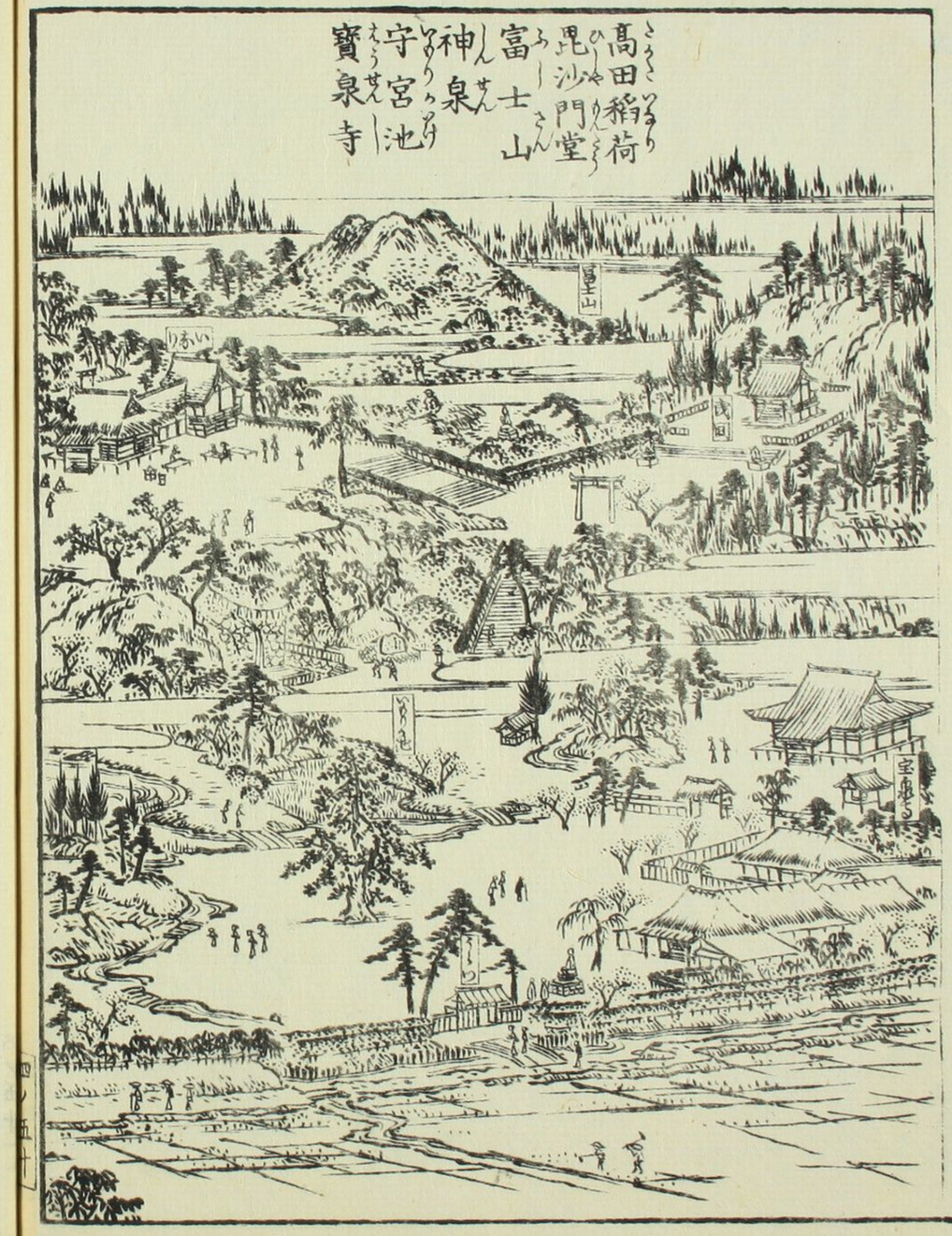
東照大權現　同所ハ並ハ毎年四月十七日泰拝の人多し

氷室明神祠　元禄二年十二月二十二日牧村氏直良十六歳ハ本社ハ相對す盛德と
三年正月二日金峰の住人渡辺氏是善霊夢の應ありく此神を祭る直良此神ハ
祈願しく平愈も同七年の頃始てこゝハ鎮座せしめ祠を建
光松　別當寺と本社との間坂の支路ハ南向亭云ク此地昔ハ松樹繁茂せし山林
ある中一株の松あり暗夜ハ光を現せ樹を称し光り松と云
とそ又寛永十三年始く當社八幡宮勧請の頃此樹上ハ山鳩来り遊ひしと云云

放生池　石階の下ハ清水の谷ハ鷹ヶ巣の腰ハ清泉あり実ハ寺持と云

出現所　坂の半腹絶壁ハ往古の靈嵐の旧址なり近頃迄地ハ出現堂と
号け九品佛の中下品上生の阿弥陀如来の像を安置せし堂宇あり今ハ尽


裏門
毘沙門
表門


高田稲荷
毘沙門堂
富士山
神泉
守宮池
寶泉寺
富士山

能舞臺址　本社の左の方ゆゑ今樓を存ずるのこと寛延三年庚午三月觀世太夫一代能を奥行せし跡ありとかや

抑當社の別當寺を光松山と號ずるも神木の奇特ゆゑなるべし

神と君との道直ゆゑに治る世代の濁りなく石清水の清き誓ひ

家もまたを思ひれる殊更元祿の頃世再興ありしより和光の神

德日くゆ顯はれ昭然なり

高田稻荷明神社　同所八幡宮より右の方道路を隔てあり戸塚村の

産神と称す故ゆ戸塚稻荷とも呼べる本地佛聖觀世音ハ南都德一

大師の作あり相傳ふ當社の權輿ハ最久遠なりしゆ文亀元年辛

酉上杉治部少輔入道朝良南向亭靈夢よ依て宮居を再興し

戸塚村の地を社領ゆ附せる當社ゆ古き棟札を藏せ文ゆ云く天文十九

坊秀宝大工与左衛門同左衛門五郎と号ず按ゆ牛込主膳時國再興別當宝泉

上州大明氏の後裔武州牛込ゆ住し天文二十四年氏を牛込ゆ改むるとかや家

系ゆ牛込宗參寺の傳記よ載せうるゆ時代を合せ考へれハ大明氏も天文十

九年の頃ハ牛込氏ゆ改めうし時なり然れハ此ゆ時國とのハ自ら別の人ゆ

狐他日訂正ス

後元祿十五年壬午四月靈告ありて榎の控より

靈泉涌出す眼疾を患ふる者此靈水を以て洗ふに忽ち奇

驗あり仍土俗當社を稲荷とも称せり毎年二月初午日

奉射あり祭祀八九月九日なり

神泉　社前榎の控より湧出ずるを

毘沙門堂　同境内小高き丘の上あり本尊毘沙門天王の靈像

慈覚大師の作ゆて武藏守藤原秀郷の念持佛ありとかや

相傳ふ慈覚大師江州唐崎の濱ゆ至りて川の苗を拾ひ得ゆ

内ゆ出長一寸八分の多門天の靈像あり大師随喜して自身を念

持佛とす仁壽年間田里下野國ゆ下り佐野の大慈寺ゆ入りゆ

出長二尺五寸の多門天像を彫刻あり先の靈像を胎中ゆ竜ゆ

ありしを天慶中武藏守秀郷平將門を征

伐の後此地よ移しうるとかや

毘沙門天兜の上ゆ現しるを自ら模し彫むとあり寺傳ゆ異なり

紫の一本といふ冊子ゆ秀郷將門を退治せるの時深く毘沙門天を念じ

拜殿ゆ掲ずるゆの多聞天の額ハ長崎

道栄の筆なり其傍に朝日庵と云ありて眺望尤幽雅なり此地の時鳥ハ世に勝れて早く啼ゆゑに其名を得たり

旗立桜は同じ堂前石燈籠の側にありて今ハ若木なり 或人いふ秀郷此所に旗を立たるとも又ハ此地昔新田家陣営の旧址なる由云伝へて旗立桜背掛の梅抔云もありて稲荷の社前池の辺にありしが枯て後植つぎぬとぞ 南向亭茶話に云旗立桜ハ桜の一種にて帆立桜とて單六瓣のものあり中に瓣一ツ別に帆を立たるやうなる故に帆立桜と唱へり土人誤りて旗を立しといふ

舟繋松は同じ堂後山の中腹にありしが是も今ハ枯たり 昔大将軍家此地の御遊猟の頃此松の齢を問せらる寺僧某凡千年に及へる由答へ奉りけれハ千年松と唱ふへき旨鈞命ありしとあり 舟繋松のことは第五巻目日暮青雲寺の条下に詳なり

宇宮池も同じ山下にあり 水中に蝌蚪多し故に此名あり 寛永の頃此池のほとりに遊びて

禅英山宝泉寺 稲荷と毘沙門両社の別当寺にして天台宗東叡山に属せり開創の年歴未考へず本尊薬師如来の像ハ伝教大師の作なり 或人云花洛鞍馬薬師と同躰なりといへり 文亀元年辛酉上杉治部少輔朝良 或云朝興 霊夢を感じて後稲荷の宮居を再興し又当寺を創建して大檀那となる 禅英とハ朝良の法号なりとぞ 其後天文十九年庚戌牛込

主膳時国といへる人宮社寺院等を重修せしよし棟札に記せり

当寺に楠正成の兜と称するものあり 裡に越前國豊原住人貞生作と彫付てあり 又信玄の兜をも蔵す

常念仏堂ハ構の外にあり本尊阿弥陀仏の像ハ聖徳太子の作なりといへり 堂内に銅像の地蔵尊を安ず

高田冨士山 稲荷宮の後にあり巌石を畳むで其容を模擬す 安永九年庚子に至り成就せしとあり 此地に住める冨士山の大先達藤四郎といへる者これを企てつくりしといふ 毎歳六月十五日より同十八日まで山を開きて参詣をゆるす 山下に浅間宮を勧請してあり

宗良親王陣営旧址 宝泉寺の山林を指て其旧跡とす 後村上帝の正平七年壬辰新田家信濃宮宗良親王を供奉して武蔵野合戦ありし時の陣営の旧址なりといへり 宗良親王ハ後醍醐帝第三の皇子にして信濃の宮と申奉る

新葉集雑

あつまの方に久しくはへりてひたすらもののふの道にのみたつさはりつゝ征東将軍の宣旨なと下されしもおもひの外なるやうにおほえてよみ侍りし

おもひきや手にもふれさりし梓弓おきふし我身なれむものとは　宗良親王

おなし頃武蔵国へ打越て小手指原といふ所にありけるに いさゝかあるへきよし聞えしかは その心をおもひつゝけ侍りし

君のため世のためなにかをしからむすてゝかひある命なりせは　同

十一ノ冊 四ノ五十三